

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第612集

ひ がん でん 彼岸田遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

彼岸田遺跡発掘調査報告書

2013

2013

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
(公財)岩手県文化振興事業団

彼岸田遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業に関連して平成22年度と23年度に発掘調査を行った奥州市前沢区白山字彼岸田に所在する彼岸田遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に平安時代の集落跡の存在が明らかになりました。また平泉藤原氏の時代の遺構や遺物などが発見されたことは地域の歴史を解明していく上でも重要な成果となります。他にも近世の遺構や遺物が見つかっており、長きにわたりて生活に利用されていた場所であることも判りました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県県南広域振興局農政部農村整備室や奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財团法人岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例　　言

- 1 本書は、岩手県奥州市前沢区白山字彼岸田における彼岸田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は「経営体育成基盤整備事業白山地区」に関連して、岩手県県南広域振興局農政部農村整備室の委託を受け(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時）が実施したものである。
なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。
- 3 本調査に関わる期間・調査面積は下記の通りである。
 - (1) 発掘調査　平成23年6月6日～平成23年11月4日
 - (2) 整理作業　平成23年12月1日～平成24年3月31日
 - (3) 調査面積　3,742m²
- 4 現地調査は、西澤正晴・高橋麻依子が担当した。整理作業は西澤が担当し、高橋が補佐した。
本書の執筆・編集は西澤が行った。
- 5 遺物番号は、種別にかかわらず連番を付している。写真図版に記した番号は本文中の遺物番号に対応する。
- 6 陶磁器の分類には、太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』、森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県九州陶磁文化館、大橋康二 1989 「肥前陶磁」ニューサイエンス社などを参考にした。
- 7 現地調査にあたっては、世界測地系 平面直角座標系Xを基準に準拠した。本書で用いる方位は国土座標に基づく座標北を示す。標高は東京湾平均海面（T.P.）+値を使用しているが、本文ではとくに断りのない限り「T.P.+」の記載を省略している。
- 8 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 9 今回の調査に関わる成果についてはこれまで公表された資料がいくつかあるが本書が優先する。
- 10 調査にあたり、下記の方々及び機関のご教示・協力を得た。
奥州市教育委員会、奥州市前沢総合支所
- 11 調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の位置	2
2 周辺の地理・地形的環境	2
3 周辺の遺跡とこれまでの調査	6
III 調査と整理の方法	6
1 野外調査	6
(1) 調査方法	6
(2) 調査経過	10
2 室内整理	11
3 基本層序	11
IV 調査成果	17
1 概要	17
2 遺構	18
(1) 掘立柱建物跡	18
(2) 堅穴建物跡	36
(3) 土坑	36
(4) 井戸跡	44
(5) 溝跡	44
(6) 不明遺構	52
(7) ピット(小穴)・柱穴	55
3 出土遺物	56
(1) 土器類	56
(2) 石器・石製品	62
(3) 土製品・金属製品	65
(4) 塗器	66
V 分析	67
1 彼岸田遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	67
2 彼岸田遺跡から出土した種実	71
VI 総括	73
1 遺構	73
2 遺物	74
3 まとめ	74
報告書抄録	144

図版目次

第1図 遺跡の位置 1	1	第25図 S B12平面図	34
第2図 遺跡の位置 2	3	第26図 S B12断面	35
第3図 周辺地形図	4	第27図 S I 01平・断面図	37
第4図 地形分類図	5	第28図 カマド拡大図	38
第5図 周辺の遺跡	7	第29図 土坑 1	40
第6図 彼岸田グリッド配置図	9	第30図 土坑 2	41
第7図 基本土層	11	第31図 土坑 3・井戸跡	43
第8図 遺構配置図 1	13	第32図 溝 1	45
第9図 遺構配置図 2	14	第33図 溝 2	46
第10図 遺構配置図 3	15	第34図 溝 3	48
第11図 遺構配置図 4	16	第35図 溝 4	49
第12図 S B01平・断面図	19	第36図 溝 5	51
第13図 S B01平・断面図	20	第37図 S X01平・断面図	53
第14図 S B02平・断面図	21	第38図 S X02平・断面図	54
第15図 S B03平面図	22	第39図 土器類実測図 1	57
第16図 S B03断面図	23	第40図 土器類実測図 2	58
第17図 S B04平・断面図	24	第41図 かわらけ・陶磁器類実測図 1	59
第18図 S B05平・断面図	26	第42図 陶磁器類実測図 2	61
第19図 S B06平・断面図	27	第43図 陶磁器類実測図 3	62
第20図 S B07平・断面図	28	第44図 繩文・弥生土器実測図	63
第21図 S B08平面図	30	第45図 石器実測図	64
第22図 S B08断面図	31	第46図 石器 2・石製品実測図	65
第23図 S B10平・断面図	32	第47図 土製品・金属製品実測図	66
第24図 S B11平・断面図	33	第48図 漆器実測図	66

表目次

第1表 検出遺構一覧	17	第7表 石器・石製品観察表	82
第2表 出土遺物の総量・内訳	18	第8表 土製品観察表	82
第3表 遺構別遺物出土量	77	第9表 金属製品観察表	82
第4表 土師器類観察表	79	第10表 漆器観察表	82
第5表 陶磁器類観察表	80	第11表 柱穴観察表	83
第6表 繩文・弥生土器観察表	81		

写真図版目次

写真図版 1 遺構 1 遺跡遠景写真（北から）..	93	2 遺跡近景写真3（北東から）..	94
2 遺跡近景写真1（南から）..	93	写真図版 3 遺構 調査区全景（直上）.....	95
写真図版 2 遺構 1 遺跡近景写真2（西から）..	94	写真図版 4 遺構 B・C・D調査区主要部拡大 ..	96

写真図版 5	遺構	1	調査前の状況 1	97		2	S K09断面	118	
		2	調査前の状況 2	97	写真図版27	遺構	1	S K10	119
写真図版 6	遺構	1	基本土層（B区）	98		2	S K10断面	119	
		2	基本土層（E区）	98	写真図版28	遺構	1	S K11	120
写真図版 7	遺構	1	A区全景（北から）	99		2	S K11断面	120	
		2	D区全景（南から）	99	写真図版29	遺構	1	S K12	121
写真図版 8	遺構		E区全景（南から）	100		2	S K12断面	121	
写真図版 9	遺構	1	S B01	101	写真図版30	遺構	1	S K13	122
		2	S B02	101		2	S K13断面	122	
写真図版10	遺構	1	S B03	102	写真図版31	遺構	1	S K14	123
		2	S B04	102		2	S K14断面	123	
写真図版11	遺構	1	S B05	103	写真図版32	遺構	1	S E01	124
		2	S B06	103		2	S E01半截	124	
写真図版12	遺構	1	S B07	104	写真図版33	遺構	1	S E01完掘	125
		2	S B08	104		2	S E01遺物出土状況	125	
写真図版13	遺構	1	S B10	105	写真図版34	遺構	1	S D01・02・03	126
		2	S B11	105		2	S D04	126	
写真図版14	遺構	1	S B12	106	写真図版35	遺構	1	S D05	127
		2	作業風景	106		2	S D06・07	127	
写真図版15	遺構	1	S I01検出状況	107	写真図版36	遺構	S D06		128
		2	S I01完掘状況	107	写真図版37	遺構	1	S D09	129
写真図版16	遺構	1	S I01断面1	108		2	S D17		129
		2	S I01断面2	108	写真図版38	遺構	1	S D10	130
写真図版17	遺構	1	S I01カマド	109		2	S D14A・B		130
		2	S I01カマド断面	109	写真図版39	遺構	1	S D15	131
写真図版18	遺構	1	S I01掘り方断面	110		2	S D15断面		131
		2	S I01カマド掘り方	110	写真図版40	遺構	1	S X01（東から）	132
写真図版19	遺構	1	S K01	111		2	S X01（南西から）		132
		2	S K01断面	111	写真図版41	遺構	1	S X01断面1	133
写真図版20	遺構	1	S K02	112		2	S X01断面2		133
		2	S K02断面	112	写真図版42	遺構	1	S X02	134
写真図版21	遺構	1	S K04	113		2	S X02断面		134
		2	S K04断面	113	写真図版43	遺物	土器類1		135
写真図版22	遺構	1	S K05	114	写真図版44	遺物	土器類2		136
		2	S K05断面	114	写真図版45	遺物	かわらけ・陶磁器1		137
写真図版23	遺構	1	S K06	115	写真図版46	遺物	陶磁器2		138
		2	S K06断面	115	写真図版47	遺物	陶磁器3		139
写真図版24	遺構	1	S K07	116	写真図版48	遺物	弥生土器1		140
		2	S K07断面	116	写真図版49	遺物	弥生土器2・石器		141
写真図版25	遺構	1	S K08	117	写真図版50	遺物	土製品・石製品		142
		2	S K08断面	117	写真図版51	遺物	鉄製品・漆器		143
写真図版26	遺構	1	S K09	118					

I 調査に至る経過

1 調査に至る経過

彼岸田遺跡は、「経営体育成基盤整備事業白山地区」の場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

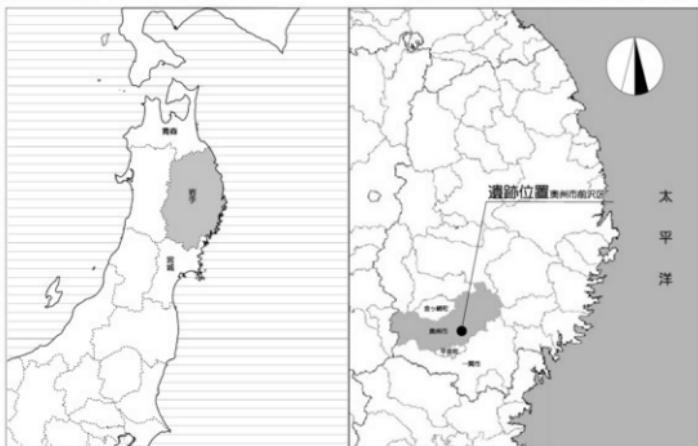
本地区は奥州市前沢区の中心部より北東4km程に位置し、現況は小区画・不整形な水田で、なおかつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。このため、本事業地区においては、大区画は場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年10月7日付県南広農整第137-4号から平成22年12月1日付県南広農整第123-10号「経営体育成基盤整備事業白山地区に係る埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年11月16日から平成22年12月17日にかけてそれぞれ試掘調査を実施し、工事に着手するには彼岸田遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成22年1月15日付教生第1268号から平成22年12月28日付教生第1193号「経営体育成基盤整備事業白山地区予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」によりそれぞれ回答してきた。

その結果を踏まえ、当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成22年9月10日付け及び平成23年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）



第1図 遺跡の位置1

II 遺跡の立地と環境

1 遺 跡 の 位 置

彼岸田遺跡は、岩手県奥州市前沢区白山字彼岸田に所在する。JR東北本線前沢駅の北東約2kmの位置である。国土地理院発行の5万分の1地形図「水沢」および2万5千分の1地形図「前沢」の図幅中に含まれ、調査区の緯度・経度上の位置は、北緯39度3分42秒、東経141度8分39秒付近である。

遺跡の所在する奥州市前沢区は岩手県南部に位置し、北上川低地帯の中央部にある。平成18年に旧水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村の2市2町1村による広域合併により奥州市となった。北は北上市・金ヶ崎町、南は一関市・平泉町と接している。面積では一関市に次いで県内2位の規模を誇り、人口約13万人（平成20年3月現在）を抱える都市となっている。

奥州市は北上川によりもたらされた肥沃かつ広大な土壤を活かした農業が盛んであり、江刺りんごをはじめとする農産物、前沢牛などの畜産物など全国的に也有名である。

前沢区は北上川西岸側にJR東北本線、国道4号、東北縦貫自動車道が、東岸側にはJR東北新幹線が縱断しており、平泉町との境には東北縦貫自動車道の平泉前沢インターチェンジが開設されるなど交通の要所でもある。

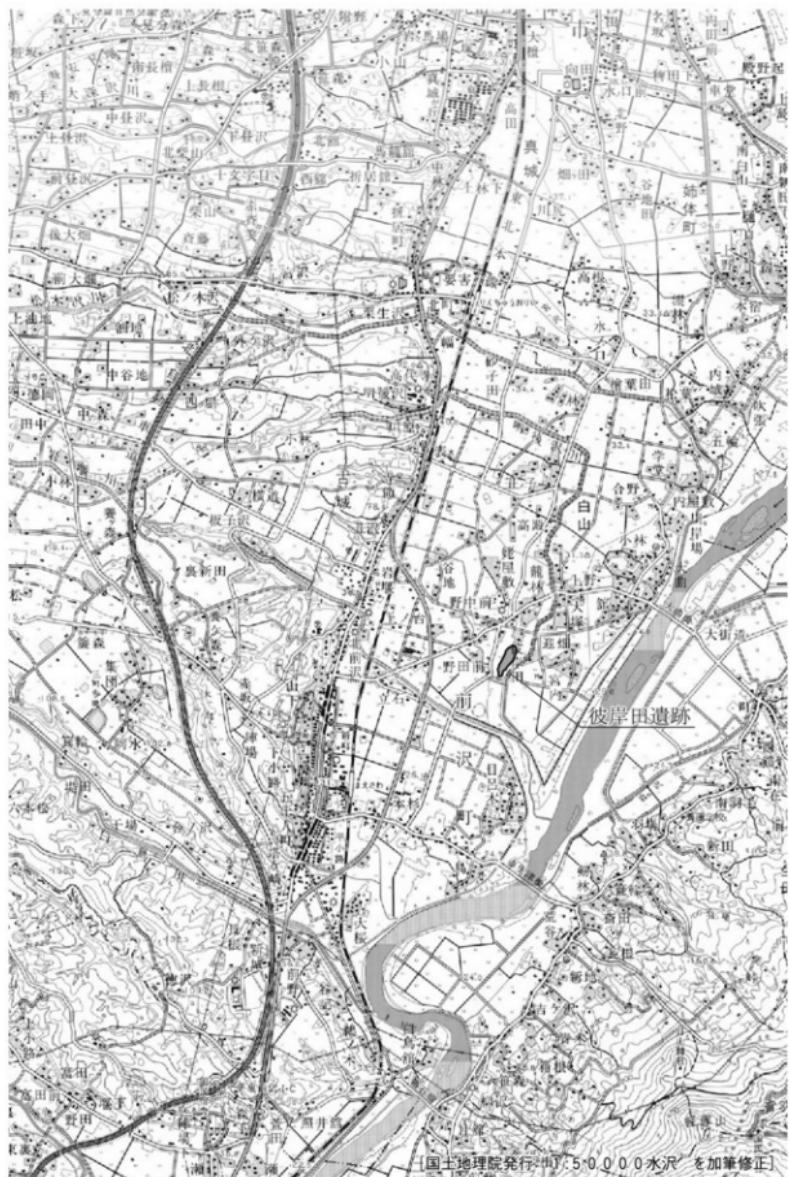
統計によれば、年間の最高気温は35.7℃、最低気温-14.4℃、平均気温は10.5℃であり、岩手県の中では比較的温暖な地域である。年間の降水量は1,153mmと県平均に近い。

彼岸田遺跡は、北上川の支流である明後沢川の西岸にある微高地（自然堤防）上に立地し、遺跡の現況は、水田や畑地であった。標高は27.5~28.5m前後であり、周囲の低地とは比高は2.5~3.5mである。

2 周辺の地理・地形的環境

前沢区の地形区分は、東部の北上山地西縁の山麓丘陵地区、北上川西岸に発達する沖積低地および低位段丘面を含む低地地区、西部に形成された段丘地区に3区分される。このうち北上川西岸には、流域最大規模の扇状地形が発達しており、日本でも有数の扇状地となっている。奥州市胆沢区市野々地区を扇頂とする面積約200平方キロに達する胆沢扇状地である。この胆沢扇状地は現在北側に東流する胆沢川の影響を受けて段丘化しており、高位から順に大歩段丘、一首坂段丘（西根段丘、以上高位段丘）、上野原段丘、横道段丘、堀切段丘、福原段丘（以上中位段丘）があり、これらの段丘を取り巻くように低位段丘である水沢段丘面が広がる。この水沢段丘は水沢高位段丘と水沢低位段丘に細分され、北常から北下巾付近にかけて南北約1.5kmの沖積低地が東西に走り、谷底平野を形成する。

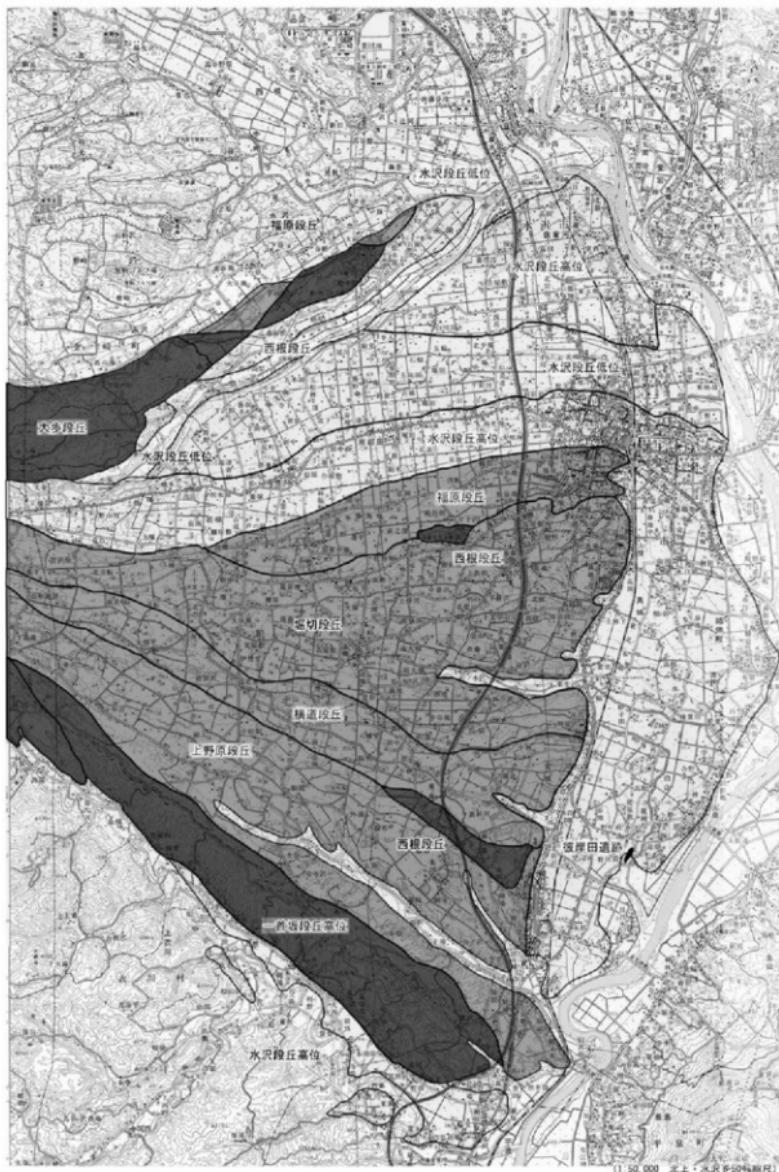
遺跡が所在するのは、先の3地区のうち低地地区にあり、水沢段丘面を含む地形でもある。この地域のうち、水沢区姉体地区から前沢区白鳥川にかけては、国道4号西側の段丘（ここが扇端になる）から流出した小河川による開析がすすみ、無数の沖積地を形成するとともに、開析により残された多くの微高地が存在している。低地地区にある遺跡の多くはこの微高地上に立地しており、彼岸田遺跡もそのひとつである。



第2図 遺跡の位置 2



第3図 周辺地形図



第4図 地形分類図

3 周辺の遺跡とこれまでの調査

北上川西岸の低地帯には数多く遺跡が存在する。先に触れたように、島状に残された微高地がこの低地に点在しており、多くの遺跡がその上に位置する。県営は場整備事業により、近年この地域では発掘調査が行われ、数々の成果が上げられている。

この地域の遺跡は北上川に合流するいくつかの支流によって分けられる。ここでは、おもに明後沢川とその南を流れる岩櫃川のあいだに展開している遺跡を中心に触れておく。

この地域には多数の遺跡が含まれるが、近年調査された遺跡には、北側より八反町遺跡、古城方八丁遺跡、水尻遺跡、四反田Ⅰ・Ⅱ遺跡、高殿遺跡があり、さらに南には安久沢東遺跡、田高Ⅰ・Ⅱ遺跡、彼岸田遺跡がある。八反町遺跡は、部分的な調査が多いものの、12世紀代の掘立柱建物跡、道路跡、井戸跡などが発見されるなど、この時期の遺構がまとまって調査され注目されている。古城方八丁遺跡は古代の堅穴建物跡などが検出され、石帶が出土するなど部分的な調査にもかかわらず有力な集落の一つといえる。四反田Ⅰ・Ⅱ遺跡、水尻遺跡は、明後沢川とはやや距離が離れて位置する。四反田Ⅰ・Ⅱ遺跡からは平安時代の堅穴建物や掘立柱建物が、水尻遺跡から平安時代の四面庇掘立柱建物が調査され、縁釉陶器も出土しており、また、渥美産陶器の出土もある。とくに、四面庇建物は官衙以外検出される例は少なく、単独に近い立地で集落内から発見される場合は寺院の可能性が高いと推定されるが、関連する遺物の共伴で裏付けなければならない。いずれにせよ、この遺跡周辺では平安時代の有力な集落が広がっていることが予想されるのである。

田高Ⅱ遺跡は、これまで2度の調査が行われており、縄文時代前期の集落跡のほかに、14世紀前後の堀で囲まれた居館跡や12世紀の井戸跡などが発見されている。掘立柱建物跡の復元までは至っていないが、鎌倉時代の居館跡がこの地域に存在していた事実は貴重である。県内でも数少ない事例となっている。また、12世紀代の遺構や遺物が少ないものの発見されたことも重要であろう。この遺跡内には、県道工事の際に壊された12世紀後半の経塚があるなど平泉期の痕跡も残されているのである。

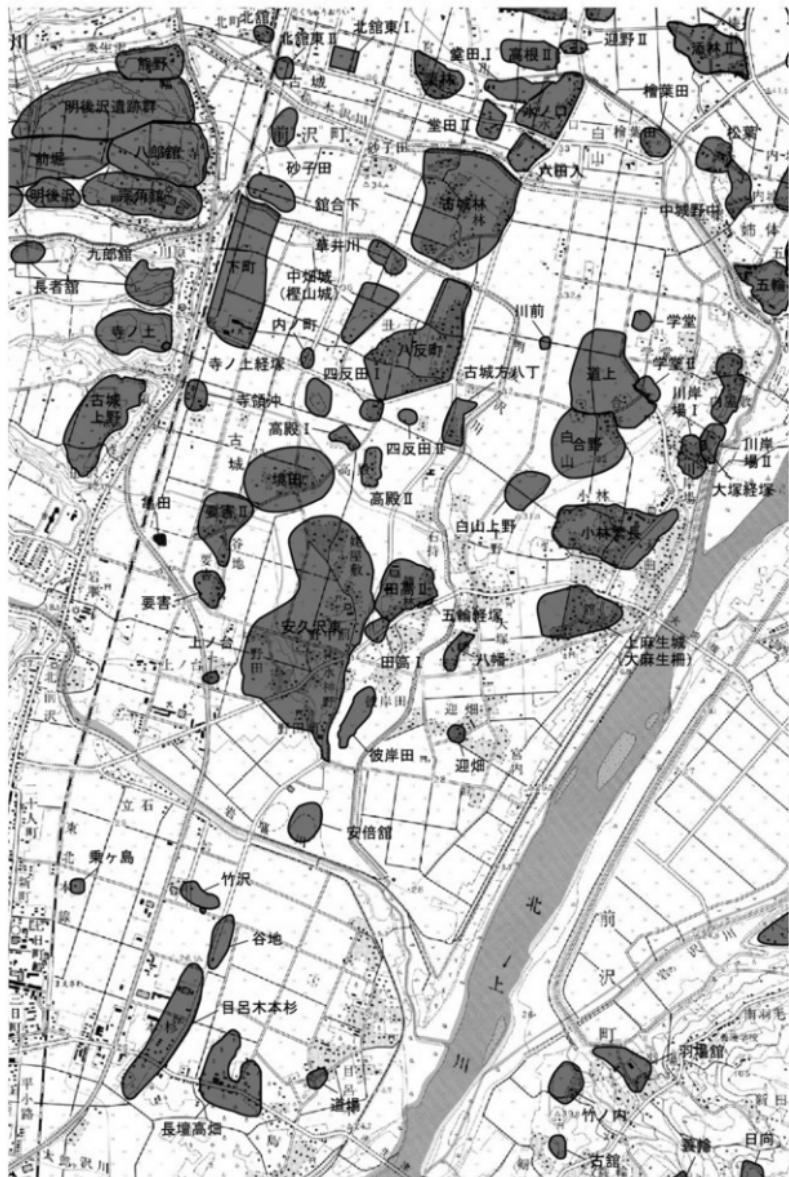
安久沢東遺跡は今年度調査分も含めると3度の調査が行われている。近世墓や近世屋敷跡も多く見つかっているが、12世紀代の掘立柱建物跡や国産陶器などが確認されている。彼岸田遺跡周辺はとくに12世紀代の遺構や遺物が濃密に分布していることがわかる。これまでこの地域では、遺物の散布がみられるに過ぎなかつたが、遺構を伴う例も増えてきており、近年の調査の増加によって、12世紀代の遺構や遺物が発見され続けており、平泉文化の広がりがより具体的に明らかになりつつある。

III 調査と整理の方法

1 野外調査

(1) 調査方法

グリッド 遺構の測量や遺物の取り上げなどの作業に際し基準としてグリッドを設定している。グリッドは、今回の調査区全体を覆うように設計した。グリッド原点は、北西隅を起点とし、座標はX = -104000, Y = 26900とした。設定に際し、以下の3級基準点を打設し（委託）、それを基準とし



第5図 周辺の遺跡

て9本の区画杭を設置し、発掘調査の測量を行っている。

基準1 (K301) X=-104118.244 Y=26914.504 H=27.326

基準2 (K302) X=-104210.837 Y=26945.126 H=26.920

グリッドは100m四方の大グリッドを設定し、それを東西25、南北25個の小グリッド（4m四方）に分割して使用している。グリッド名称は大グリッド（100m四方）の東西を西からA・B・・・、南北を北からI・II・・・とし各グリッドの北西隅をそのグリッド名称とした。小グリッドは東西を西からa・b・・・yまで、南北を北から1・2・・・25とし、大小グリッドの名称を組み合わせて使用している（例、IA1aなど）。グリッドはおもに野外調査時の遺物の取り上げに際し使用しており、適宜細分して使用した。室内整理作業段階ではそれを座標に置き換えて使用するが多く、本書でも同様に扱った。

基準点の震災による影響 平成23年3月11日の東日本大震災の影響により、遺跡周辺の基準点に大幅なずれが生じている。彼岸田遺跡の調査は6月からであるため、国土地理院による震災後の補正後の座標数値を使用している。したがって、昨年度までの周辺地域の調査とは、座標値や水準値が異なっていることには注意が必要である。

調査区割付 調査区は細長いものの広い範囲に渡っているため、便宜的に調査区を区割りしている。南端部をA区、西端部をB区、中央部をC区とし、東端部をD区としたが、中断後調査を開始した北側については別にE区としている。この区割りについては現地調査のみならず、本書においても使用している。

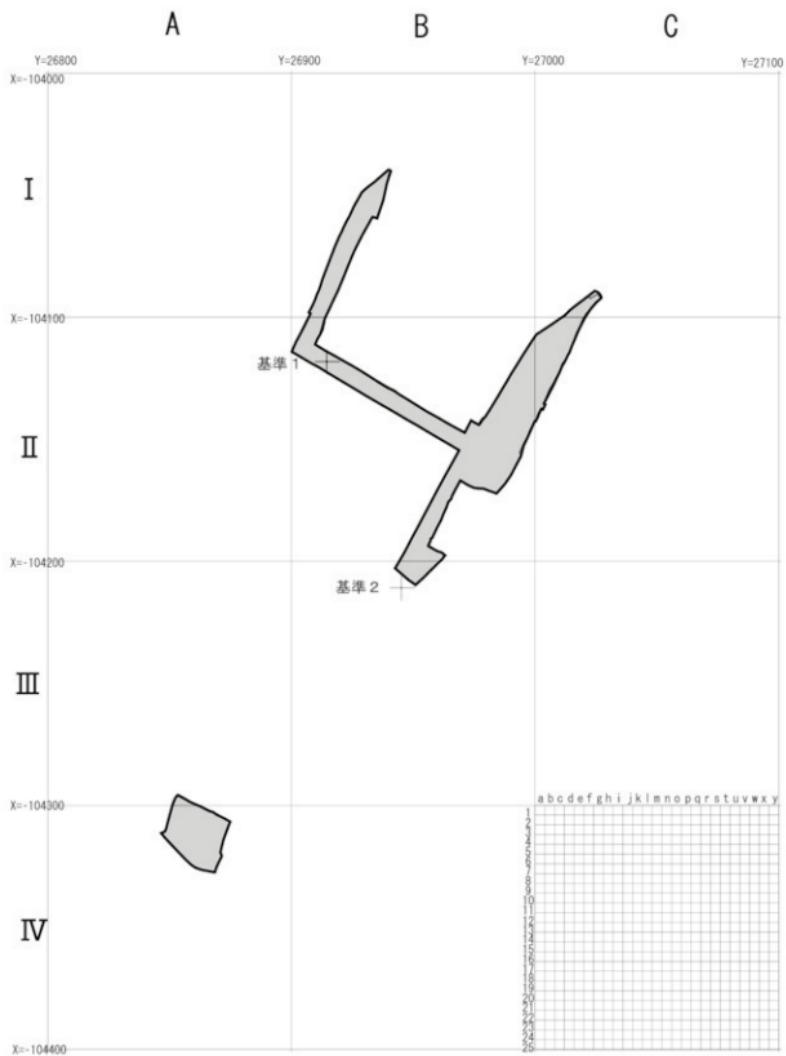
表土掘削・遺構検出 調査区は水田や畑作地、牧草地であった。調査にあたってはまず、背丈に伸びた牧草を刈ることからはじめた。その後、トレーナチを設定し、遺構検出面までの深さ、遺構密度等を確認する作業を行った。それにより、調査区のうち比較的標高の高い範囲は、表土直下が検出面となることが判明し、また柱穴を中心とする遺構の広がりが確認された。地形が下がった標高の低い部分は黒褐色土の広がりが確認できた。そのため、この高さを基準にして、それより上位層を重機によって除去した。表土の除去にあたっては、バックホウを使用し、調査員の指示のもと掘削を行っている。表土の除去後は、作業員によって鋤簾（ジョレン）などの道具を使用して遺構確認（検出作業）を行い、遺構を検出した。

遺構精査・記録 検出作業によって確認された遺構については、半裁や土層観察用のベルトを設定し、土層を観察しながら掘削をおこなった。実測図や写真などの記録を行った後に完掘を行い、記録を追加した。記録作業のうち、平面図の実測は電子平板システム（「遺構くん」（株）キューピック製）を基本に、簡易遣り方法による実測を併用しながら行っている。写真については6×7判カメラ（モノクロ）とデジタルカメラ（キャノン EOS5D）を中心に撮影を行った。調査区全景写真撮影に際してはセスナ機による撮影を委託している。6×7判フィルムについては現像して、アルバムに保管し、デジタル写真についてはRAW画像を当センターの写真専用HDDに保管している。

遺構名称 野外調査時には、検出した順に、S D01、S B01など下記の略号を使用して遺構名としている、遺物の取り上げについても、その略号を使用した。本書でも使用し記号は下記の通りである。

S B	掘立柱建物跡	S I	竪穴建物跡	P	柱穴	S K	土坑	S D	溝跡
S E	井戸跡	S X	焼土・炭化物集積	S X	不明遺構				

その他 野外調査は6月6日より始まったが、農作業との関係で9月1日より調査を中断している。



第6図 彼岸田グリッド配置図

再開は10月11日からあり、11月4日まで調査を行っている。

(2) 調査経過

- 6月6日 調査開始。器材搬入、現場設営を行う。
- 6月7日 調査区付近の草刈り作業を中心に行う。試掘トレントの設定も合わせて行う。
- 6月8日 試掘トレントと並行して、重機による表土掘削を開始する。以降13日まで1回目の表土除去を行う。
- 6月14日 飛び地であるA区の検出作業を開始する。
- 6月20日 A区の遺構検出作業がほぼ終わり、土坑など若干の遺構の精査を行う。残りの調査区の重機による表土除去を再開する。
- 6月28日 B区の検出作業を行う。
- 7月1日 B区の検出につづき、C区の検出も行う。
- 7月12日 重機による表土除去がほぼ終了する。検出作業は続いているが、調査区の大部分で柱穴が広がることがわかつた。
- 7月16日 各地区で遺構精査を開始する。柱穴の精査は、建物の検討を経た上で行うため、土量の割には時間がかかる。
- 7月21日 各地区に分散して精査を進める。堅穴建物跡の精査も開始する。並行して、平面図や断面図の作成が行っている。
- 7月25日 南東斜面（D区）に窯跡状の不明遺構の精査をはじめる。当初は窯跡を想定して精査を開始した。県教育委員会による終了確認が行われる。
- 7月30日 D区の不明遺構は、調査が進むうちに窯跡の可能性は低くなつたが、12世紀代の国産陶器片やかわらけ片の出土が増えてきた。
- 8月8日 調査は柱穴の精査が中心となる。
- 8月23日 現地公開。参加者13名となり、地元の方々が中心に現場を訪れてくれた。
- 8月25日 県教育委員会による終了確認が行われる。
- 8月31日 現在調査を行っていた範囲の調査は終了した。未着手の部分は農作物の刈りとり後となるため一時中断する。
- 10月11日 調査再開。重機による表土除去を行う。
- 10月17日 作業員を入れて、検出作業を開始する。
- 10月24日 検出作業がほぼ終了し、遺構の精査をはじめる。遺構は掘立柱建物を中心に、土坑や溝跡、井戸跡が検出された。
- 10月27日 井戸跡は石組みであり調査は難航し、最終日まで継続した。北端では、当初土坑と思われた遺構を精査し始めたが、輸入陶磁器や国産陶器が出土し、様相が異なってきた。遺構の大部分が調査区外にあることから、全容は不明のままであったが、掘跡の可能性も考えていた。
- 11月4日 東側斜面の包含層からは弥生土器の出土もあったが、撤収時間までに掘り終えた。撤収作業を行い、調査はすべて終了した。

2 室内整理

室内整理作業は、野外調査終了年と次年度に都合3回に分けて行った。2次調査の室内整理は平成23年3月1日から平成23年3月31日までと、平成23年8月22日～平成23年10月31日まで、3次調査の室内整理は、平成23年12月1日から平成24年1月31日まで行った。

遺構 平面図を中心に電子平板で作成したため、コンピューター上で合成・修正・図版組を行った。全体図を作成したのち、各遺構図を切り抜いて図版作成を行っている。

遺物 水洗後に注記→接合→実測→トレース→写真撮影→図版作成の順で作業を行った。土器・陶磁器類は破片が多く、実測可能な遺物の割合は少ない。これらは、反転復元不可能な遺物については実測を行っていない。ただし、いわゆる中世陶器や輸入陶磁器については出土事例が少ないため、反転復元が不可能であっても、可能な限り掲載している。

石器については、トゥール類を中心に掲載している。金属製品は、今回の遺物のうち量的に多数を占める。金属製品についても図化可能な遺物については極力図化を行っている。なお、遺物の実測については、従来通り、室内作業員による実測→ロットリングペンによるトレース→台紙上の図版組という方法で行っている。

写真撮影 遺物の撮影は、当センターの写真技師により、デジタル画像を中心として撮影を行っている。本書で使用するほか、保管用ディスクに保存している。

3 基本層序

調査区は平坦な微高地上にあるため、基本層序は単純である。しかしながら、農地として利用されていたため、度重なる土地改良が行われ、本来の土層堆積が確認できる地点は少なかった。以下は、東側斜面にみられた比較的良好な堆積状況での層序であり、これを基本層序としている。

I 層 表土（現耕作土）である。

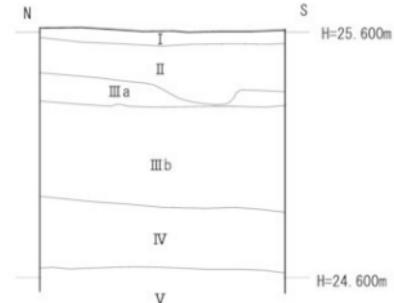
II 層 盛土である。

III a層 灰オリーブシルト 5Y5/2 締まりが中程度、粘性はやや弱い。東側斜面部で確認される。土師器片や繩文土器片が混合するなど、再堆積の様相を示すことから、盛土の一部の可能性がある。調査時ではこの層を除去して、遺構を確認している。

III b層 黄褐色シルト 10YR5/2 締まりがやや強く、粘性は中程度である。東側斜面部で確認される。近世段階の堆積土あるいは整地土である。遺構確認面としている。

IV 層 黒褐色シルト (10YR3/1~2/2) 締まりが中程度で、粘性がやや強い。部分的に弥生土器を包含するところがある。

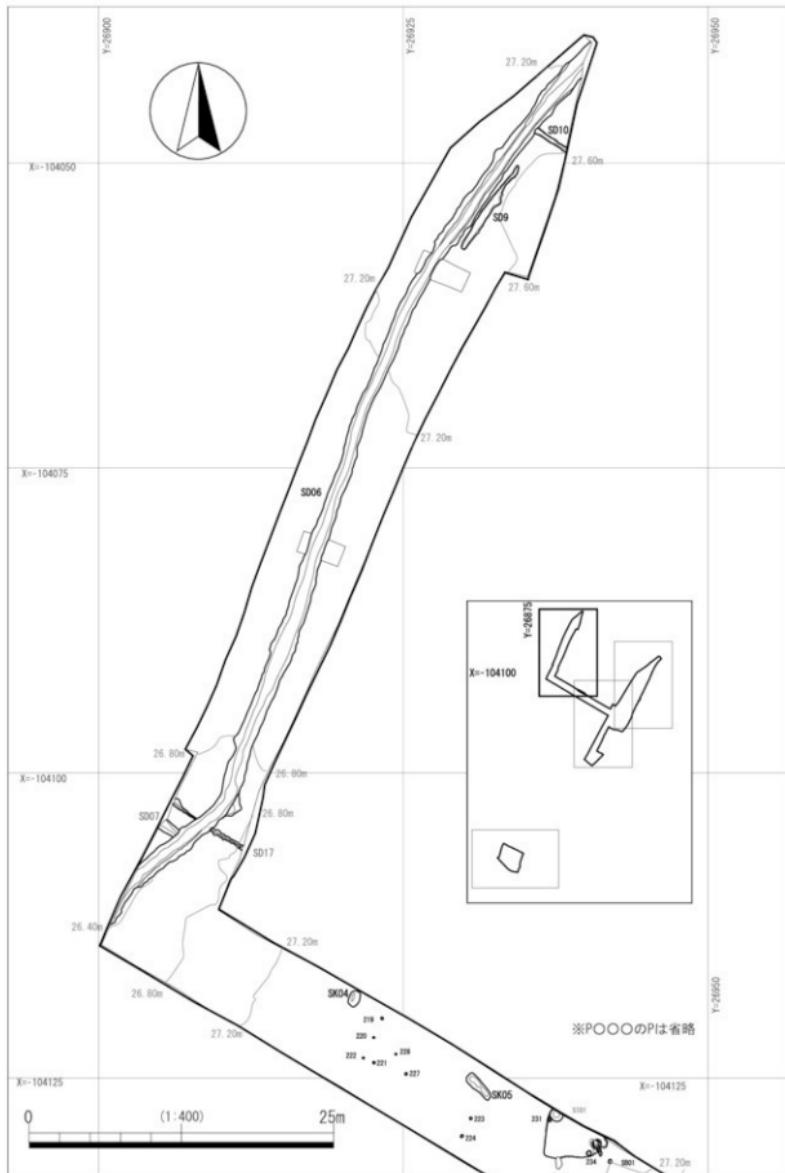
V 層 黄橙色粘土～粘土質シルト 締まり、



第7図 基本土層

粘性ともにやや強い。いわゆる地山である。多くの地点ではここを遺構確認面とした。斜面以外では、表土直下がこの層となる。

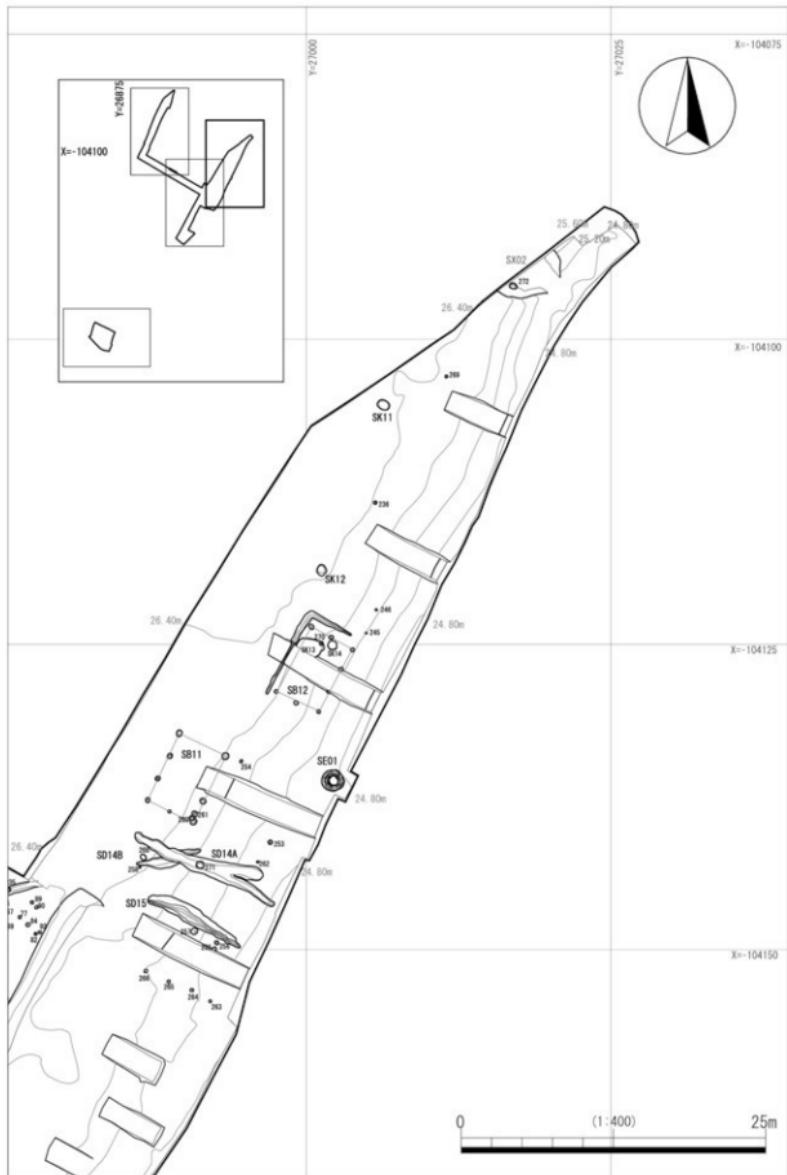
I層は表土であり、現在の耕作土である。II層は、III～V層のブロックを含んだ混合土であり、斜面上の平坦部をつくるために、削り取った土砂を斜面に排出し、盛土としたものであろう。この層中には各時期の遺物が混合していることからも裏付けられる。III a層は、比較的均質な層相であるため、本来の堆積を示している可能性も残るが、東側斜面でしか確認できないことや、遺物が新旧混ざることなどから、これも盛土の一部と捉えた。したがって、III a層の残る範囲ではこれを除去し、遺構の確認を行っている。III b層以下が、本来の堆積状況を示していると考えられるが、多くの地点ではI・II層によって壊されている。したがって、調査区のうち東側斜面部や西側斜面部の一部を除き、表土直下がV層となる。



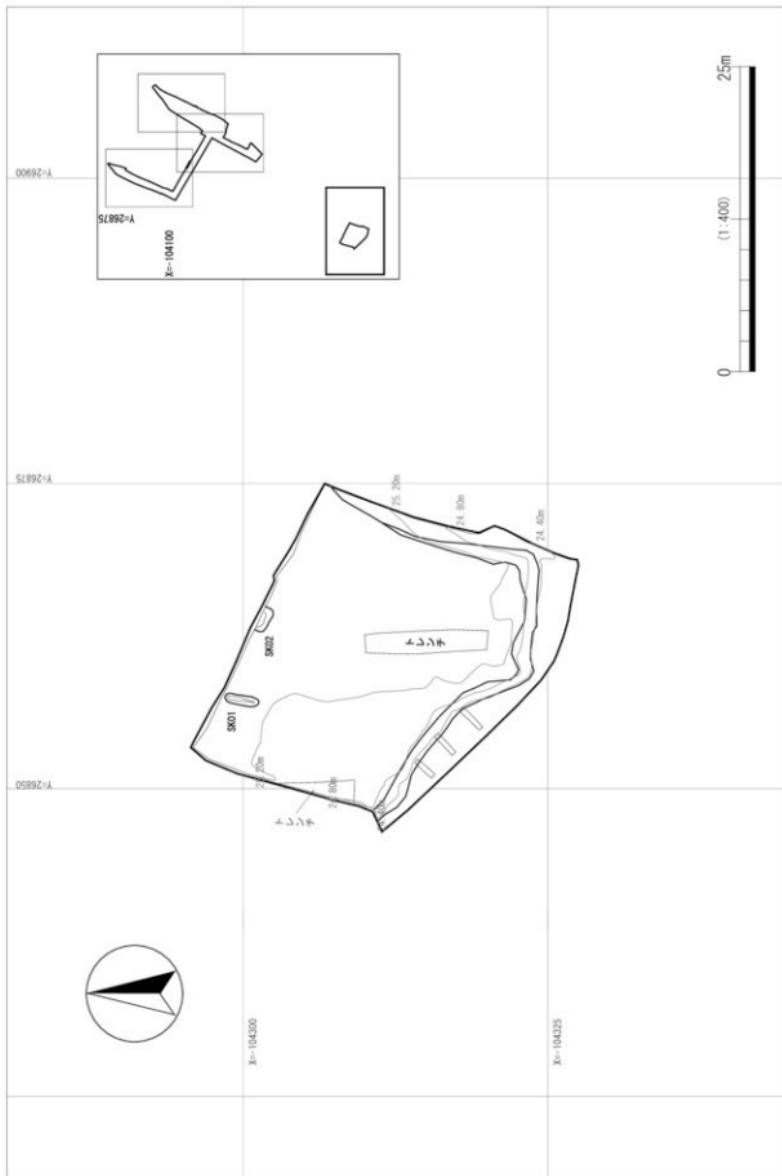
第8図 構造配置図1



第9図 構造配置図



第10図 遺構配置図3



第11図 遺構配置図 4

IV 調査成績

1 概要

概要 調査は、経営体育成基盤事業に伴う3,742m²を対象としている。遺跡は、ほぼ南北に細長く延びる舌状の微高地に立地しており、周囲とは比高が約3~4mある。この微高地全体が遺跡推定範囲として現在認定されている。南北に約350m、東西の広いところで100mである。今回の調査区は、この南北に延びる舌状の微高地の東西の裾部、中央を東西に横断する部分、南端部に設定されている。中央に設定された調査区以外はすべて、遺跡の周縁に相当し、いずれも周囲の低地に向かって緩やかに傾斜している。また、ほ場整備工事によって道路や水路となる範囲であるため、ほとんどが細長い調査区となっており、斜面部を除き、多くは幅7m程度である。したがって、多くの遺構は調査区外に広がっており、今回の調査区内で完結する遺構は少ない。調査の結果、A~C区は微高地上の平坦地であり、D・E区は平坦地から斜面地を含んでいる。これらの調査区の東端は斜面地であるため黒褐色シルト層(IV層)が残存していた。トレンチを計8本入れV層上面を確認したが、急傾斜地であることや遺構が見つかなかったため、トレンチ以外はIV層上面で調査を終えている。

遺構 今回の調査区では、南端(A区)では土坑が3基分布するのみであり、遺構の密度が低い。IV層が残存しているにもかかわらずこの状況のため、南端部は遺構が少ないと可能性がある。遺構は中央部(C区)と東端部(D・E区)に集中している。中央部には竪穴建物跡や掘立柱建物跡が分布し、東端部の斜面にも掘立柱建物や井戸跡が分布している。時期は不明のものが多いが、出土遺物からみると平安時代(平泉期を含む)や近世が中心である。今回の調査区外であるC区の南北側は、まだほとんど未調査であるが、この区域に掘立柱建物跡を中心にかなりの密度で広がっていることが予想される。岩手県教育委員会が行った試掘調査(岩手県教育委員会2011)でも、この範囲に柱穴が広がっていることからもそれが裏付けられよう。西端(B区)では、溝跡が微高地に沿っているほかは遺構の密度は少ない。したがって、調査した範囲においては、南北に延びる舌状の微高地の中央から東端にかけてよく利用されていたことがわかる。

今回の調査で検出した遺構をまとめると表1の通りである。

第1表 検出遺構一覧

遺構名	数量	時期
掘立柱建物跡	11	平安3、江戸2、不明6
竪穴建物跡	1	平安1
土坑	13	繩文4、平安1、12世紀1、不明7
井戸跡	1	江戸1
溝跡	15	平安1、12世紀3、江戸5、不明6
不明遺構	2	12世紀2

遺物 遺物は総計35.1kg出土している(表2)。土師器・須恵器などの古代の土器類が13.6kg(39%)、国産陶器類が3.2kg(9%)、輸入陶磁器が0.092kg、弥生土器が10.8kg(31%)、石器・石製品が19.9kgであり、出土遺物のうち70%以上を繩文・弥生と古代の土器が占める。このうち、12世紀に関連する遺物が比較的多く出土していることが注目される。

<文献>

岩手県教育委員会2011『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成21年度）』岩手県文化財調査報告書第132集

第2表 出土遺物の総量・内訳

種別	縄文・弥生土器	土師器	須恵器	かわらけ	国産陶器	貿易陶磁器	近世陶磁器	石器・石製品	金属製品	その他	合計(g)
重量	10774.2	11231.5	2331.7	1212.6	3190.5	92.1	652.5	1987.1	539.8	3045.7	35057.6

2 遺構

(1) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡はC区中央からD・E区にかけて、遺跡全体では東側の範囲で検出している。合計11棟を確認している。大半の遺構が調査区外へ延びるため、柵列の可能性もあるが、ここではすべて掘立柱建物としている。なお、建物方位の共通性が、各建物が同時期に併存した根拠の一つとなるため、南北棟、東西棟に問わらず、北に対する東西方向への振れ幅を建物方位として示す。

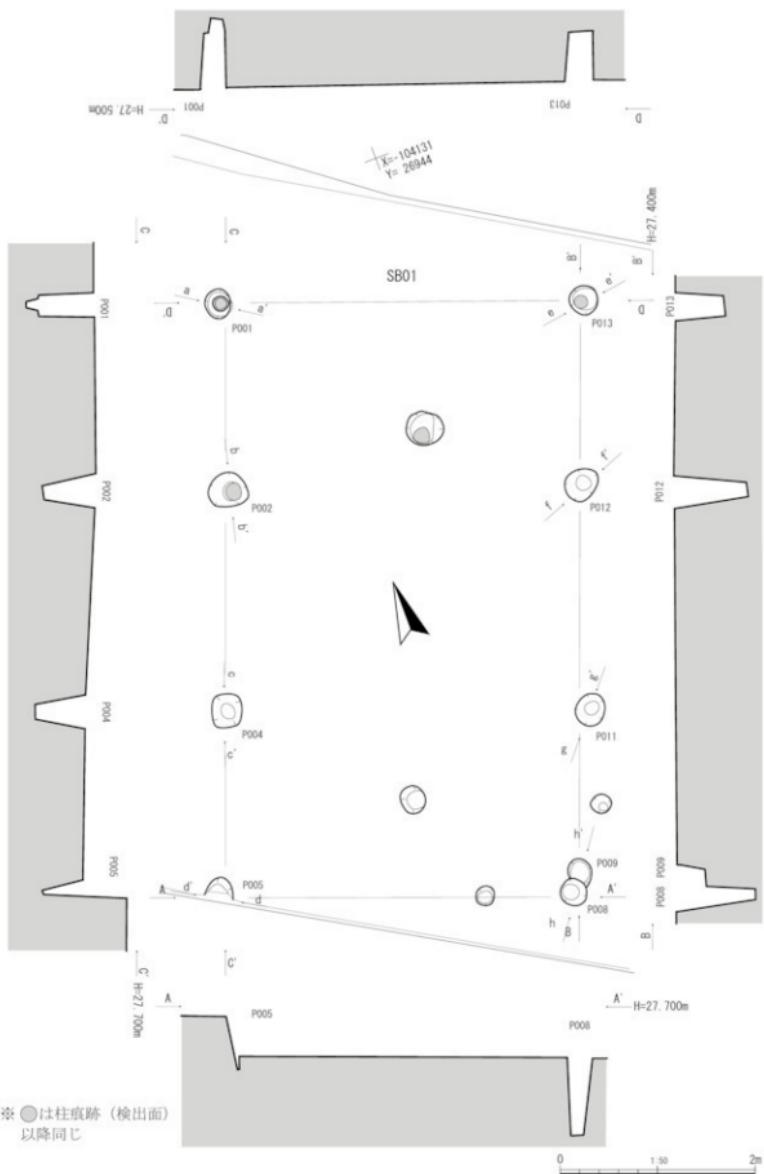
S B01 (第12・13図、写真図版9) 遺跡中央部、C区に位置する。桁行3間×梁行1間の掘立柱建物跡に復元した。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。重複関係は、建物跡に復元できないが柱穴P 009とであり、本遺構の方が新しい。規模は、南北6.05m、東西3.64mであり、床面積は22.022m²である。方位はW-20°-Eの南北棟である。柱間は、桁行が北から順に1.9m、2.25m、1.9mであり、梁行は3.64mである。建物内部にはP 003とP 006が存在するが、本建物跡に伴う可能性もある。各柱堀方（以下柱穴とする）の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が30~40cm、短軸が25~30cmである。深さは確認面から50~80cmであり、平面規模の割には深い。柱痕跡が残る柱穴もある。堆積土は、黒褐色を呈するシルトと黄褐色を呈するシルトで構成され、柱痕跡には前者者が堆積することが多い。遺物は、柱穴から土師器片、石器剥片、常滑産陶器片が少量出土している。これらの遺物から判断すると平安時代（12世紀代を含む）に存続の一端があると考えられる。

S B02 遺跡中央部、C区に位置する。他遺構との重複はない。梁行2間の掘立柱建物跡であるが、桁方向は調査区外へ続くため全容は不明である。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。梁行が東西方向なので南北棟と推定され、方位はW-22°-Eである。規模は、桁行が不明、梁行が4.1mである。柱間は梁行が西から順に2.1m、2.0mである。柱穴の平面形は円形基調であり、規模は長軸が35~40cm、短軸が30~38cm、深さが確認面から40~50cmである。

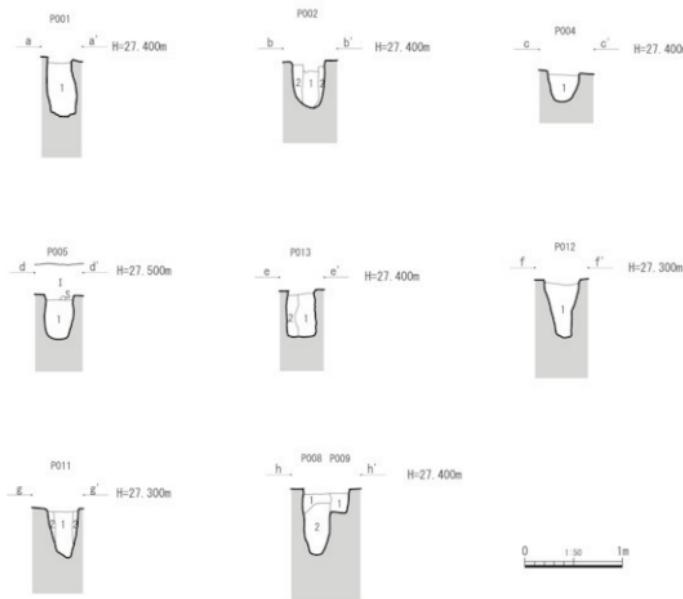
遺物は、須恵器片が出土するのみである。この遺物を重視すると、本遺構は平安時代に位置づけられるかもしれない。

S B03 遺跡中央部、C区に位置する。S B07と重複するが、本遺構の方が新しい。桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡に復元した。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。南側柱列において、柱穴が1つ発見できなかった。東西棟で、方位はW-29°-Eである。規模は、桁行4.8m、梁行3.03mであり、床面積は14.5m²である。柱間寸法は桁行が西から順に2.2m、2.6m、梁行が3.03mである。柱穴は楕円形を呈し、規模は長軸47~54cm、短軸は37~52cmである。深さは確認面から35~50cmである。遺物の出土はなく、したがって時期は不明である。

S B04 遺跡中央部、C区に位置する。S B05と重複しており、新旧関係は本遺構の方が新しい。桁行5間、梁行2間以上の掘立柱建物跡に復元した。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行つ

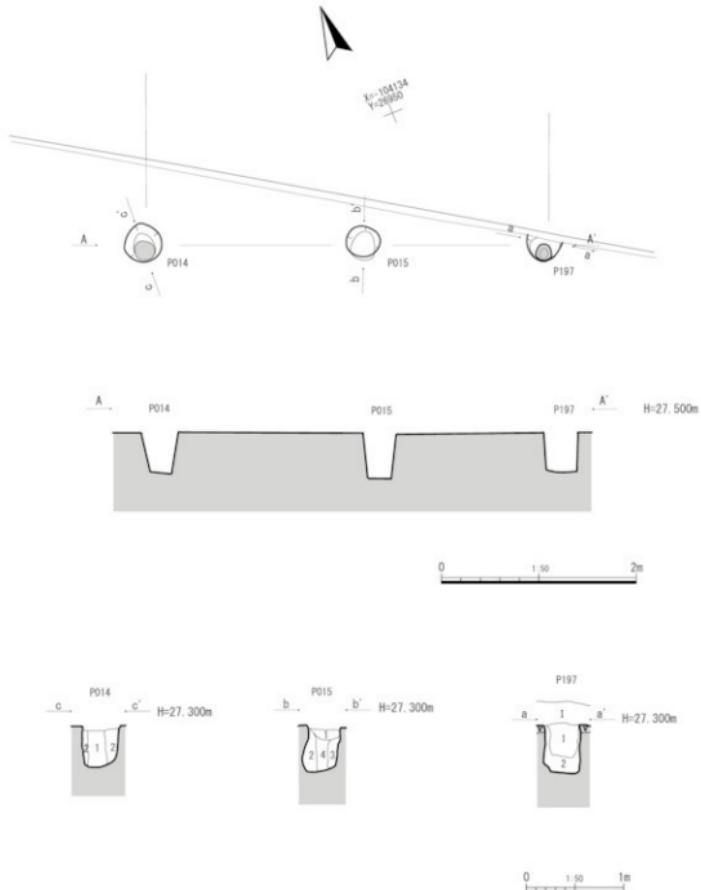


第12図 SB01平・断面図



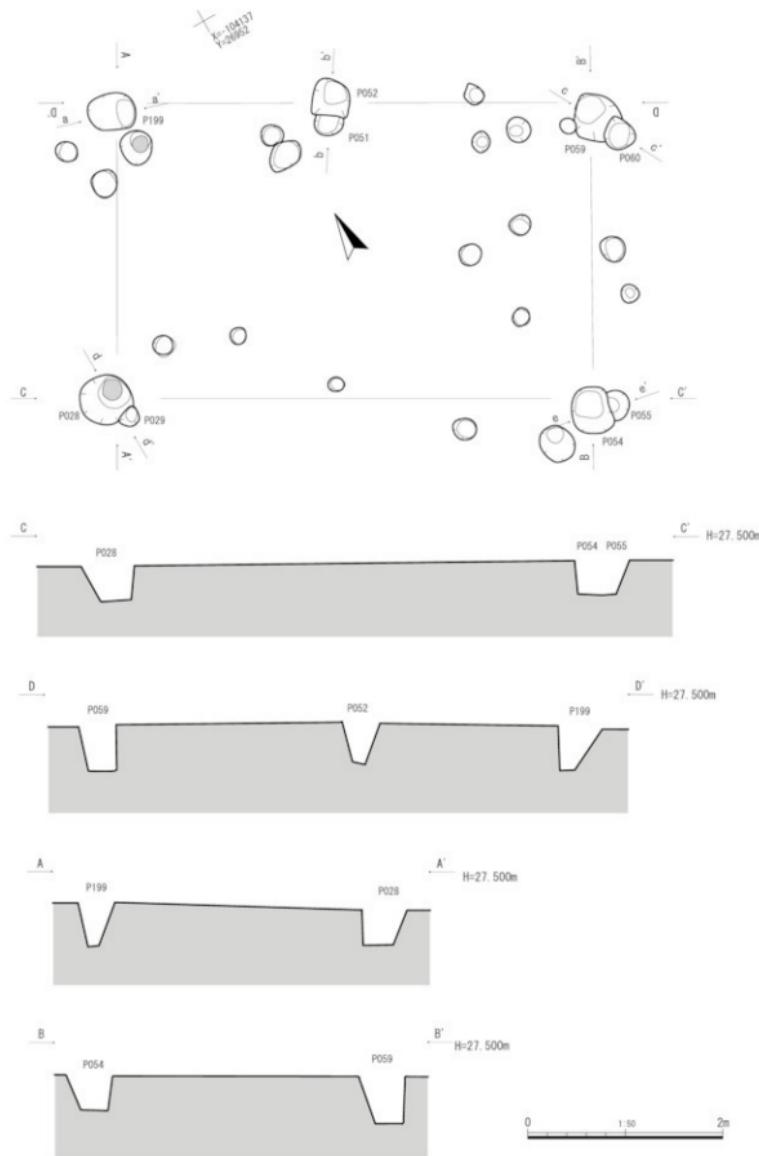
- P001 a - a' :
 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 P002 b - b' :
 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 棕色(10YR4/6)シルトを少量含む
 P004 c - c' :
 1 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径5cm)を含む
 P005 d - d' :
 1 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径5cm)を含む
 P013 e - e' :
 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 棕色(10YR4/6)シルトを少量含む
 P012 f - f' :
 1 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径5cm)を含む
 P011 g - g' :
 1 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 2 棕褐色シルト 10YR4/6 しまり中・粘性中 黑褐色(7.5YR3/2)シルトをわずかに含む
 P008 h - h' :
 1 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 2 棕褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む
 P009 i - i' :
 1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径1cm程)が入る

第13図 S B 01平・断面図

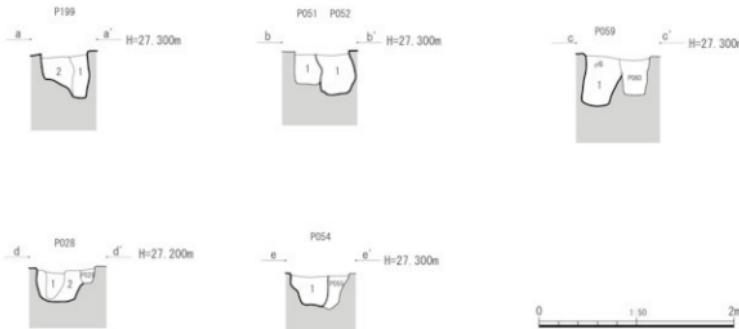


- P014 c - c'
- 1 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルトを少量含む
 - 2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 棕色(10YR4/6)シルトを少量含む
- P015 b - b'
- 1 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルトを少量含む
 - 2 單褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む
 - 3 棕色シルト 10YR4/6 しまり中・粘性中 黑褐色(7.5YR3/2)シルトをわずかに含む
 - 4 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
- P197 a - a'
- 1 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまりや弱・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/8)シルトブロック(Φ5~10cm)
 - 2 棕色シルト 10YR4/6 しまり中・粘性中 黑褐色(7.5YR3/2)シルトをわずかに含む

第14図 S B 02平・断面図



第15図 S B 03平面図



P199 a-a'

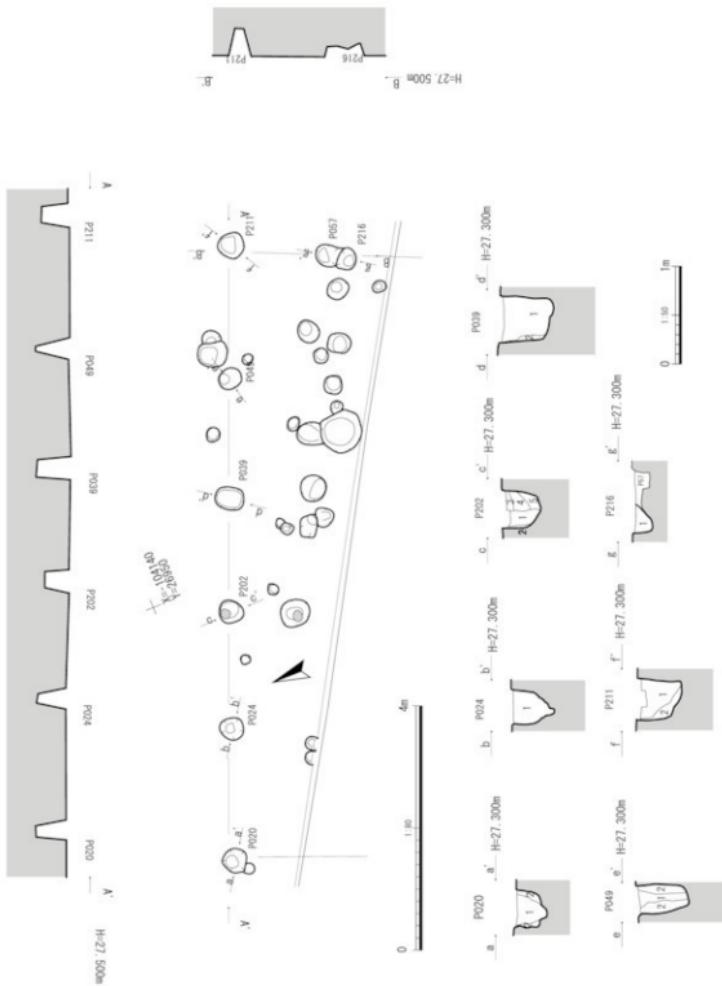
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 2 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む
 P052 b-b'
 1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む
 P059 c-c'
 1 黑褐色シルト 10YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径5cm程)と黒褐色(10YR3/2)シルトが混ざる
 P028 d-d'
 1 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 2 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径5cm)を含む
 P054 e-e'
 1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む

第16図 S B 03断面図

ている。梁行方向は2間分確認できるが、建物の南半分は調査区外に位置するため全容は不明である。桁行方向から東西棟と推定され、方位はW-21°-Eである。規模は、桁行9.9m、梁行は2.7m以上である。柱間寸法は、桁行が西から順に、2.1m、1.8m、1.8m、2.1m、2.1mである。梁行は調査区内では2.1mである。柱穴の平面形はすべて梢円形を呈し、規模は長軸38~46cm、短軸32~42cmである。深さは確認面から25~50cmである。柱穴の底面レベルはほぼ一定である。

遺物の出土はなく、したがって時期は不明である。

S B 05 遺跡中央部、C区に位置する。S B 04、S B 06と重複しており、新旧関係は前者とは本遺構の方が古く、後者とは直接柱穴が重複しないため不明である。桁行6間、梁行1間以上の掘立柱建物跡に復元した。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。梁行方向は南へ延長すると推定されるが、大部分は調査区外に位置するため全容は不明である。桁行方向からみると東西棟と考えられ、方位はW-27°-Eである。規模は、桁行9.4m、梁行1.2m以上である。柱間寸法は、桁行が西から順に1.5m、1.5m、1.3m、1.7m、1.7m、1.7mである。柱穴の平面形はいずれも梢円形を呈し、規模は長軸が25~50cm、短軸が24~46cmである。柱穴の大きさから、長軸が40~50cmと25~30cmの大小に分けられる。柱穴の底面レベルは西側2個がやや深い傾向があるが、その他は一定である。遺物は須恵器片が少量出土するのみである。これを重視すると本遺構は、平安時代に位置づ



第17図 SB04平・断面図

SB04

P020 a-a'

- 1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む
2 褐色シルト 10YR4/6 しまり中・粘性中 黒褐色(7.5YK3/2)シルトをわずかに含む

P024 b-b'

- 1 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径5cm)を含む
P202 c-c'

- 1 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 褐色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 褐色(10YR4/6)シルトを少量含む
3 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)シルトブロック(φ3cm以下)を含む
4 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(φ5cm)を含む
5 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや強 褐色(10YR4/4)シルトを少量含む

P039 d-d'

- 1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む 土器片を含む
2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 褐色(10YR4/6)シルトを少量含む

P049 e-e'

- 1 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルトを少量含む
2 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む

P211 f-f'

- 1 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/6)ブロック(径5cm)を含む
2 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む

P216 g-g'

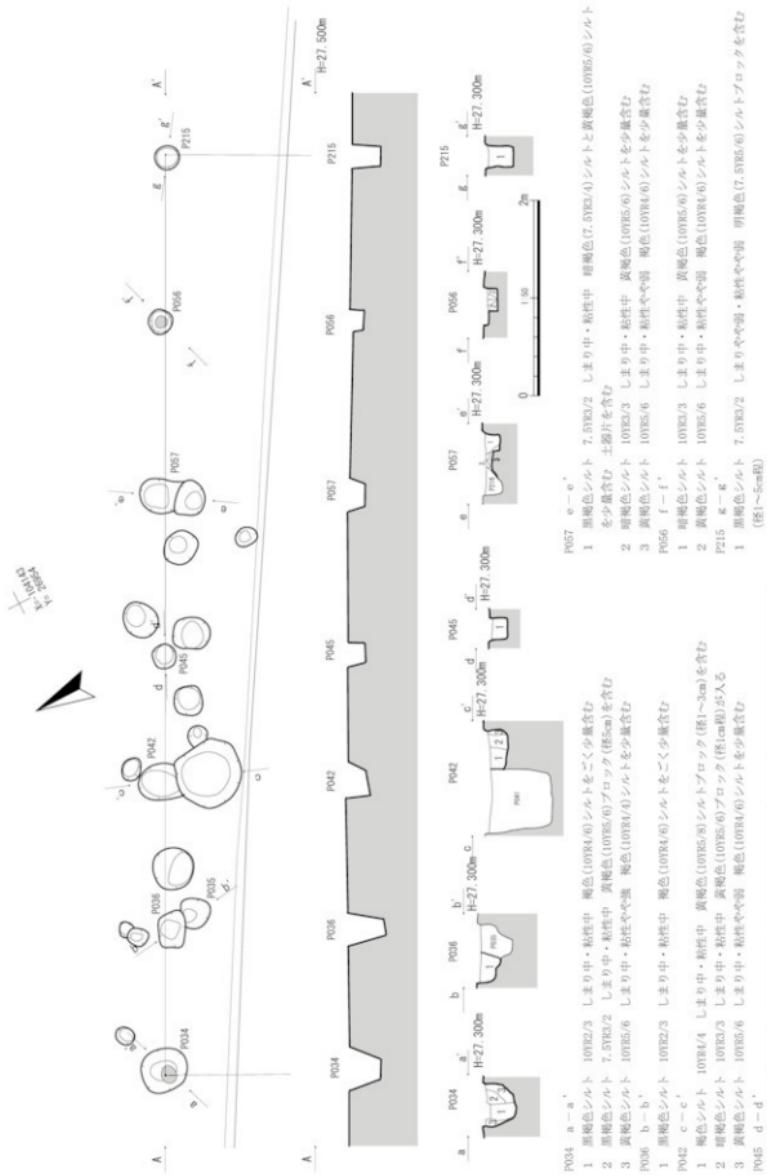
- 1 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 暗褐色(7.5YR3/4)シルトと黄褐色(10YR5/6)シルトを少量含む

けられよう。

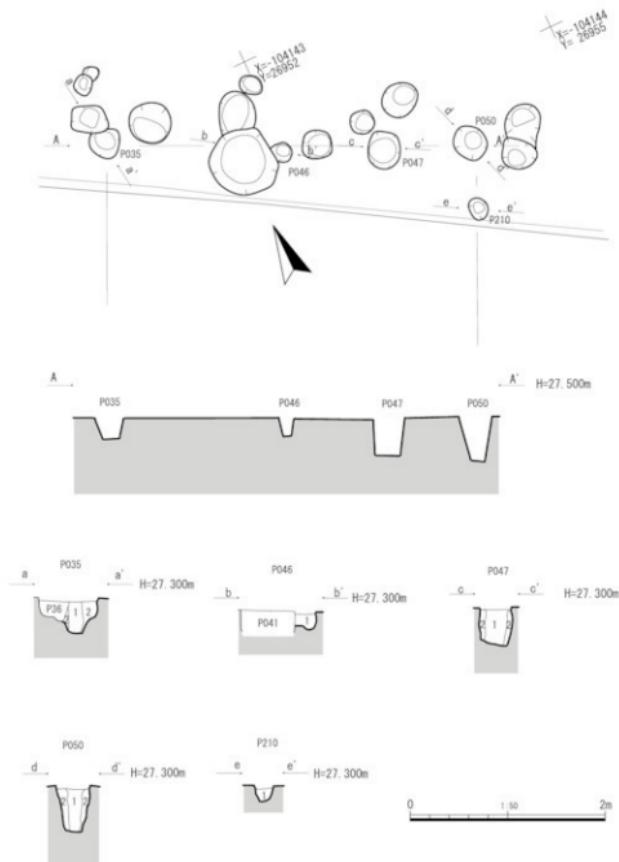
S B 06 遺跡中央部、C区に位置する。S B 05と重複しているが、直接柱穴が切り合わないため新旧関係は不明である。柱間寸法から復元すると、桁行4間（現状では3間）梁行1間以上の掘立柱建物跡である。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。梁行方向は南へ延長すると推定されるが、大部分は調査区外に位置するため全容は不明である。桁行方向からみると東西棟と考えられ、方位はW-24°-Eである。規模は、桁行3.8m、梁行0.8m以上である。柱間寸法は、桁行が西から順に0.9m、0.9m、1.0m、1.0m、梁行が調査区内のみで0.7mである。いずれの柱間寸法も極端に短いため、半間にも柱を建てた可能性がある。柱穴はいずれも梢円形を呈し、規模は長軸22~37cm、短軸18~33cmであり、深さは確認面から20~46cmである。柱穴の底面レベルは、東側2個の柱穴がより深い。遺物は、柱穴より近世の陶器片が出土している。この遺物から判断すると、本遺構は江戸時代に位置づけられる。

S B 07 遺跡中央部、C区に位置する。S B 03と重複しており、新旧関係は本遺構の方が古い。桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡を想定している。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。東西棟で、方位は、W-25°-Eである。規模は、桁行3.8m、梁行2.65m、床面積10.07m²である。柱間寸法は桁行が西から順に1.9m、1.9m、梁行が2.65mである。柱穴はいずれも梢円形を呈し、規模は長軸16~35cm、短軸14~32cmである。深さは、確認面から14~38cmと浅い。柱穴の底面レベルは一定ではない。遺物の出土はなく、したがって時期は不明である。

S B 08 遺跡東端部、D区に位置する。建物に復元されない柱穴といつか重複する。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行った。桁行5間、梁行2間以上の掘立柱建物跡と復元しているが、足りない柱穴も多く、また、梁行方向は西へ延長すると推定されるが、大部分は調査区外に位置するため全容は不明である。桁行方向からみると南北棟と考えられ、方位はW-49°-Eである。規模は、桁行7.44m、梁行2.8m以上である。東側に庇あるいは下屋状の張り出しが付設される。柱間寸法は、桁行が北から順に1.52m、1.52m、1.52m、1.52m、1.36m、梁行が1間分のみで1.8mである。庇の出は1.0mである。柱穴はいずれも梢円形状を呈する。規模は身舎柱穴の長軸が33~57cm、短軸が

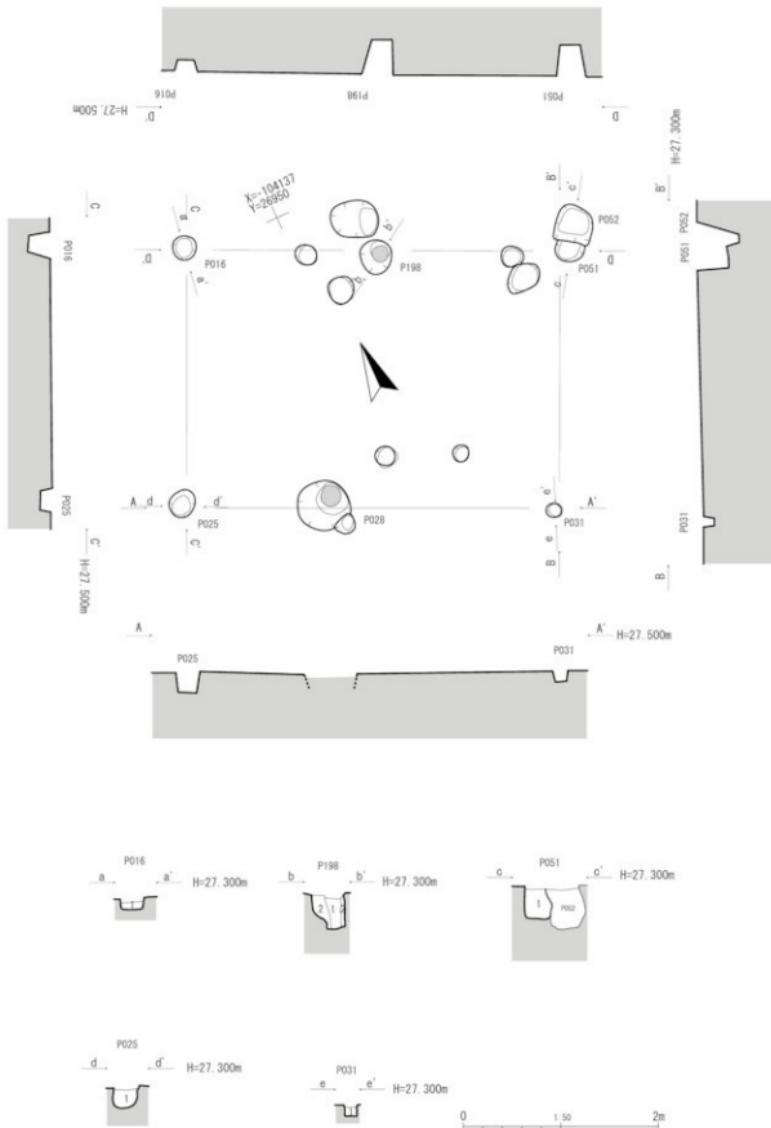


第18図 SB05平・断面図



- P035 a-a'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 - 2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 棕色(10YR4/6)シルトを少量含む
- P046 b-b'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
- P047 c-c'
- 1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルト(径3~5cm)を含む
 - 2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 棕色(10YR4/6)シルトを少量含む
- P050 d-d'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 - 2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 棕色(10YR4/6)シルトを少量含む
- P210 e-e'
- 1 棕色シルト 10YR4/4 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/8)シルトブロック(径1~3cm)を含む

第19図 S B 06平・断面図



第20図 S B 07平・断面図

- P016 a-a'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
- P198 b-b'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 - 2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや弱 棕色(10YR4/6)シルトを少量含む
- P051 c-c'
- 1 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性中 黑褐色(7.5YR3/2)シルトブロック(径10cm)を含む
- P025 d-d'
- 1 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまり中・粘性中 黄褐色(10YR5/8)をごく少量含む
- P031 e-e'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む

25~35cmであり、庇の柱穴は長軸が28~35cm、短軸が26~32cmとなる。したがって、庇柱穴の方が若干小型である。柱穴の底面レベルは庇部分では一部を除きほぼ一定である。遺物の出土はなく、時期は不明である。

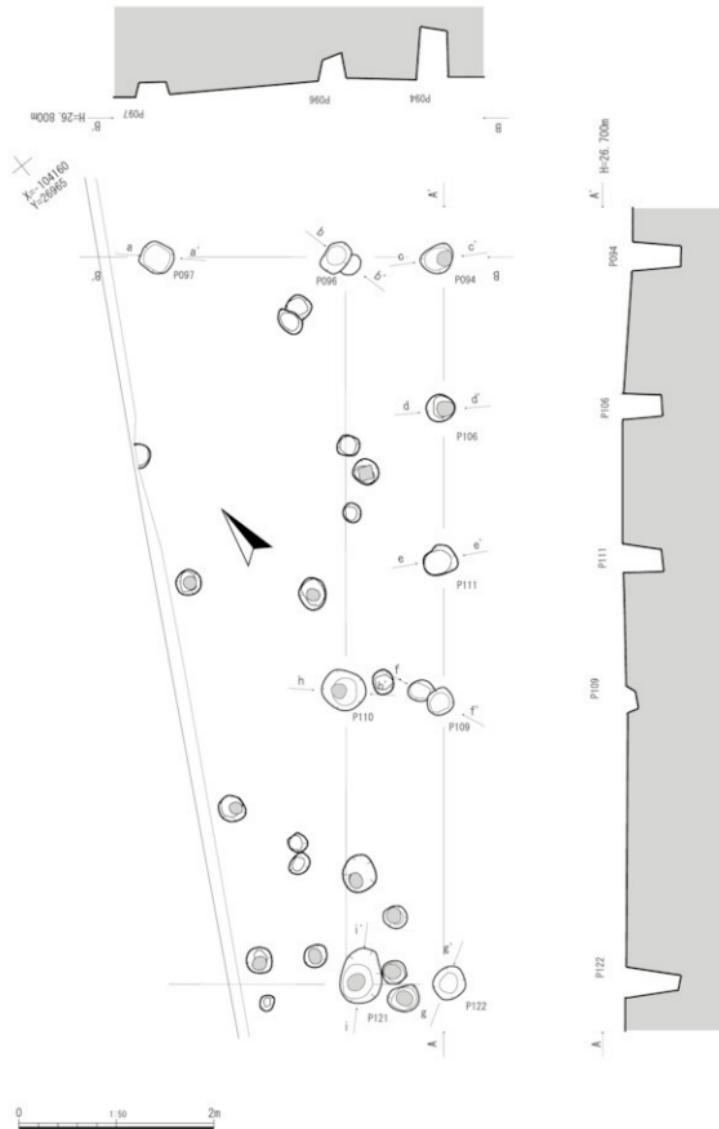
S B09 欠番

S B10 遺跡東端部、D区に位置する。S D05と重複するが直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行った。桁行7間以上の柱穴列として確認しているが、東側に柱穴が広がらないことから、梁行が西方向にのびる掘立柱建物跡とした。桁行方向からみると南北棟と考えられ、方位はW-34°-Eである。規模は、調査区内では、桁行7.3m以上、梁行は不明である。柱間寸法は、桁行が北から順に1.25m、1.0m、0.8m、1.0m、1.0m、1.25m、1.0mであり、1.0m間隔が多いもののばらつきがある。柱穴はいずれも楕円形状を呈し、規模は長軸20~31cm、短軸が18~28cmであり、他よりも小型である。深さは、確認面から10~28cmである。柱穴の底面レベルは中央部分ではほぼ一定であるが、南北端はやや浅くなっている。

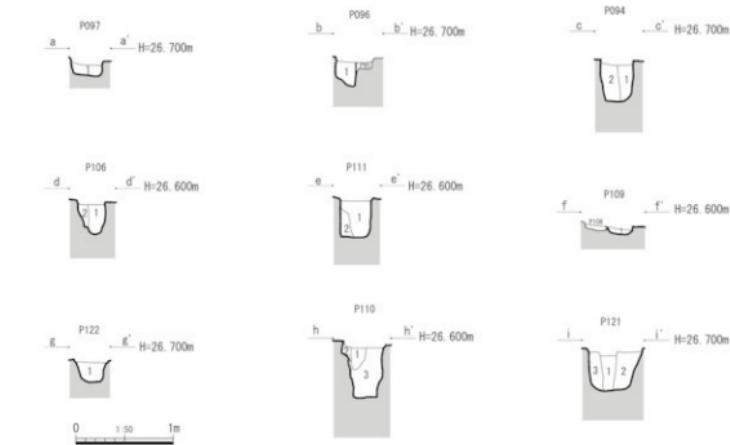
遺物の出土はなく、したがって時期は不明である。

S B11 遺跡東端部、E区に位置する。他遺構との重複はないが、トレンチによって柱穴1個が欠失している。遺構の確認は表土～盛土（I・II・III a層）除去後のV層で行っている。斜面に立地する桁行3間、梁行2間（あるいは1間）の掘立柱建物跡に復元した。南北棟と考えられ、方位はW-24°-Eである。規模は、桁行6.09m、梁行4.06m、床面積24.7m²である。柱間寸法は、桁行が2.03mの等間、南側柱列で計測すると、梁行が西から1.9m、2.16m、北側柱列で計測すると1間分の4.06mである。梁行総長をみるといずれも4.06mとなる。柱穴はいずれも楕円形状を呈する。規模は、長軸が41~60cm、短軸が37~54cmである。深さは、確認面から16~40cmである。柱穴の底面レベルをみるとP267だけは極端に浅いため別遺構なのかもしれない。遺物の出土はなく、したがって時期は不明である。

S B12 遺跡東端部、E区東端の斜面に立地する。桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡に復元した。
S K13、S K14と重複するが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。また、トレンチによって柱穴2個が破壊されている。S D13は本遺構に伴う溝跡と想定している。遺構の確認は表土（I層）除去後のV層で行っている。南北棟で、方位はW-29°-Eである。規模は、桁行5.8m、梁行3.9mであり、床面積は22.6m²である。柱間寸法は桁行が1.93mの等間、梁行も1.93mの等間である。柱穴はいずれも楕円形を呈し、規模は長軸30~45cm、短軸は28~36cmである。深さは確認面から15~50cmである。柱穴の底面レベルは南北方向がほぼ一定であるが、東西方向は斜面地形に合わせて変化している。付属施設としてS D13がある。柱穴からの遺物の出土はないが、付属する溝跡S D13から近世磁器が出土している。これから判断すると、本遺構は江戸時代に位置づけられる。

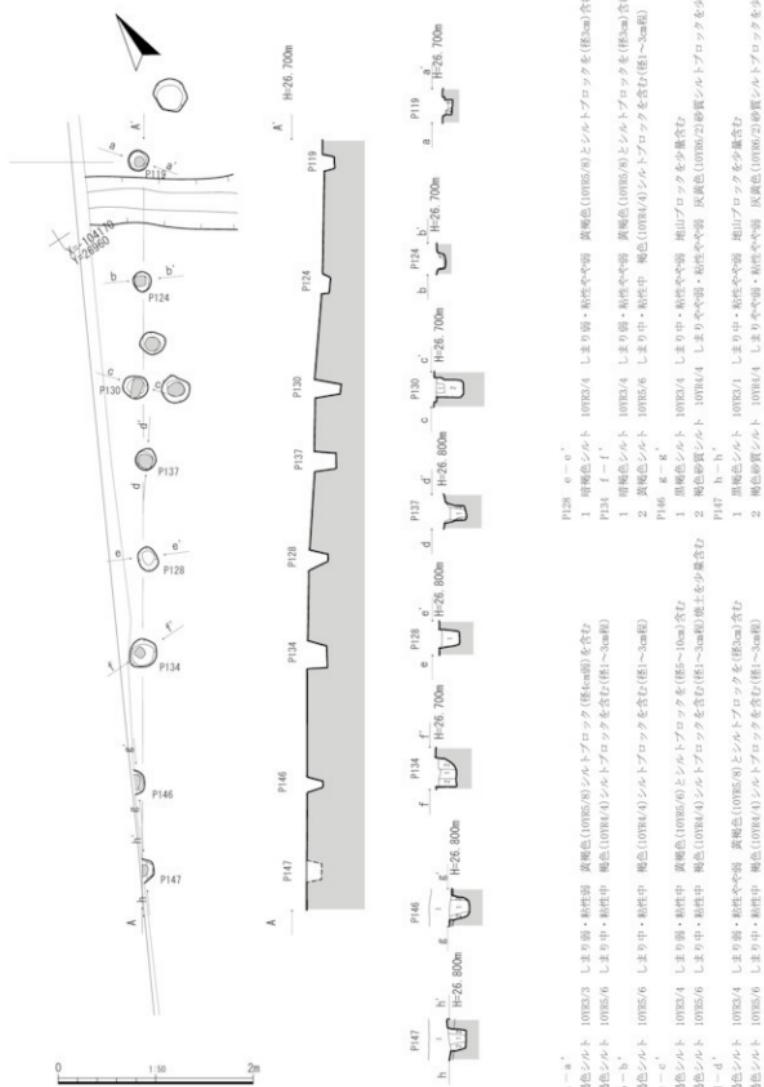


第21図 SB 08平面図

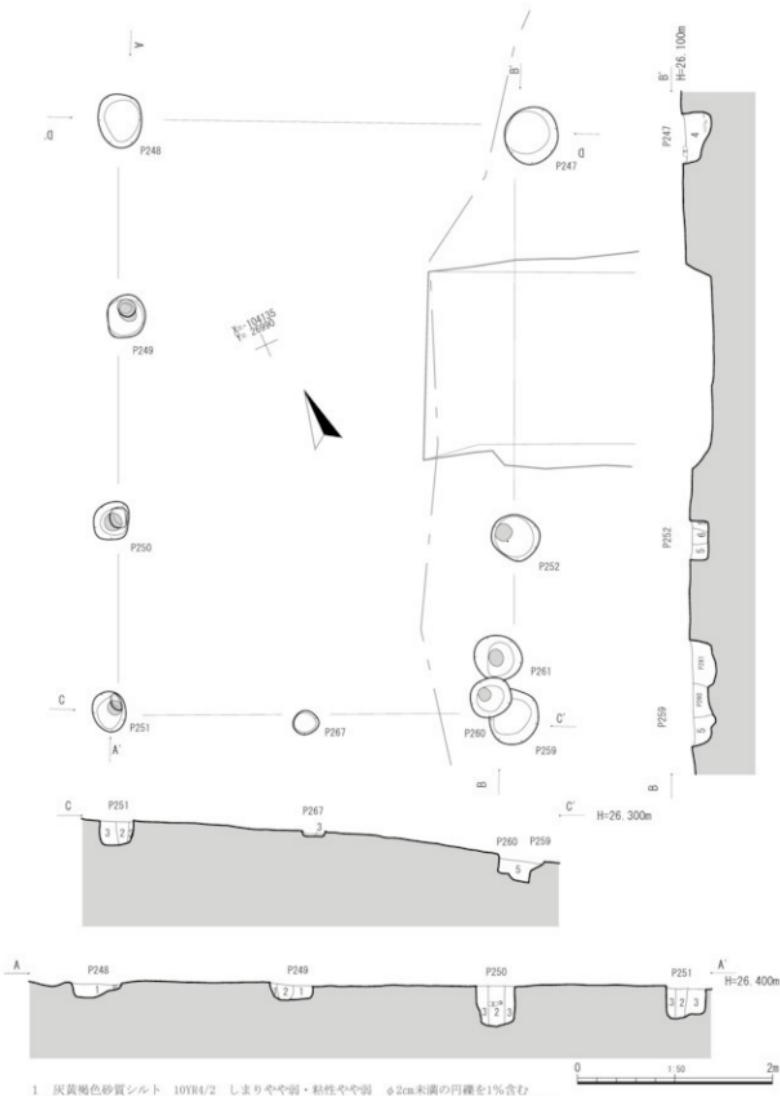


- P097 a - a' 1 黄褐色シルト 10YR4/4 しまりやや弱・粘性中 黄褐色(10Y5/6)とシルトの粒を含む(径5~1cm)
P096 b - b' 1 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性中 黄褐色(10Y5/6)とシルトブロックを(径5~10cm)含む
P094 c - c' 1 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10Y5/8)とシルトブロックを(径3cm)含む
2 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性中 黄褐色(10Y5/6)とシルトブロックを(径5~10cm)含む
P106 d - d' 1 黄褐色シルト 10YR4/4 しまりやや弱・粘性弱 棕色シルト(10Y4/6)をごく少量含む
2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性中 棕色(10Y4/4)シルトブロックを含む(径1~3cm程)焼土を少量含む
P111 e - e' 1 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10Y5/8)とシルトブロックを(径3cm)含む
2 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性中 棕色(10Y4/4)シルトブロックを含む(径1~3cm程)
P109 f - f' 1 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性中 棕色(10Y4/4)シルトブロックを含む(径1~3cm程)焼土を少量含む
P122 g - g' 1 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性中 黄褐色(10Y5/6)とシルトブロックを(径5~10cm)含む
P110 h - h' 1 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10Y5/8)とシルトブロックを(径3cm)含む
2 暗褐色シルト 10YR4/4 しまりやや弱・粘性中 黄褐色(10Y5/6)とシルトの粒を含む(径5~1cm)
3 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性やや強 棕色(10Y4/4)シルトブロック(径5~10cm)が入る
P121 i - i' 1 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10Y5/8)とシルトブロックを(径3cm)含む
2 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり弱・粘性中 黄褐色(10Y5/6)とシルトブロックを(径5~10cm)含む
3 棕色シルト 10YR4/4 しまりやや弱・粘性弱 棕色シルト(10Y4/6)をごく少量含む

第22図 S B 08断面図

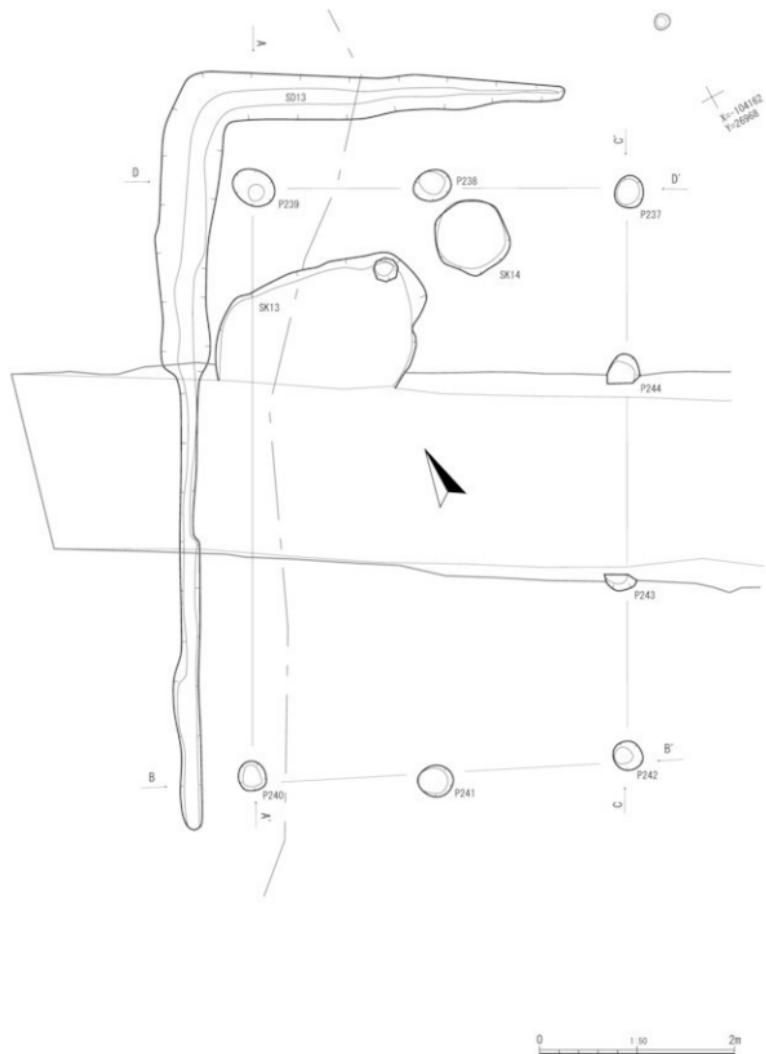


第23図 SB10平・断面図

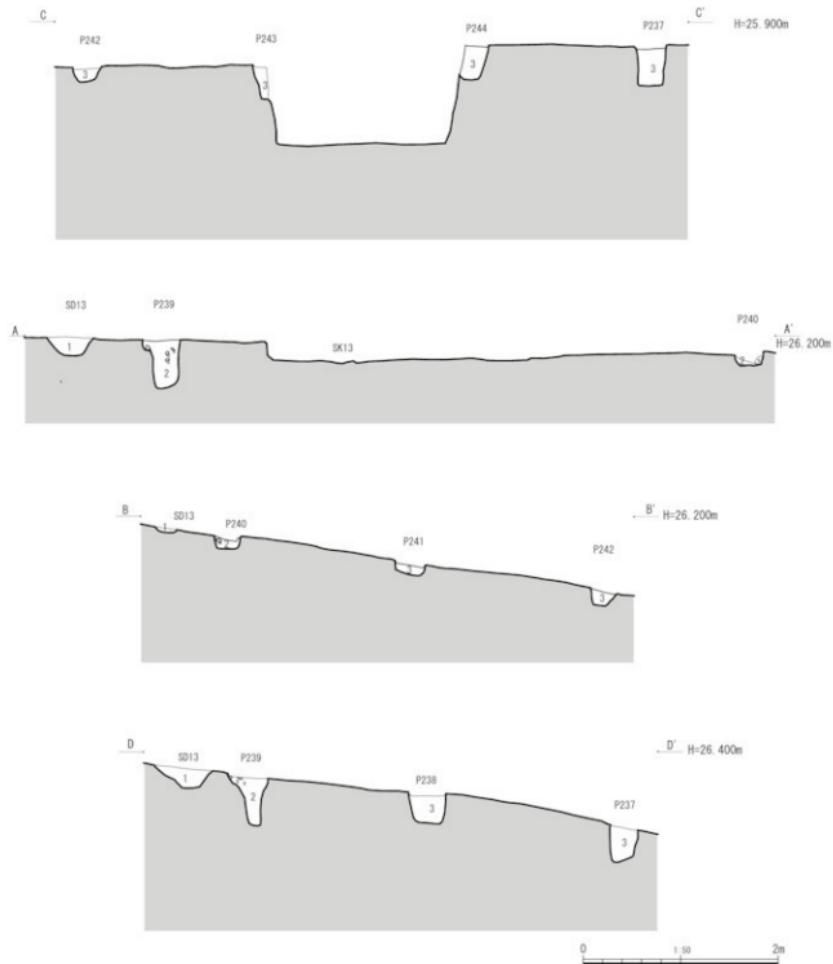


- 1 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2 しまりやや弱・粘性やや弱 $\phi 2\text{cm}$ 未満の円礫を1%含む
- 2 暗灰褐色シルト 10YR4/1 しまり弱・粘性やや弱 明黄褐色シルトブロック1%を含む <柱隙>
- 3 灰黄褐色砂質シルト 10YR5/2 しまりやや弱・粘性弱 にぶい黄褐色ブロック($\phi 1\sim 2\text{cm}$)を含む V層に掘りこんだ場合
- 4 灰黄褐色砂質シルト 10YR5/2 しまり中・粘性やや強 黒褐色(10YR3/1)ブロック($\phi 1\sim 2\text{cm}$)を10%含む
- 5 黒褐色シルト 10YR3/1 しまり中・粘性中 にぶい黄褐色シルトブロックを15%含む VI層に掘りこんだ場合
- 6 にぶい黄褐色シルト 10YR7/4 しまり中・粘性中 灰黄褐色シルト(10YR6/2)ブロックを10%含む <柱隙路>

第24図 S B 11平・断面図



第25図 S B12平面図



SB12

- 1 黄灰色シルト 2 SY5/1 しまりやや強・粘性やや弱 明黄褐色シルトブロック1%を含む
- 2 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2 しまり中・粘性やや弱 ϕ 2~3cmの円礫を15%含む
- 3 にぶい黄褐色シルト 10YR6/3 しまり中・粘性やや弱 明黄褐色シルトブロックを1%含む

第26図 S B12断面

(2) 壊 穴 建 物 跡

壊穴建物跡は1棟のみ検出している。検出した位置は農道直下であるため削平を免れ残存していたものであることから、本来はさらに数があったと推定される。

S I 01 遺跡の中央部、C区に位置する壊穴建物である。P231と重複するが、本遺構の方が古い。また、北側約半分が調査区外にあるため、全容は不明である。遺構の確認はI層除去後のV層上面で行っている。この位置は、農道の直下にあたり、削平度が小さいため残存していたと考えられ、農道から離れた西側はかなり削平されている。平面形は、調査区外の部分も含めて推定するとほぼ隅丸方形を呈する。規模は調査区内で、西辺が約4m、南辺がややいびつであり、約5mである。方位は西辺を基準とするとW-6°-Eである。削平が大きいため、西辺と南辺については推定の部分もあり、本来は整った形状を呈している可能性もある。深さは確認面から10~25cmであり、非常に浅い。堆積土は4つに区分できる。1層は褐灰色、2層は暗褐色、3層は黄橙色、4層は褐灰色を呈するシルトである。カマドに近い2・4層は土器片や焼土粒が多く含んでいる。壊穴部の堀方は、中央部で深く構築されており、褐灰色シルトと黄橙色地山ブロックとの混合土で充填されており、貼床としている。カマドは南辺東寄りに位置する。カマドの軸はE-23°-Wであり、西辺とは斜行する。袖部は下端のみ残存し、左右の袖間の距離は最大で72cmで、長さは左右ともに65cmである。残存する高さは最大で20cmである。袖部は褐灰色を呈する粘性シルトと地山のブロックとで構成され、長さ15~40cmの円礫が芯材として混入されている。左右それぞれ2個ずつ入れられている。カマド内の堆積土は2層が確認できる。焼土は最下層直下に広がっており、56×50cmの範囲に広がり、これが燃焼部である。燃焼部中央には長さ15~20cmの円礫が2個支脚として設置されている。煙道は燃焼面よりも約20cm高くなり、南方向に延びる。残存は72cmのみであり、煙道の先端と、煙出しは削平されている。遺物は燃焼部を中心に出土する。カマドの堀方は燃焼部の下面に床面からの深さが54cmとやや深い柱穴状である。この部分だけ極端に深いのであるいは別遺構かもしれない。

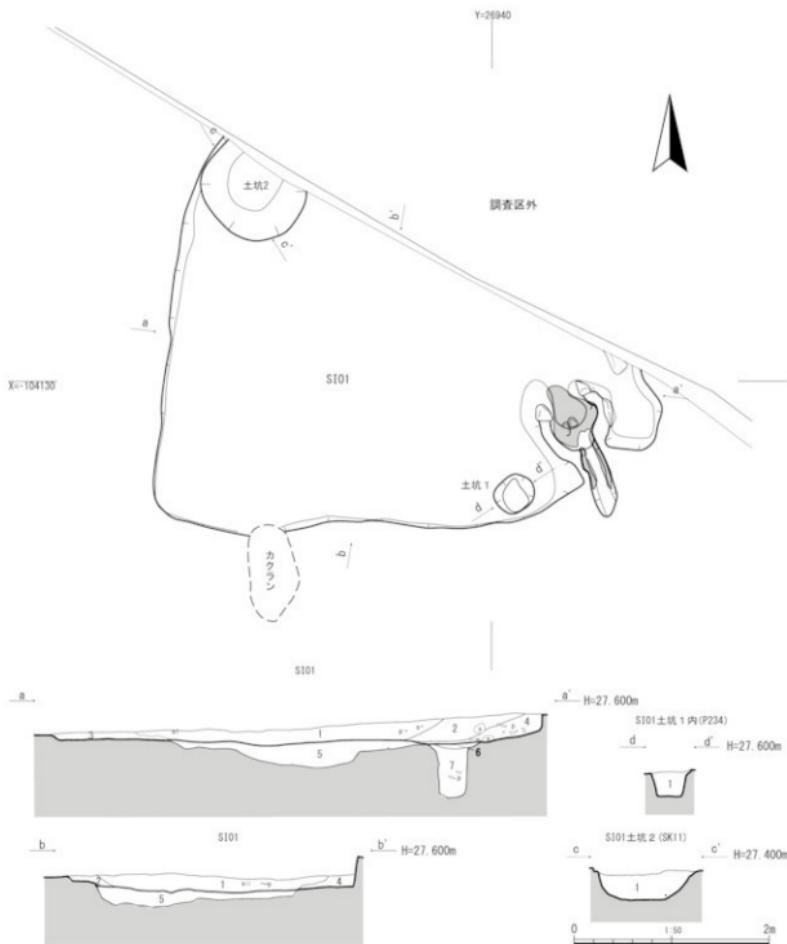
土坑は2基床面上に確認できる。土坑1はカマド西側には貯蔵穴と考えられる土坑（P231）である。平面形は円形を呈し、規模は直径40cm、深さは床面から25cmである。堆積土は単層で、褐灰色の粘性シルトである。土坑2は北西に位置し、一部が調査区外にある。調査区内での規模は長さ110cmであり、深さは床面から28cmである。堆積土は単層で黒褐色を呈するシルトである。

遺物は、土師器杯、甕、須恵器甕を中心にして11kg以上が出土している。そのほか鉄釘や焼成粘土塊あるいはカマド壁塊などもある。この遺構の時期は、出土遺物から考えると平安時代（10世紀代）に位置づけられる。

(3) 土 坑

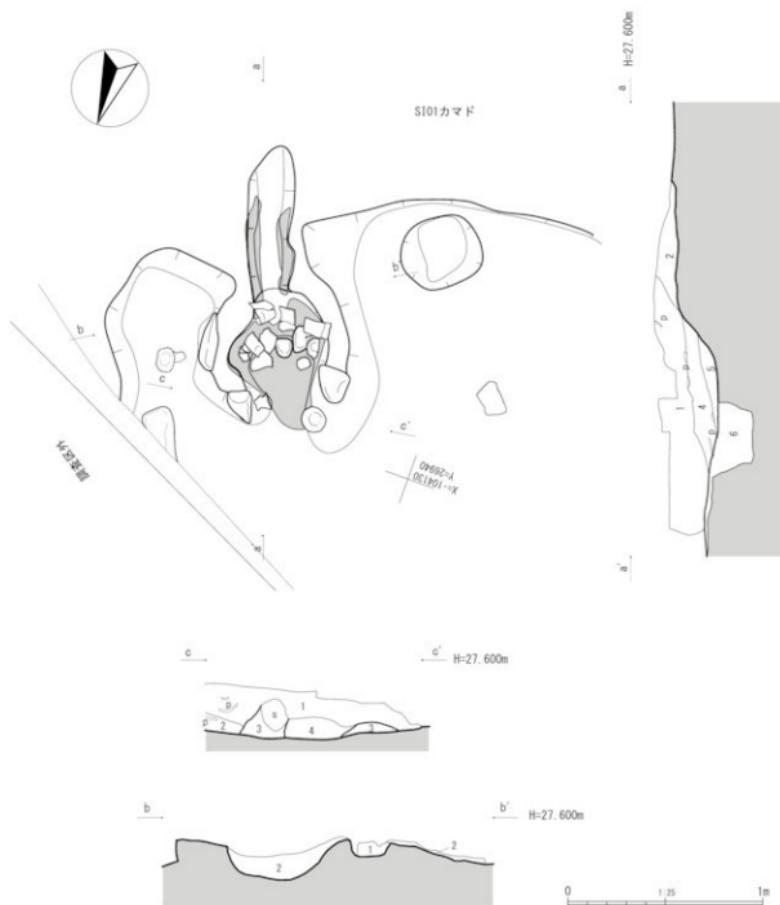
土坑は調査区の各地区から13基が検出されている。陥し穴も含まれるが、ほとんどが用途不明である。多様な使用目的があるものの一括して記す。

S K 01 遺跡南端のA区に位置する。重複する遺構はないが、東5mのところにSK02が位置する。遺構確認面は、IV層除去後のV層で行っている。平面形は長梢円形状を呈し、長径が2.5m、短径が0.8mであり、確認面からの深さは0.84mである。断面形は「V」字形を呈している。堆積土は3層が確認でき、1~2層が黒褐色系の、3層が黄褐色系のシルトである。



- 1 棕灰色シルト 10YR4/1 しまり中・粘性中 硫化物粒、燒土粒を多く含む
 - 2 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性中 燒土粒をやや多く含む
 - 3 黄褐色シルト 10YR8/6 しまり中・粘性中 棕灰色ブロックを多く混合する
 - 4 棕灰色シルト 10YR5/1 しまりやや強・粘性中 燃土粒、炭化物を少量含む 土師器片多く含む 径10cmの円錐も
 - 5 棕灰色シルト 10YR6/1 しまりやや弱・粘性やや強 黄褐色(10YR8/6)ブロック(径1~2cm)を全体的に多く混合、焼土粒、炭化物粒を少量含むする
 - 6 明褐色シルト 5YR5/8 しまりやや弱・粘性やや強 燃土
 - 7 棕灰色シルト 10YR4/1 しまりやや弱・粘性中 燃土ブロック、炭化物を多く含む(磁力か土坑)
- S101土坑2 (SK11) c - c'
- 1 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまり強・粘性強 明黄褐色シルト(10YR6/8)ブロック(径1~3cm)を少量含む
- S101土坑1 (P234) d - d'
- 1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり強・粘性強 黄褐色シルト(10YR5/6)ブロック(径3~5cm)炭を含む

第27図 S I 01平・断面図



SI01カマド a-a', b-b', c-c'

- 1 黒褐色粘質土 7.5YR3/1 しまり中・粘性中 炭化物、焼土ブロックを中程度含む(カマド本体埋土or崩壊土)
- 2 暗灰色粘質土 7.5YR5/1 しまりやや強・粘性中 烧土ブロックを多く含む(煙道部埋土?)
- 3 暗灰色粘質土 10YR4/1 しまりやや強・粘性中やや強 径30cm円錐(芯材)径1~2cmの焼土ブロック地山ブロックとの混合土(カマド袖)
- 4 暗灰色粘質土 7.5YR4/1 しまり中・粘性中 炭化物、焼土ブロックを多く含む(燃焼部埋土)
- 5 橙色シルト 5YR7/8 しまり中・粘性中
- 6 橙色シルト 10YR4/1 しまりやや弱・粘性中 烧土ブロック、炭化物を多く含む

第28図 カマド拡大

遺物は縄文土器が主体で、土師器が少量出土している。平面や断面形状からいわゆる陥し穴状遺構を考えられる。時期も遺物から判断すると縄文時代に位置づけられる。

S K02 遺跡南端のA区に位置する。重複する遺構はないが、西5mのところにSK01がある。遺構確認面はIV層除去後のV層で確認した。北側半分が調査区外にあるため、全容は不明である。調査区内における平面形からみると隅丸方形状を呈すると推定される。長径は2.1m、短径は不明である。遺構確認面からの深さは最大で0.7mである。底面は東西端でやや深くなっている。堆積土は3つに分層される。1層は黒褐色シルトで、縮まり粘性ともにやや強い。2層は褐色シルトで、1と3層のブロックを少量巻き込んでいる。3層は明黄褐色シルトであり、縮まり粘性ともにやや強い。

遺物は縄文土器片が少量出土している。これから判断すると、この土坑は縄文時代に所属する遺構である。

S K03 欠番

S K04 遺跡中央部のC区西側に位置しており、重複する遺構はない。遺構確認面は表土直下のV層である。平面形はややいびつな楕円形を呈しており、長径が1.32m、短径が0.9mである。遺構確認面からの深さは38cmであり、底面中央部がもっとも深い。堆積土は2層が確認でき、1層は黒褐色シルト、2層が暗褐色シルトであり、いずれも縮まりが中程度である。遺物の出土はなく、時期も不明である。

S K05 遺跡中央部のC区西側に位置する。重複する遺構ではなく、南側にP223が位置している。遺構の確認は、表土直下のV層で行っている。平面形は方形基調の楕円形を呈し、長径は2.6m、短径が最大で0.9mである。北東側が広く、南西側が狭くなっている。深さは、確認面から22cmと浅い。底面は凹凸があり、一定ではない。堆積土は2つが確認できる。1層は黒褐色シルトで、地山ブロックを少量含んでいる。2層は北西端で確認される灰黄褐色シルト層である。遺物は縄文土器片が少量出土している。縄文時代に位置づけられようか。

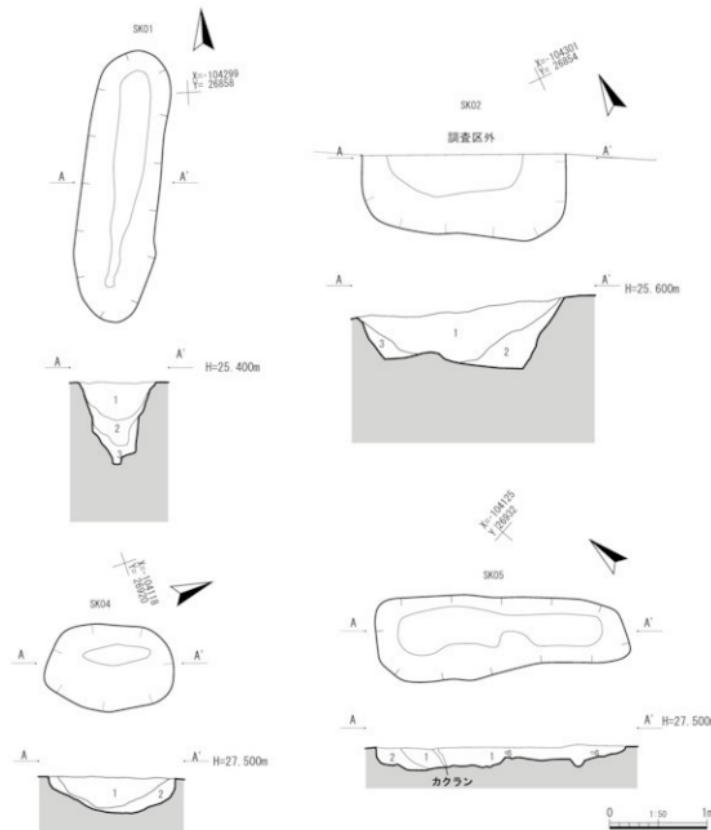
S K06 遺跡の南東部（D区）に位置する。カクランにより北側の一部が壊されている。遺構の確認はI・II層直下のV層で行っている。平面形は楕円形状を呈し、規模は直径が1mである。確認面からの深さは13cmと浅い。堆積土は単層で、暗褐色系のシルトが堆積する。V層の地山ブロックを多く含んでいる。遺物の出土はなく、時期も不明である。

S K07 遺跡南東部、D区に位置する。重複はないが、南3mのところにSK06がある。遺構の確認は表土と盛土（I・II層）直下のV層で行っている。平面形は、いびつな楕円形を呈し、規模は長径が1.7m、短径が1.6mである。深さは確認面から0.3mである。断面形は逆台形状を呈しており、底面は比較的平らである。堆積土は、2つの層が確認できる。1層は暗褐色の砂質シルトであり、焼土粒や炭化物粒を少量含んでいる。2層も暗褐色の砂質シルトであるが、V層のブロックや、焼土粒や炭化物粒を少量含んでいる。鉄製品が小破片出土するのみである。時期も不明である。

S K08 遺跡南東部のD区に位置する。重複はないが、南3mにSX01がある。遺構の確認は表土と盛土（I・II層）直下のV層で行っている。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径が1.7m、短径が1.2mである。深さは、確認面から0.3mである。堆積土は3つに分けられる。1層は暗褐色シルトであり、縮まり、粘性ともにやや弱い。2層は黒褐色シルトであり、炭化物を少量包含する。3層は黄褐色シルトで、褐色シルトブロックや炭化物を包含している。

遺物は縄文土器や石器が少量出土している。遺物から判断すると、縄文時代の土坑であろう。

S K09 遺跡南東部のD区に位置する。重複はないが、東0.4mのところにSK10がある。遺構の確認は表土と盛土（I・II層）直下のV層で行っている。平面形は楕円形を呈しており、規模は長径



SK01

- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 しまり中・粘性やや強 黄褐色(10YR5/6)シルトをごく少量含む
- 2 黒褐色シルト 10YR2/2 しまり中・粘性やや強 黄褐色シルトを多く含む 黑褐色(10YR2/1)シルトをごく少量含む
- 3 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性中 黑褐色シルト(10YR2/2)をごく少量含む

SK02

- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまりやや強・粘性やや強 暗褐色(10YR3/4)シルトブロック(φ15cm)、褐色シルトを少量含む
- 2 褐色シルト 10YR しまりやや強・粘性やや強 黑褐色(10YR2/3)シルトと明黄褐色(10YR6/6)シルトを少量含む
- 3 明黄褐色シルト 10YR しまりやや強・粘性やや強 明褐色(7.5YR5/8)シルトを少量、暗褐色(10YR2/3)シルトを多く含む

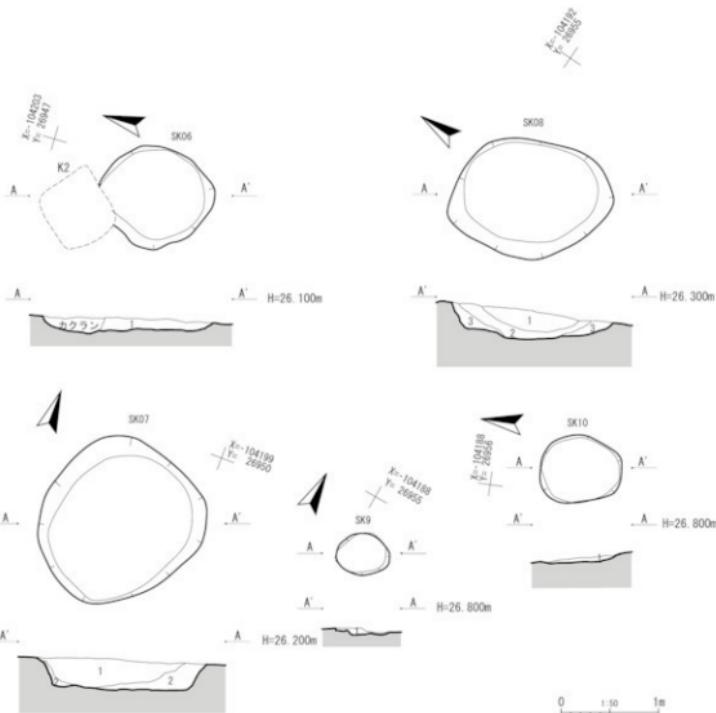
SK04

- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 しまり中・粘性中 地山ブロックを少量含む
- 2 暗褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性やや弱 黑褐色ブロックを少量含む

SK05

- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 しまり中・粘性やや弱 地山ブロックを少量含む
- 2 褐灰色粘質シルト 10YR6/1 しまり中・粘性中

第29図 土坑1



- SK06
1 暗褐色シルト 10YR3/3 黄褐色(10YR5/6)シルトを多く含む
SK07
1 暗褐色砂質シルト 10YR3/4 しまりやや弱・粘性中 黄褐色(10YR5/8)シルトを少量含む 燐土と炭化物をごく少量含む
2 暗褐色砂質シルト 10YR3/4 しまりやや弱・粘性中 黄褐色シルトブロック(φ3cm)を多く含む 燐土と炭化物を小量含む
SK08
1 暗褐色シルト 10YR3/3 しまりやや弱・粘性弱 黄褐色(10YR5/8)シルトを少量含む
2 黒褐色シルト 10YR2/3 しまりやや弱・粘性弱 黄褐色(10YR5/8)シルトを少量含む 黄褐色シルトブロックを多く含む 炭化物をごく少量含む
3 黄褐色シルト 10YR5/6 しまり中・粘性中 暗褐色(10YR4/6)砂質シルトを少量含む 燐土をごく少量含む
SK09
1 暗褐色砂質シルト 10YR4/6 しまり弱・粘性弱 燐土を多く含む
SK10
1 暗褐色砂質シルト 10YR4/6 しまり弱・粘性弱 燐土を多く含む

第30図 土坑2

が 0.55m 、短径が 0.42m とやや小さい。深さは、確認面から 10cm と浅い。堆積土は単層であるが、褐色の砂質シルトに多くの焼土粒が含まれている。火を伴う用途に使用された土坑、あるいは痕跡かもしれない。

遺物は土師器片が少量と、焼成粘土塊が出土している。本土坑は、遺物から判断すると平安時代に位置づけられよう。

S K10 遺跡南東部のD区に位置する。重複はないが、西 0.4m のところにS K09がある。遺構の確認は表土と盛土（I・II層）直下のV層で行っている。平面形は楕円形を呈しており、規模は長径が 0.85m 、短径が 0.68m である。深さは、確認面から 10cm と浅い。底面は比較的平らであるが、南側がやや高い。堆積土は単層であり、褐色砂質シルトである。焼土が多く含まれており、火を使用した痕跡が確認できる。遺物は、粘土塊が出土しているのみである。この遺物からでは時期は判断できない。

S K11 遺跡東部のE区に位置する。重複はなく付近に遺構も少ない。東側 $3\sim 4\text{m}$ で斜面になる。遺構の検出は表土直下の5層で行っている。平面形は東西に長い楕円形状を呈し、規模は長径が 1m 、短径が 0.7m である。深さは、確認面から 0.9m と深い。断面をみると、壁はほぼ直線的に立ち上がりつつおり、井戸状を呈する。堆積土は6つの層が確認できる。1層は灰黄褐色シルト、2層は褐色シルト、3層は褐灰色粘土質シルト、4・5層は褐色粘土質シルト、6層は黄褐色粘土である。下層になるほど粘性が強くなっている。

遺物は、輸入磁器（白磁碗片）が3～5層付近で出土している。この遺物から考えると、この土坑の時期は12世紀代が想定できる。

S K12 遺跡東部のE区に位置している。重複はなく、南 3m の位置にS B12がある。東側 2m 程で斜面になる位置もある。遺構の確認は表土と盛土（I・II層）直下のV層で行った。平面形はいびつな楕円形を呈しており、規模は長径が 0.94m 、短径が 0.8m である。深さは、確認面から 0.66m である。底面はかなり凹凸があり、一定ではない。堆積土は3つの層が確認できる。1層は黒褐色、2層は暗褐色、3層は黄褐色のシルトである。いずれもいわゆるレンズ状の堆積状況呈する。

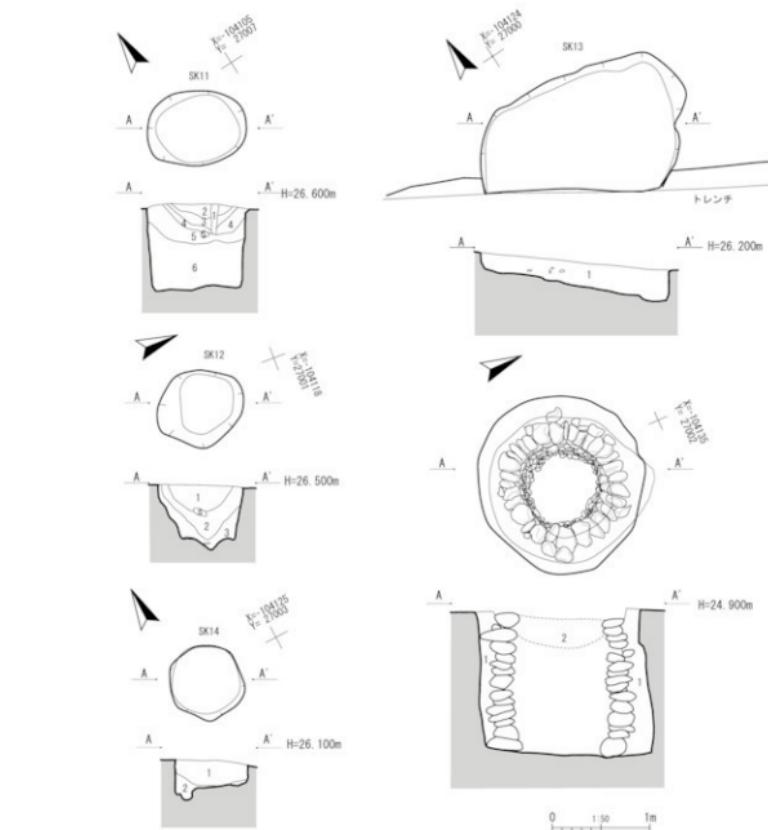
遺物の出土はなく、時期も不明である。

S K13 遺跡東部のE区に位置している。柱穴P 270、S B12と重複している。新旧関係はP 270とでは、本遺構の方が古い。S B12との関係では、S B12の柱穴が見つからないことから、本土坑の方が新しいと判断した。また、南半分をトレーナによって壊されている。検出はI・II層除去後のV層で行っている。平面形は、南半分が破壊されているため不明であるが、いびつな楕円形状を呈するかもしれない。規模は、現状で長さが 2.3m である。深さは確認面から 0.3m である。堆積土は単層で、黒褐色の粘土質シルトが堆積しており、V層が由来の礫も比較的多く含まれている。

遺物は弥生土器片が少量出土しているのみであり、したがって時期も決めがたい。

この土坑は、S B12内に存在することからこの建物に関連する遺構の可能性があるが、S B12を構成する柱穴と重複関係があるため別の遺構とした。

S K14 遺跡東部のE区に位置している。他遺構との重複はないが、西側にすぐS K13、北側に柱穴P 238がある。検出はI・II層除去後のV層で行っている。平面形はいびつな楕円形を呈し、規模は直径が 0.8m である。深さは確認面より 40cm となる。床面はほぼ平らであるが、西側が一部窪んでいる。堆積土は、2つの層が確認できる。1層は褐色シルトで、黄褐色砂質シルトブロックが少量含まれる。2層は暗褐色シルトであり、底面の窪みに堆積している。遺物は弥生土器片が少量出土しているのみであり、時期決定は難しい。



- SK11
- 灰黃褐色シルト 10YR4/2 しまり中・粘性中 明褐色(7.5YR5/8)の砂質シルト粒(径2~5mm)を10%含む。カクラン。
 - 褐色シルト 10YR4/4 しまりやや弱・粘性中 黄褐色(10YR5/6)粘土粒(径1~2mm)を15%、土器粒(1%)を含む
 - 褐灰色粘土質シルト 10YR4/1 しまりやや強・粘性やや強 黃褐色粘土ブロックを3%、黒褐色粘土ブロックを1%含む
 - 褐色粘土質シルト 10YR4/4 しまりやや強・粘性やや強 黄褐色粘土粒(径1~2mm)を7%含む
 - 褐色粘土質シルト 10YR4/5 しまりやや強・粘性やや強 黄褐色粘土ブロック20%、黒褐色粘土ブロック2%、炭化物、土器粒を1%含む
 - 黄褐色粘土 10YR5/6 しまりやや強・粘性やや強
- SK12
- 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 にぶい黄褐色シルトブロック(径5mm)を3%含む 石を含む
 - 暗褐色シルト 10YR3/4 しまり中・粘性中 黄褐色シルト粒(径1~5mm)を7~10%含む 石を含む
 - 黄褐色シルト 10YR5/3 しまり中・粘性中・強 黄褐色シルト粒(径1~5mm)を5~7%含む
- SK13
- 黒褐色粘質シルト 10YR2/3 しまりやや強・粘性やや強 黄褐色砂質シルト粒(径1~5mm)を7%含む
- SK14
- 褐色シルト 10YR4/4 しまり中・粘性中 黄褐色砂質シルトブロック(径5mm以下)を1%含む
 - 暗褐色シルト 10YR しまり中・粘性中
- SE01
- 淡褐色粘土(2.5YR8/4)~明灰褐色粘土(10RG7/1) しまり中・粘性強 淡黄色粘土ブロックと明灰褐色粘土ブロックの混合土 一部グライ化
 - 灰褐色シルト 5Y6/1 暗灰色(5Y8/1)ブロックφ1cm未満を3%含む
 - ※2層以下 崩落

第31図 土坑3・井戸跡

(4) 井 戸 跡

S E 01 遺跡東部のE区に位置する石組みの井戸跡である。他遺構との重複はないが、北5mにS B12が、西8mにS B11がある。調査区東端の際で、斜面下位に位置する。検出は、I・II・III a層除去後のIII b層上面である。遺構の上部にはII層が堆積することから、井戸の上部は破壊されている可能性がある。平面形は堀方が楕円形状、石組みの井戸本体は円形である。規模は堀方の長径が1.8m、短径が1.7mであり、壁面は垂直気味に立ち上がっている。井戸本体の直径は0.8mである。底面までの深さは、確認面から1.5mである。

石組みはおよそ16段前後が確認される。最下段は基底石として長さ40cm、厚さ15cm、幅20cm程度のはかよりも大きな川原石を底面に敷き、その上部から、長さ20~30cm、厚さ5~10cm程度の一回り小さな川原石を積み上げている。平面的な配列は放射状になるように積み上げているが、裏込めはあまり行われていない。堆積土は、調査中に土層断面が崩壊したため記録できなかったが、上位層と堀方の堆積土のみ記録している。井戸本体の上位の堆積土（2層）は灰色シルトであり、水分が多くかなり軟弱である。堀方の堆積土は淡黄色粘土～明青灰色粘土であり、V層を起源とする埋め戻し土であるが、下層ほどグライ化している。

遺物は井戸本体の層中より漆器碗が2点、陶器片が出土しているが、数点である。時期は遺物から考えると江戸時代に属すると想定される。

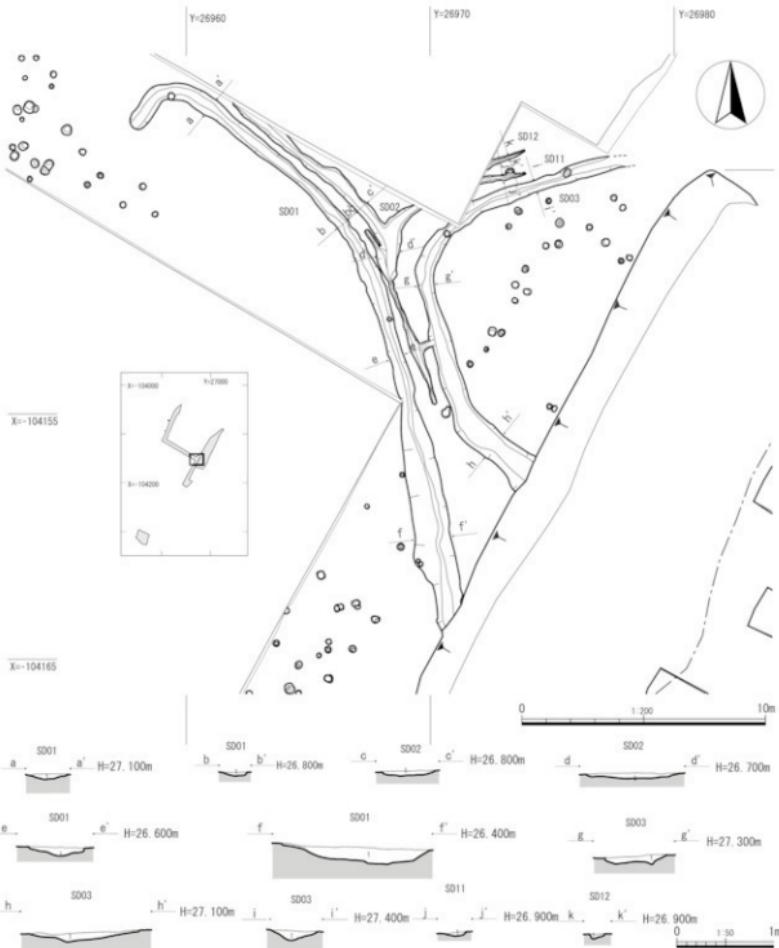
(5) 溝 跡

調査区内の各所から合計16条発見されている。等高線に直交する形で東側に流れる溝が多くある。低地に向かって水を流す目的があるかもしれない。反対に等高線に並行な溝跡も少数ながら存在する。これらの違いは用途の違いを表すかもしれないが、個々の溝跡の機能を推定するまでにはいたっていない。

S D 01 遺跡中央部から東部にかけて、C区とD区の交差点付近に位置する。柱穴P217、P229、P232、P233と重複するが、いずれも本溝跡の方が新しい。また、東に隣接して同様な溝跡S D02がある。遺構の確認は表土と盛土（I・II・III a層）を除去後のV層で行っている。溝跡の方向は、北端付近は90°に屈曲しており、その後はゆるやかに南にむけて延びている。東端部の調査区は切土が行われているため、それによって南端は破壊されている。調査区内における長さは、直線距離で約24m、幅は最大で1.7m、最小で0.5mである。深さは、確認面から5~15cmとかなり浅い。溝幅には広狭ともあわせて考えると、これは上部の大半が削平されることによると考えられる。堆積土は1層のみ確認でき、にぶい黄褐色を呈し、黄褐色シルトが少量含まれる。

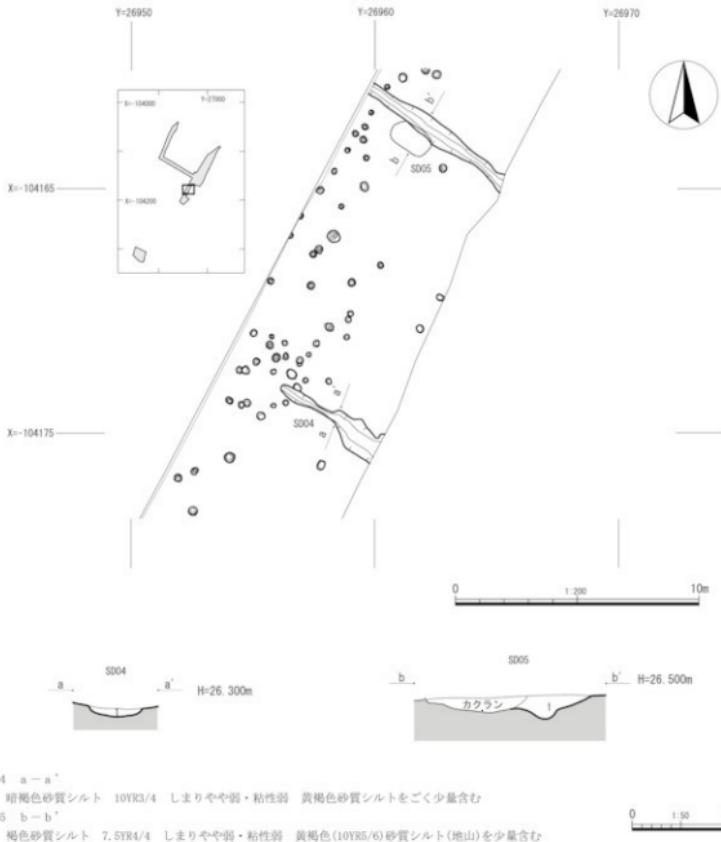
遺物は、縄文土器片、石器剥片、土師器片、須恵器片、常滑産陶器片、近世陶器片が出土している。時期は近世陶器がもっとも新しく、この時期に所属する可能性が高いであろう。

S D 02 遺跡中央部から東部にかけて、C区とD区の交差点付近に位置する。北側は調査区外へ延び、また南端は浅くなつて消滅している。他遺構との重複はないが、SD11、SD03と合流していると予想される。東に隣接して同様な溝跡S D02がある。遺構の確認は表土と盛土（I・II・III a層）を除去後のV層で行っている。溝の流路方向は北西側を川上とし、ゆるやかな弧状を呈し南へ向かっている。北から7m付近でSD11と合流し、さらにそこから南5mでSD03と接続する。調査区内における長さは直線距離で約15m、幅は上幅で0.2~0.7mである。深さは確認面から6cmと非常



- SD01 a - a' 1 にぶい黄褐色 10YR5/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルトがごく少量入る
b - b' 1 棕褐色シルト 10YR4/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルトをごく少量、炭をごく少量含む
c - c' 1 にぶい黄褐色 10YR5/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルトがごく少量入る
f - f' 1 にぶい黄褐色 10YR5/4 しまり弱・粘性やや弱 黄褐色(10YR5/6)シルトがごく少量入る
- SD02 c - c' 1 明褐色シルト 7.5YR5/8 しまり弱・粘性弱
d - d' 1 黄褐色シルト 10YR5/4 しまり弱・粘性弱
- SD03 g - g' 1 棕褐色シルト 10YR4/4 しまり弱・粘性弱
h - h' 1 棕褐色シルト 10YR4/6 しまり弱・粘性弱 明黃褐色(10YR6/8)と褐色(10YR4/4)シルトを少量含む
- i - i' 1 黄褐色シルト 10YR5/8 しまり弱・粘性弱 黄褐色(10YR5/6)シルトブロックを含む(径3cm程)
- SD11 j - j' 1 晴褐色シルト 10YR3/4 しまり中・粘性中 土器の欠片含む
- SD12 k - k' 1 晴褐色シルト 10YR3/4 しまり中・粘性中 黄褐色シルト(10YR5/6)の粒を含む(径5mm)

第32図 満1



第33図 溝2

に浅い。SD01と同様にこの付近は大きく削平されていることによる。堆積土は1層のみ確認できる、明褐色を呈するシルト層である。

遺物は、石器片のほか、須恵器片、近世磁器片が出土している。遺物から判断すると、近世がもっとも新しく、本遺構もこの時期に位置づけられよう。

S D 03 遺跡中央部から東部にかけて、C区とD区の交差点付近に位置する。遺構の確認は表土と盛土（I・II・IIIa層）を除去後のV層で行っている。北東端は削平により残存せず、南側は現代の切土造成のため破壊されている。柱穴P235、P230と重複しており、いずれも本溝跡の方が新しい。また、重複関係ではないが、西側にあるSD02と一部接続している。流路方向は北東からはじ

まり、その後C字状に大きく湾曲して南に至る。調査区内での長さは、直線距離で約19m、上幅は最大で1.3mである。深さは確認面より10cmと付近の溝跡と同様に非常に浅い。堆積土は1層のみ確認できる。褐色を呈するシルトで、明黄褐色と褐色のシルトを少量包含する。

遺物は、石器剥片のほか、土師器片、近世磁器片、その他金属製品が出土している。もっとも新しい近世がこの遺構の時期を表しているであろう。

S D 04 遺跡の東端部付近、D区に位置する。P 180と重複しているが、本溝跡の方が新しい。遺構の確認は表土と盛土（I・II・III a層）を除去後のV層で行っている。流路方向は北西からであり、南東方向にはほぼ直線的に延びているが、南東端は調査区外である。調査区内の長さは4.7m、上幅は最小で0.2m、最大で1.3mである。南側の方が上幅は広くなっている。深さは確認面から10cmである。堆積土は単層で、暗褐色を呈する砂質シルトである。

遺物は、石器剥片、土師器、近世陶磁器、金属製品が出土している。時期はもっとも新しい遺物から近世に属する可能性が高い。

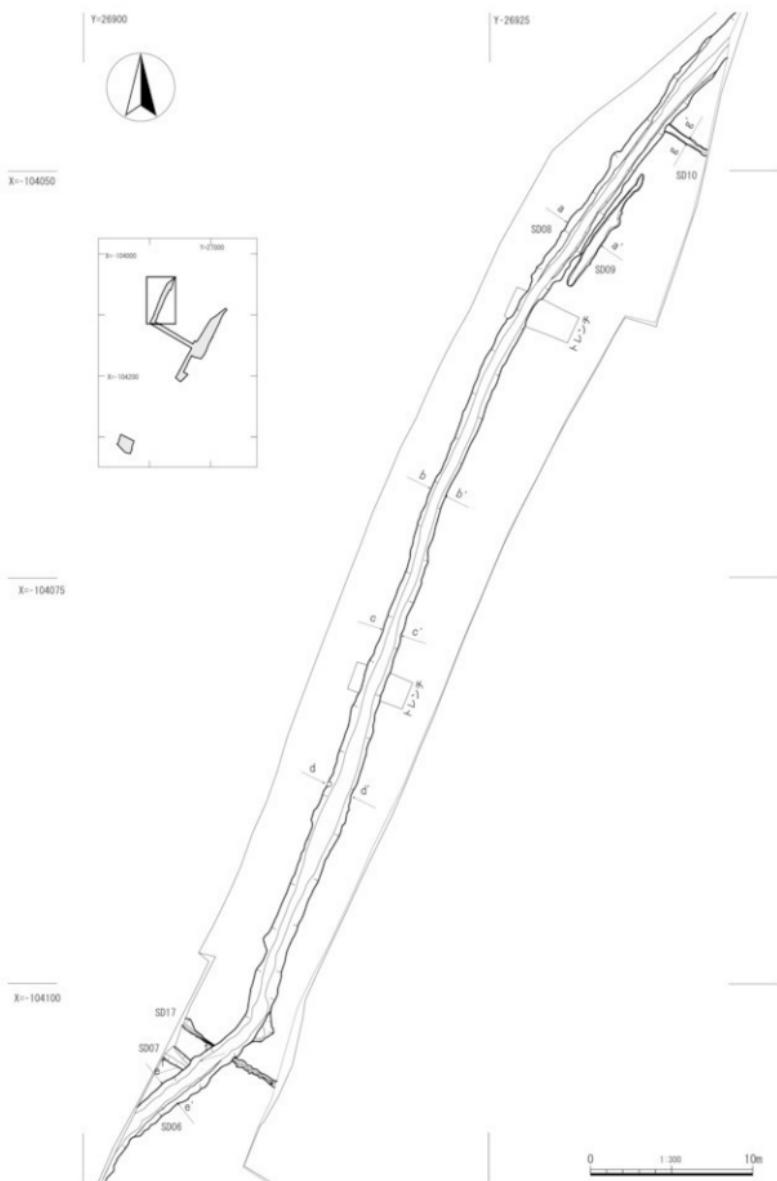
S D 05 遺跡の東端部付近、D区に位置する。他遺構との重複はないが、溝の南肩部の一部はカクランにより部分的に破壊されている。遺構の確認は表土と盛土（I・II・III a層）を除去後のV層で行っている。流路方向は北西からであり、南東方向にはほぼ直線的に延びているが、北西端と南東端は調査区外である。調査区内での長さは6.6m、上幅は最小で0.5m、最大で0.9mである。深さは確認面から10cmである。堆積土は単層で、褐色を呈する砂質シルトである。遺物の出土はなく、時期も不明である。

S D 06 (S D 08) 遺跡の西端部、B区に位置する。当初の調査区は北端部と南端部（C区の延長部分）のみであったが、その後両調査区の間にも溝が延長することが判明したため、追加されたものである。したがって、当初の調査区で別々の遺構名を付しており、本書ではS D 06に統合している。遺構の確認は表土（I層）を除去後のIV層下位～V層で行っている。他遺構との重複は北側でS D 10と、南側でS D 17、S D 07とで確認できる。S D 10とS D 17ではいずれも本遺構の方が新しい。S D 07とでは、本遺構の方が古い。流路方向は北側からであり、南西に向かってゆるやかな弧状を呈し、S D 17との重複部付近で「く」の字状に屈曲している。北端部と南端部はさらに調査区外へと延びるため、全容は不明である。調査区内における規模は、長さが直線距離で約80mと長大であり、上幅が最大で2.1mである。深さは、確認面から、最大で55cmである。断面形は「逆台形」状を呈する。堆積土は4つに区分され、1層～3層までは黒褐色を呈するシルトであり、4層は黄褐色を呈するシルトである。遺物は少なく、おもに1～3層の間で出土している。遺物は縄文土器片、石器のほか、常滑産陶器片が出土している。遺物から判断すると、本遺構の所属時期は平安時代末（12世紀）の時期に位置づけられるかもしれない。

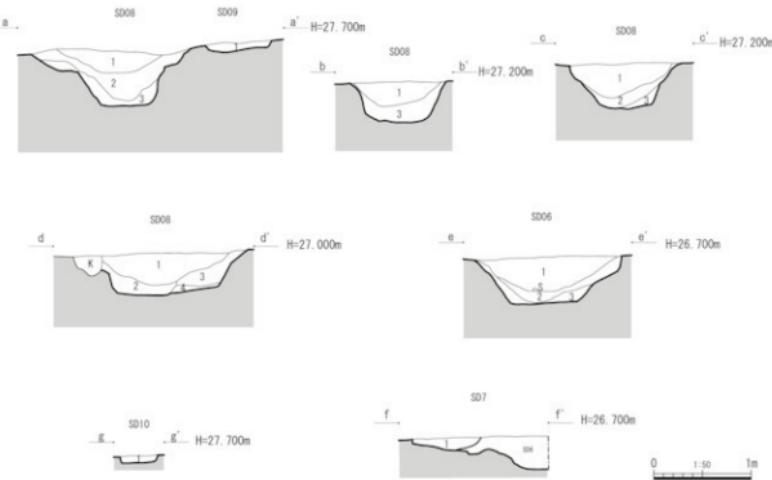
遺跡が立地する微高地の北西端に等高線と並行するように位置することから、時期は不明であるが、微高地上を区画する目的も考えられよう。

S D 07 遺跡の西端部、B区とC区の接合部に位置する。遺構の確認は表土（I層）を除去後のIV層下位～V層で行っている。S D 06と重複しており、断面からはS D 07の方が新しいと判断されるが、S D 06を越えて南に延びる痕跡は確認されておらず、あるいはS D 06と同時に存在していたかもしれない。流路は北西からであり、南東に向かってほぼ直線的に延びているが、北西端は調査区外である。調査区内における規模は、長さが1.5m、上幅が1.0mである。深さは確認面から、12cmである。堆積土は単層であり、褐灰色を呈するシルトである。

遺物は縄文土器、石器剥片が出土している。浅い溝跡でもあり、出土遺物からでは時期は判断でき



第34図 溝3



- SD08 a - a'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中
 - 2 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 - 3 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルト地山ブロック(径3cm)を多く含む
- SD08 a - a'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルト地山ブロック(径3cm)を多く含む
 - 2 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中
 - 3 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルト地山ブロック(径3cm)を多く含む
- SD08 c - c'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性やや強
 - 2 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 - 3 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルト地山ブロック(径3cm)を多く含む
- SD08 d - d'
- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中
 - 2 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルトをごく少量含む
 - 3 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性中 棕色(10YR4/6)シルト地山ブロック(径3cm)を多く含む
 - 4 黄褐色シルト 10YR5/8 しまり中・粘性中 地山
- SD06 e - e'
- 1 棕灰色シルト 10YR4/1 しまり中・粘性中 径2~3cmの円礫を少量含む
 - 2 黑褐色シルト 10YR3/1 しまり中・粘性やや強 地山ブロック(10YR8/6)を含む
 - 3 黑褐色シルト 10YR3/1 しまりやや弱・粘性中 径3~5cmの円礫を多数含む
- SD07 f - f'
- 1 棕灰色シルト 10YR5/1 しまり中・粘性中 地山ブロックを少量含む
- SD10 g - g'
- 1 黑褐色シルト 7.5YR3/2 しまりやや弱・粘性中 棕色シルトブロック(φ3cm)を含む

ない。

S D08 S D06と同一遺構である。詳細はS D06で記す。

S D09 遺跡の西端部、B区に位置する。他遺構との重複はないが、西に隣接してS D06がある。遺構の確認は表土（I層）を除去後のIV層下位～V層で行っている。流路の方向はS D06と同じく、北東から南西方向である。北東端と南西端は底面上げながら消滅する。規模は、長さが8.2m、上幅が0.8mである。深さは確認面より10cmである。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルトである。

遺物は繩文土器片、石器片が出土している。浅い溝跡でもあり、出土遺物からでは時期は判断がむずかしい。

S D10 遺跡の西端部、B区に位置する。S D06と重複しているが、本遺構の方が古いか同時期である。遺構の確認は表土（I層）を除去後のIV層下位～V層で行っている。流路の方向は東からであり、北西方向にのびS D06と重複あるいは合流する。S D06を越えて北側には延長しないことから、S D06に合流している可能性がある。また、東端は調査区外へ延長する。調査区内における規模は、長さが3m、上幅が0.4mである。深さは確認面より8cmとかなり浅い。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルトである。遺物の出土はなく、時期も不明である。

S D11 遺跡中央部から東部にかけて、C区とD区の交差点付近に位置する。他遺構との重複はないが、S D02と合流している。遺構の確認は表土と盛土（I・II・IIIa層）を除去後のV層で行っている。流路方向は北東からで、南西方向に延び、一端調査区外へでるが、再び現れてS D02と合流する。調査区内での長さは直線距離で6.5m、上幅は最大で0.7mである。深さは確認面から5cm程度である。堆積土は1層のみ確認でき、暗褐色を呈するシルトである。遺物は、近世の磁器片が少量と鉄製品が出土する。遺物から判断すると近世に位置づけられよう。

S D12 遺跡中央部から東部にかけて、C区とD区の交差点付近に位置する。遺構の確認は表土と盛土（I・II・IIIa層）を除去後のV層で行っている。他遺構との重複はないが、南に隣接してS D11がある。流路方向は東からであるが、西側は調査区外へ延長し、残存部分はごくわずかである。調査区内における長さは1.55m、上幅は0.2m程度である。深さは確認面から6～8cmとかなり浅い。堆積土は暗褐色を呈するシルトである。遺物の出土はなく、時期も不明である。

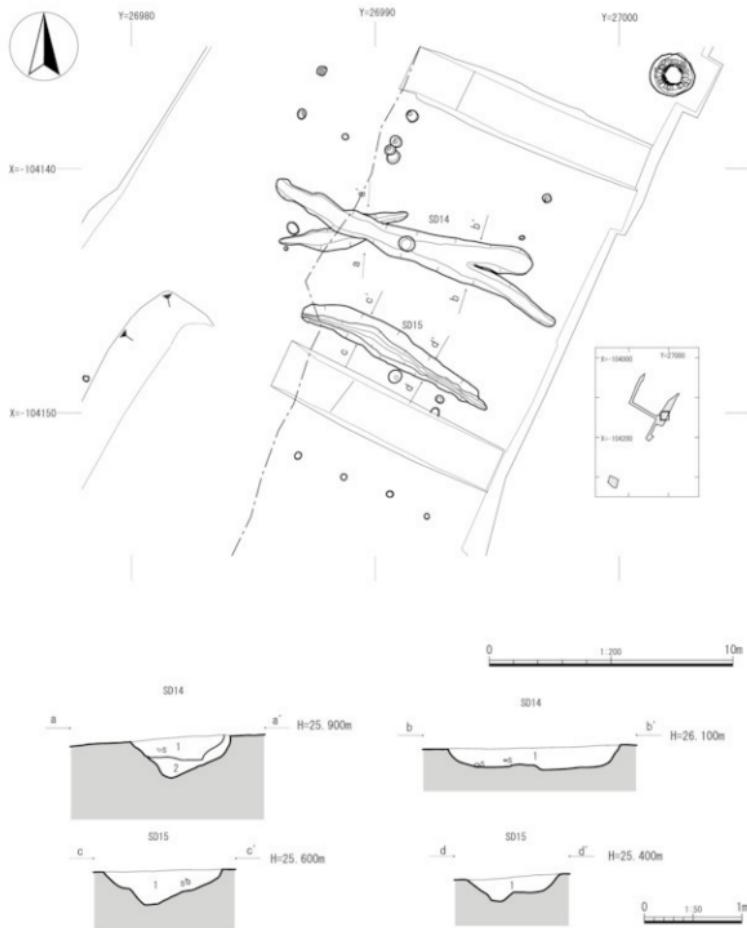
S D13 S B12の項で記す。

S D14A 遺跡東端部、E区に位置する。遺構の確認は表土と盛土（I・II・IIIa層）を除去後のV層で行っている。S D14B、P271と重複しており、いずれも本遺構の方が新しい。流路の方向は北西からであり、南東～東方向に延びている。途中二又に分岐し、いずれも底面の高さを減しながら消滅する。規模は、長さが最大で16.6m、上幅が最大で1.7mである。深さは確認面から22cmであり、底面の形状はほぼ平坦である。堆積土は単層で、暗褐色を呈するシルトである。

遺物は、繩文土器片のほか、石器、土師器、須恵器、渥美、中国陶器が出土している。あるいは12世紀に位置づけられる溝跡かもしれない。

S D14B 遺跡東端部、E区に位置する。遺構の確認は表土と盛土（I・II・IIIa層）を除去後のV層で行っている。S D14Aと重複しており、本遺構の方が古い。流路の方向は西からであり、東方向にわずか延びている。規模は、長さが最大で5.8m、上幅が最大で0.9mである。深さは確認面から40cmであり、底面の形状は「V」字形を呈する。堆積土は単層で、暗褐色を呈するシルトである。遺物や重複関係からS D14Aよりも古いが、近い時期に位置づけられよう。

S D15 遺跡東端部、E区に位置する。遺構の確認は表土と盛土（I・II・IIIa層）を除去後のV層で行っている。他遺構との重複はないが、北3mの位置にS D14A・Bがある。流路の方向は



SD14 a - a' b - b'

1 暗褐色シルト しまりやや弱・粘性やや弱 明黄褐色シルト粒(径1mm以下)を1%、黒褐色シルトブロック(径5mm以下)を3~5%含む
土器片と石を含む

2 暗褐色シルト 黑褐色シルトブロック(径5~20mm)10%, 黄褐色(10YR5/6)シルト粒(ϕ 1~2mm)を7%含む

SD15

c - c'

1 黄褐色シルト 10YR3/4 しまりやや弱・粘性やや弱 黑褐色(10YR2/3)シルト粒(径2~5mm)を3%、土器粒・石を含む
d - d'

1 褐色シルト 10YR3/4 しまりやや弱・粘性やや弱 黑褐色(10YR2/3)シルト粒(径2~5mm)を3%含む

第36図 溝5

北西からであり、南東に向かってほぼ直線的に延びている。規模は、長さが6.5m、上幅が最大で1.4mである。深さは確認面から32cmである。断面の形状は「V」字状を呈している。堆積土は単層であり、褐色を呈するシルトである。遺物は、土師器片が主体に、縄文土器片も少量出土している。遺構の所属時期は、遺物から判断すると、平安時代の可能性がある。

S D16 S X02に名称変更した。詳細はS X02の項で記す。

S D17 遺跡の西端部、B区とC区の接合部に位置する。遺構の確認は表土（I層）を除去後のIV層下位～V層で行っている。S D06と重複しており、本遺構の方が古い。流路の方向は南東からであり、北西に向かってほぼ直線的に延びている。両端はいずれも調査区外であり全容は不明である。調査区内における規模は、長さが6.8m、上幅が0.6mである。深さは確認面から7cmとかなり浅い。堆積土は単層であり、黒褐色を呈するシルトである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

（6）不 明 遺 構

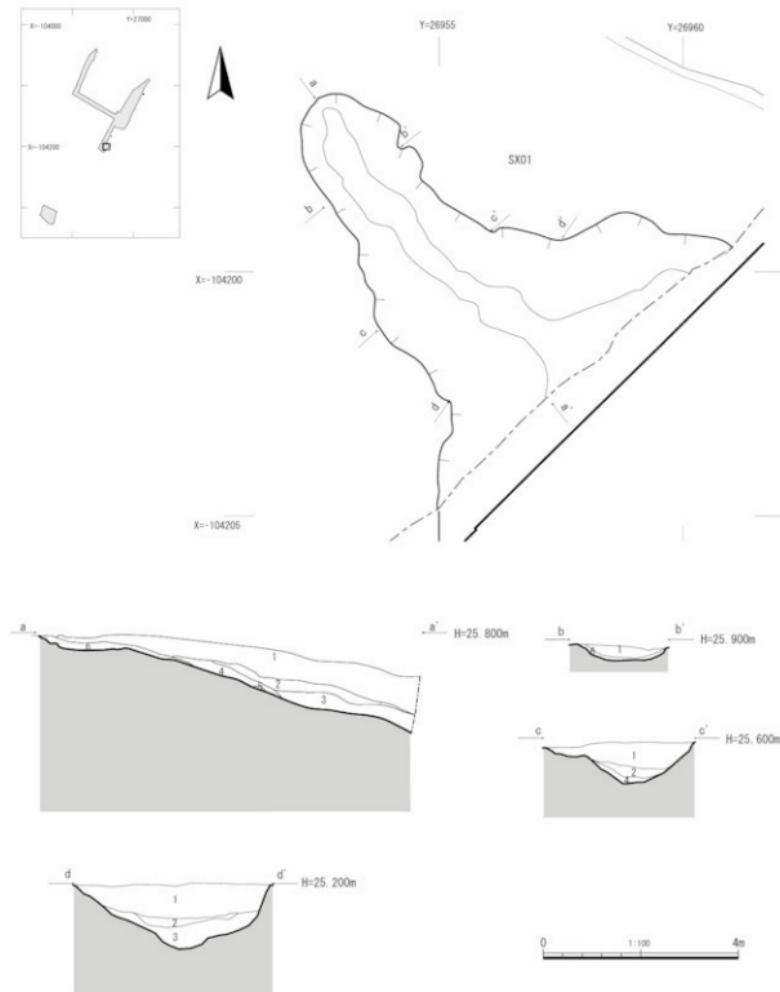
今回の調査では2基を不明遺構とした。特定の機能を付与するには判断が難しいものである。いずれも、調査区内では部分的にしか調査できていないため、本来の機能が推定できないこともある。したがって、今後隣接地の調査が進めば、異なる遺構名称となる可能性がある。

S X01 遺跡南東部のD区に位置する。他遺構との重複はないが、北3mにS K08がある。検出は表土と盛土（I・II層）直下のV層で行っている。本遺構は東向きの斜面に立地し、斜面の等高線に直交して北西～南東方向に主軸がある。平面形は不整形な形状を呈し、斜面上は長楕円形を、南東側にむけて大きく裾を広げるような形状を呈する。その先はコンクリート擁壁によって壊されており、さらに調査区外へ延長する可能性があるため、全容は不明である。

規模は主軸方向に8mあり、さらに調査区外へ延びる。主軸に直交する方向も調査区内においては最大で8mとなる。深さは、北西側から南東側に向け深くなっている。調査区内で最大の深さは確認面より0.65mである。堆積土は6層が確認できる。1～4層は黒褐色シルトを基調としている点で共通する。とくに炭化物や焼土粒を多く包含しているが、流れ込みによるものと推定される。5層は、黒色シルトであり、6層は暗褐色シルトである。形状も不整形であり、立地の状況を考慮すると雨裂溝の可能性があるが、規模が大きな点や、多数の遺物を包含する点で判断が難しい。当初は何らかの生産遺構の可能性も考慮したが、焼土や炭化物の量が少なく、原位置を保っているものもない。したがって、ここでは便宜的に不明遺構として取り扱った。

遺物は堆積土の上層から下層まで、12世紀代の遺物が中心に出土する。かわらけ片、国産陶器片などがあり、そのほか土師器や石器などが含まれている。遺構の傾斜や立地状況を考えると、本遺構の上方の平坦地から流れ込んだものと理解される。時期も判断が難しいが、最新の時期の遺物が12世紀であることから、この時期までは開口していたと考えている。

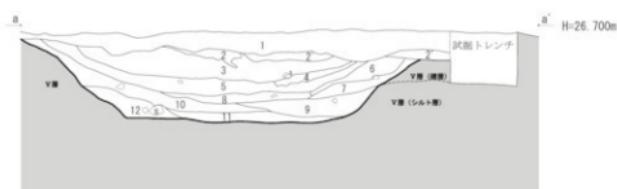
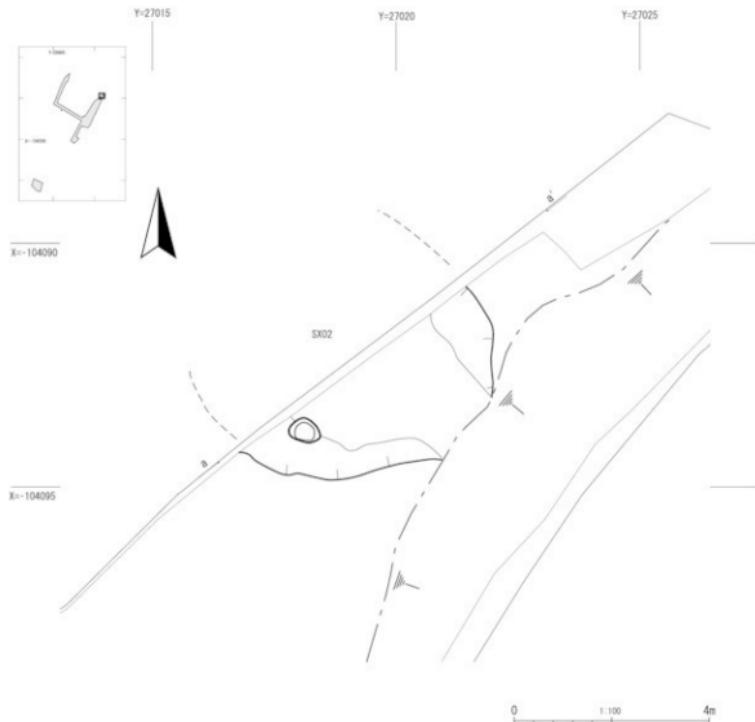
S X02 遺跡の東端、E区北部に位置する。遺構の確認は、表土と盛土（I・II層）除去後のV層で行っている。他遺構との重複はない。平面形は、溝跡の先端部の類似し、半円形状を呈している。南東端はカクランもしくは崩落によって壊されている。したがって、ここが終端なのか、さらに東に延長するか不明である。北西部も調査区外へ延長するため全容が不明である。調査区内における規模は、遺構に対して直交していないが、いずれも最大で長さ2.4m、上幅5.7m、下幅3.5mである。深さは確認面から1.45mである。断面の形状は「逆台形」状を呈し、堀跡ならば箱堀状を呈する。また、北側の壁面は南に比べてやや低く、崩落した可能性がある。堆積土は、表土・盛土を除けば10層に



SX01①

- 1 黒褐色シルト 10YR2/3 しまりやや弱・粘性中 黄褐色(10Y5/8)シルト、炭化物、粘土を少量含む
- 2 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中・粘性やや強 炭化物、粘土を少量含む
- 3 黒褐色シルト 10YR3/1 しまり強・粘性強 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト、炭化物多く含む
- 4 黑褐色シルト 10YR2/3 しまり強・粘性強 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトを少量含む 炭化物をぐく少量含む
- 5 黑色シルト 10YR2/1 しまり強・粘性強 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトを少量含む 炭化物をぐく少量含む
- 6 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり中・粘性やや強 褐色(10Y4/6)シルトを多く含む 炭化物を含む

第37図 SX01平・断面図



第38図 S X 02平・断面図

SX02

- 1 暗褐色シルト 10YR5/1 しまり中・粘性やや強 現木水耕作土
- 2 暗灰色シルト 10YR4/1 しまり中・粘性中 明黄褐色(2.5YR7/6)シルトブロックを6%含む
- 2' 暗褐色シルト 10YR4/1 しまり中・粘性中 明黄褐色(2.5YR7/6)シルトブロックを10%含む
- 3 黒褐色シルト 10YR3/1 しまり中・粘性やや強 明黄褐色(2.5YR7/6)シルトブロックを3%、焼土粒、炭化物を1%含む
- 4 黑褐色シルト 10YR3/2 しまり強・粘性中 明黄褐色(2.5YR7/6)シルトブロックを10%、焼土粒、炭化物を7%含む
- 5 黑褐色シルト 10YR3/2 しまり強・粘性中 明黄褐色(2.5YR7/6)シルトブロックを1%、燒土粒、炭化物を1%含む
- 6 黄灰色砂質シルト 2.5YR4/1 しまりやや弱・粘性弱 程2~3cm程度の円礫40%、明黄褐色(2.5YR7/6)シルトブロックを1%含む
- 7 暗灰色砂質シルト 10YR4/1 しまりやや弱・粘性中 明黄褐色シルト粒を1%、燒土、炭化物をごく少量含む
- 8 灰色粘土質シルト 5Y5/1 しまり中・粘性やや強 程5cm程度の礫1%、炭化物を1%含む
- 9 灰色粘土質シルト NA/1 しまりやや弱・粘性やや強 部分的に砂層が入る 程5cmの円礫1%、明黄褐色(2.5YR7/6)シルトブロックを3%含む
- 10 青灰色シルト 5B5/1 しまりやや弱・粘性中 淡黄色(5Y8/4)シルトブロック30%含む グライ化
- 11 暗灰色砂礫層 N3 しまり弱・粘性やや強 程1cm以下の礫(砂利)の層 暗灰色砂質シルト10%含む
- 12 灰色シルト N4 しまり弱・粘性やや強 オリーブ灰色ブロック(5GY6/1)を10%帯状に含む 円礫径5~10cmも1%程含む

区分できる。3~5層は黒褐色を呈するシルト層で、焼土や炭化物の粒を含んでいる。6層は黄灰色、7層は暗褐色を呈する砂質シルトである。北側の位置するこれらの層は、壁面が崩落した層の可能性がある。8~9層は灰色を呈する粘土質シルトであり、砂層が部分的に確認できる。10層は青灰色シルト、11層は暗灰色を呈する砂礫層、12層は灰色のシルトであり、下層ほどグラウシ化し、砂質になる。3層以下は、レンズ状堆積や三角堆積が確認できることから、いずれも自然堆積と想定している。

調査区内にはわずかな範囲でしか残存していないため、全容が不明な点が多いが、溝のように調査区外に伸びるならば、あるいは堀のような長大な遺構の可能性がある。

遺物は、中層（5・7・8層）付近から出土することが多く、下層（9・10・11層）からも出土する。種類は、縄文土器片、石器剥片、土師器片のほか、国産陶器片17片、貿易陶磁（白磁）2片、かわらけ片が出土している。

したがって、遺構の時期は出土遺物からみると12世紀に位置づけられる。

(7) ピット（小穴）・柱穴

建物復元できなかった柱穴については、観察表においてその属性を掲載するにとどめている。建物以外に利用されたピット（小穴）もある可能性があるが、区別できないため一括して取り扱っている。これらの詳細については、第11表を参照されたい。

3 出 土 遺 物

今回の調査では、縄文時代から、平安時代、12世紀代、江戸時代の遺物が出土した。遺物の中心は竪穴建物跡から出土した土師器類、E区の包含層から出土した弥生土器である。また、12世紀代のかわらけや国産陶器類が一定量出土したことは注目される。

縄文時代の遺物は、土器片や石器が少量出土するのみである。いずれも各調査区に散在しており、細片が多く図化できたものは少ない。縄文時代に位置づけられる遺構も少なく、縄文時代にはあまり利用されなかつたかもしれない。弥生土器はE区の東側斜面に広がる包含層からの出土である。遺構に伴うものではないがまとまって出土している。細片や接合しない破片が多いため、完形に復元できる個体はなく、不明な点も多い。

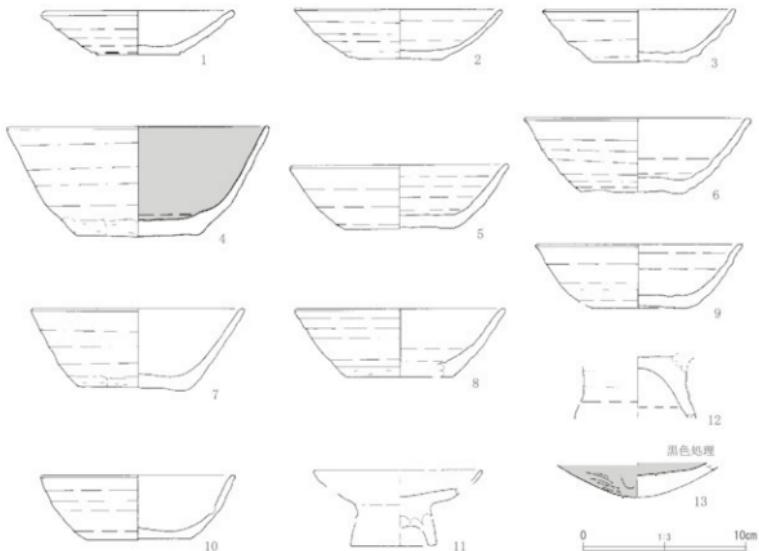
平安時代の遺物は、土器類が中心である。竪穴建物1棟からの出土が大半であり、包含層（現代の盛土を含む）からの出土もある。12世紀の遺物には、かわらけなどの土器や渥美や常滑産の陶器類がある。平泉以外ではまとまって出土する稀少な例であり、遺構からの出土ということでもあり、平泉の最盛期には何らかの形でこの遺跡が利用されていたことが窺い知ることができる。

江戸時代の遺物は、柱穴や溝跡、包含層から出土している。破片資料が多く、完形に復元できる個体はない。また、漆器碗もこの時期に位置づけられる。

以下では、遺構からまとめて遺物が出土する例が少ないとから、種別ごとに一括して記述していく。遺構ごとの遺物出土量については、第3表を参照されたい。

（1）土 器 類

平安時代（10世紀）の土器類 1～4、14～18はS I 01から出土した土器類である。1～4は口クロ調整の杯で、復元口径が12cm前後のものと13cm前後のものの2者がある。1・3が前者であり、器高は3cm前後と類似する。色調は明黄褐色からにぶい橙色あるいは黄橙色を呈する。内外面ともにロクロナデが施される。4は大型の杯で、鉢に近い形状のものである。復元口径が16.4cm、器高が6.9cmと大きい。内外面ともにロクロ調整が施されるが、外底面側縁にはケズリが施される。底部は糸切りであるが、磨減しており再調整が施されるか確認できない。また、内面には黒色処理の痕跡がわずかに残る。カマド内より出土している。14～17は土師器甕、18は須恵器甕である。14は破片であるが、図上で復元が可能である。口縁部はゆるやかにかつわざかに外反するのみで、胴部はやすぼまりながらほぼ直線的に底部に至る形状を呈する。復元口径が23cm、器高が27.4cmである。調整は、外面では、ヘラケズリのみであり、口縁部は横位の、胴部～底部には継位のヘラケズリが施される。器壁も厚く粗雑なつくりである。15の口縁部は短いが、「く」字状に屈曲し、胴部は中位付近を頂点とするふくらみをもつ形態を呈する。底部は欠損している。口径は14.2cmであり、調整は、内外面ともにヘラナデが施される。16・17は胴部下位以下を欠損している。口縁部の形状はいずれもわずかに外反するものである。胴部は、16ではわずかにふくらみを帯び、17ではほぼ直線的な形態を呈する。調整は、磨減が大きいものの、外面にはヘラケズリが、内面にはヘラナデが施される。18は赤褐色を呈するものの、須恵器と考えられる。口径20.6cmの中型の甕である。3破片に分かれ、接合箇所はないものの、形態、胎土、色調が類似することから同一個体とし、図上で合成している。胴部下位以下を欠損するもので、残存状況から、胴上位に最大径をもつ器形と想定される。器壁が厚く、硬質であるが、色調は赤い。口縁部にはロクロナデが、胴部にはタタキが施される。内面には當て具痕が残



第39図 土器類実測図1

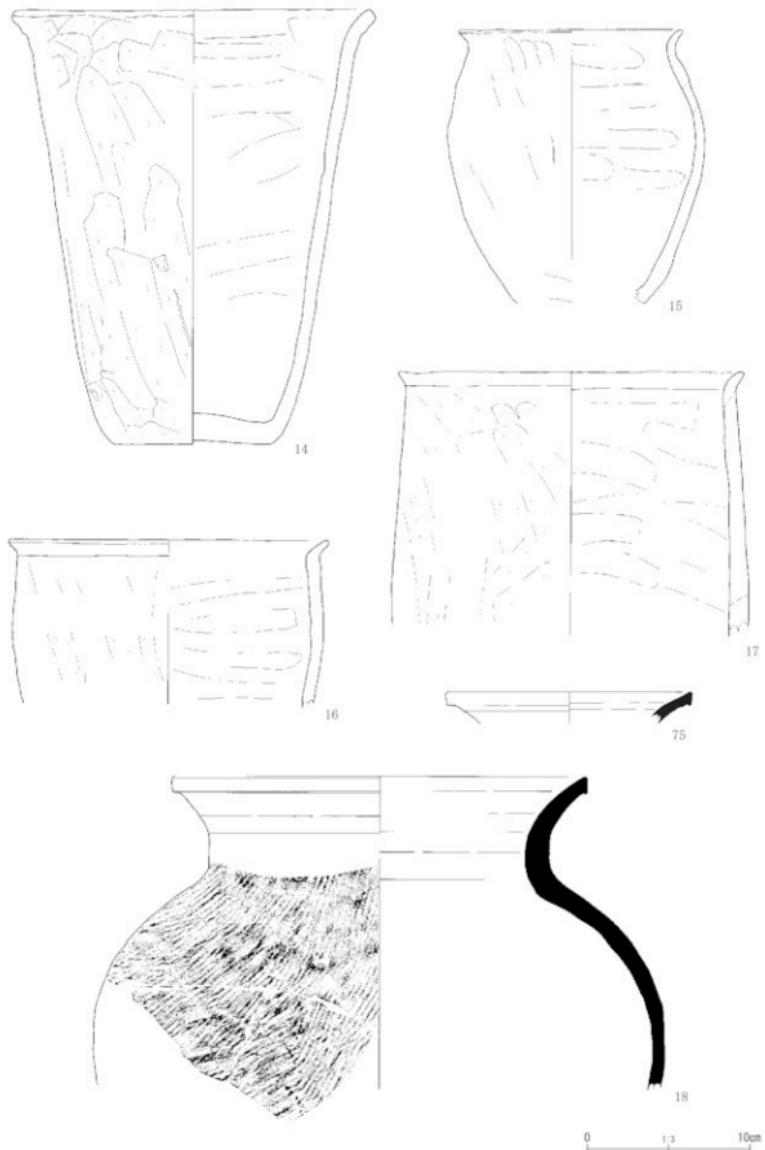
る。なお、S I 01からはこのほか約9kgの土師器片や須恵器片が出土している。

5~11はE区の盛土内から出土した土器である。この盛土は近世以降の地形変更にともなって移動されたものと考えており、本来は、遺跡中央(S I 01付近)にあった土器群と想定している。

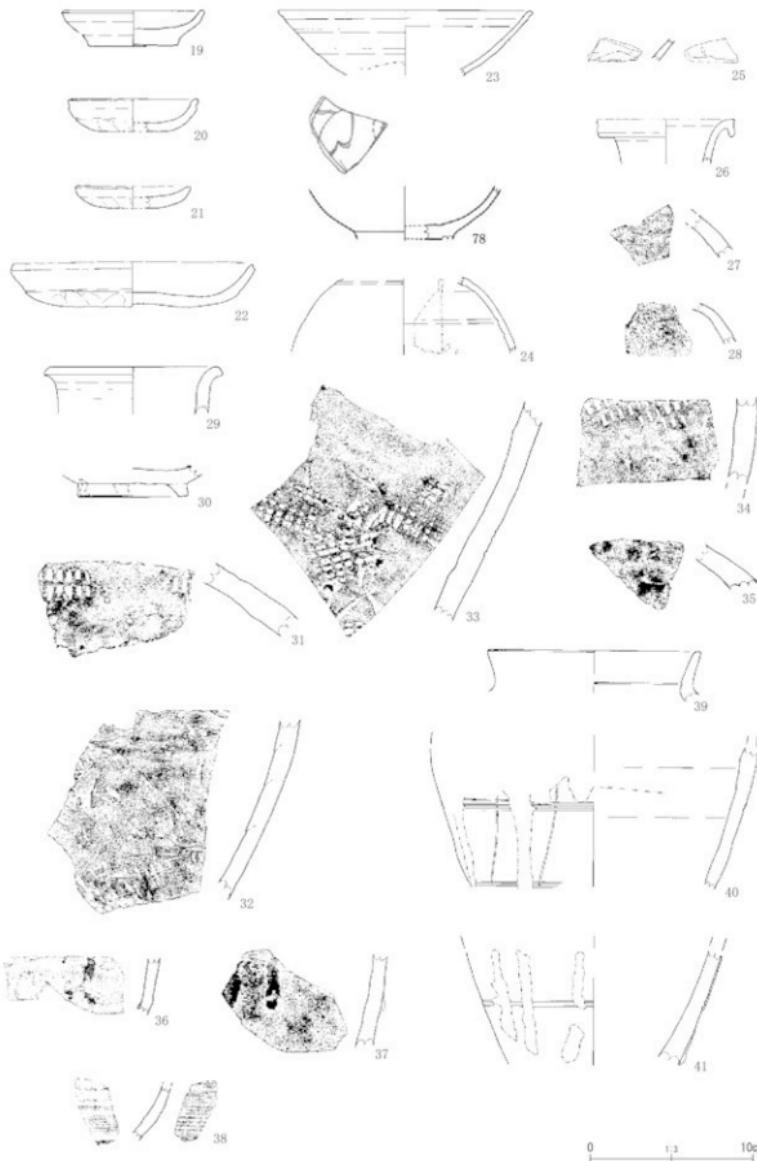
5~10は杯、11・12は高台皿あるいは高台杯、13は鉄鉢形土器の底部の可能性がある。5~9の杯には、口径12cm前後の10と14cm前後の9、13cm前後の7~9の3者に分けられる。器形的な特徴はいずれも共通しており、口縁部はあまりふくらみをもたず、直線的に外方へ開くものである。6点すべて内面に黒色処理が施されず、橙色系を呈する色調である。調整は内外面ともにロクロナデのみであるが、7・8には外底面の側縁にヘラケズリが施される。11は高台皿の底部片である。口縁部と脚部を欠損する。12は高台杯の脚部片である。残存長は3.9cmあり高い脚部をもつ杯に復元される。13は底部のみの破片であり、不明な点が多いが特徴的な底部の形態から、あるいは鉄鉢形土器の一部かもしれない。内外面ともに黒色処理がみられ、ミガキ調整が施される。

平安時代末葉(12世紀)の土器類 平安時代の土器類のうち、12世紀代に位置づけられるものを別にした。遺物にはかわらけ、国産陶器類、輸入陶磁器がある。

19はロクロかわらけ、20~22は手づくねかわらけである。19はロクロかわらけの小皿である。破片であるが図上復元できる。復元口径9cm、器高2.3cmである。底部の切り離しは糸切りで、内外面ともにロクロナデが施される。20・21は手づくねかわらけの小皿である。復元口径は20の方が若干大きいがおおむね8~9cmの間におさまる。調整はヨコナデを基調とし、外面下半にはユビオサエの痕跡が残る。22は手づくねかわらけの大皿である。復元口径が15cm、器高が2.8cmである。口縁端部



第40図 土器類実測図 2



第41図 かわらけ・陶磁器類実測図1

は面取りがなされ、ヨコナデは一段のみ強く、下半にはユビオサエが施される。

23~28は12世紀の貿易陶磁器である。23~26は白磁、27~28は陶器である。23は白磁碗の口縁部から胴部上位の破片で、底部を欠損している。淡オリーブ色を呈する釉薬が内外面ともに掛けられる。底部付近は露胎している。器壁には化粧土がなく、細かな窪みがいくつもある。これらの特徴から大宰府分類のC期V2 a類に分類される。24は白磁壺類の胴部片である。灰オリーブ色を呈する釉薬が外面全体にかかり、内面には垂下している。器壁の薄さから水注の胴部と考えられ、大宰府分類のⅢ類に相当しよう。この23・24はS K11からの出土である。25は白磁碗の胴部下半の破片で、一部露胎している。26は白磁水注の口縁部片である。内外面ともに灰オリーブ色を呈する釉薬が掛けられる。口縁部の特徴から水注片と考えられ、大宰府分類のⅢ類に相当する。この2点はS X02からの出土である。27・28は中国産の陶器壺片である。いずれも胴部上半部の破片と想定される。この両者はいずれも若干黄味がかる灰色を呈し、外面に自然釉がかかる。大宰府分類の耳壺のⅢ類等の壺類と考えられる。27はS D14から、28はS X01からの出土である。

29~74は、国産の陶器類である。このうち29~35は渥美窯産、36~69、71は常滑窯産、70、72~74の産地は不明ながら日本海側で生産された須恵器系陶器である。

29は渥美壺の口縁部片である。濃緑色の釉が内面にかかる。P 002からの出土である。30は鉢類の底部片で、断面が逆台形状の高台がつく。S D14からの出土である。31は大型の壺の胴部片である。胎土は緻密であり、やや軟質の感がある。外面に厚く濃緑色の釉がかかり、長格子文の押印が施される。D区の包含層からの出土である。32~35は渥美の大壺の胴部片である。32・34には長格子文、33には格子文の押印が施される。35のみうすく自然釉がかかるが、それ以外は無釉である。また、34の破片には、2長辺ともに磨り面の痕跡がある。2次使用に伴う痕跡と考えられるが用途は不明である。32・33はS X01から、34・35はS X02からの出土である。

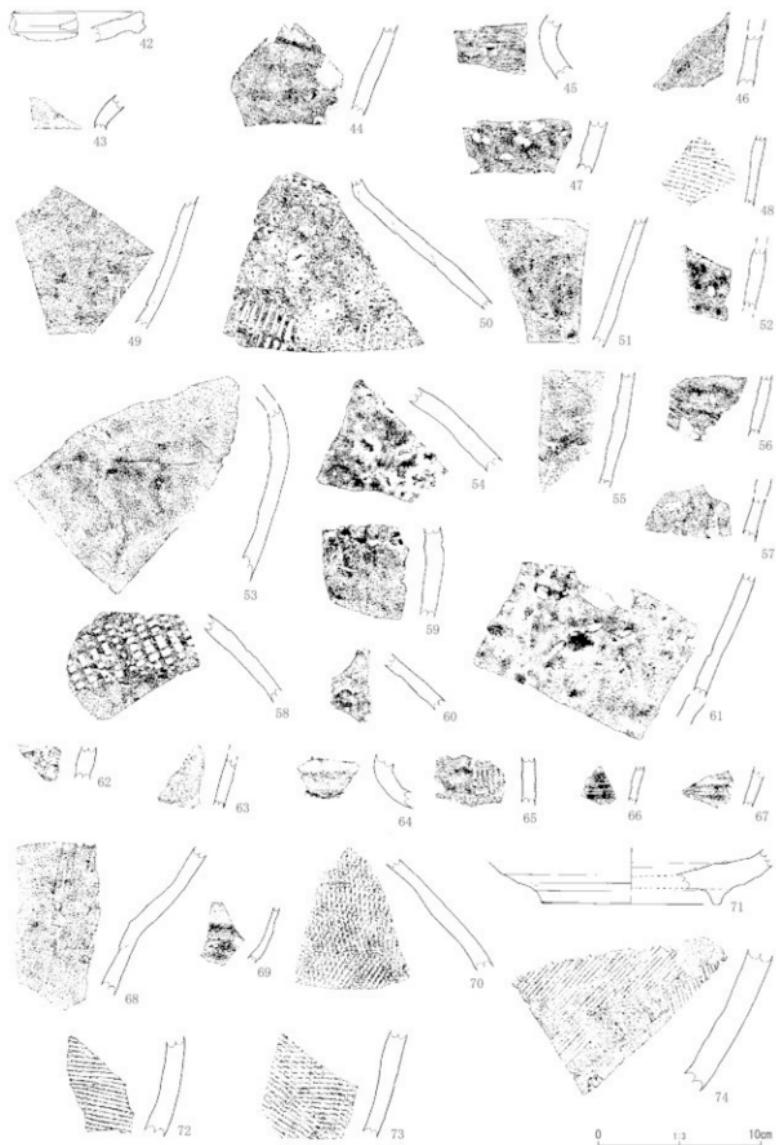
36~69、71は常滑窯産の陶器である。36~69は壺類の破片で、前2者は暗褐色の外壁面に濃緑色の釉が垂下する胴部片である。38は無釉の胴部片、39は口縁部に施釉された破片である。36はS X01から、37はS X02から、38はP 002から、39はS K11からの出土である。40・41は三筋文壺の胴部片である。いずれもS X02からの出土であることから、同一個体の可能性がある。49は2段目、3段目が、41には3段目の筋文に相当すると考えられる。2断面は2本のクシを一単位としているが、一部に3本のクシメが確認される。3段目は、2個1対のクシを使用した筋文である。器表はいずれも暗褐色を呈し、濃緑色の釉が垂下している。42・43・45はそれぞれ壺類の口縁部と頸部片である。

44・46~68は大壺などの壺類の胴部片である。大型の破片が多く、大壺が多く含まれている。外面には、押印が施されるものがある。50・54には長格子文が、48・58には格子文が、65には平行条線文がそれぞれ施されている。また、無釉の破片が多く、赤褐色を呈する器表が多いが、53・54・59・60・61・65・66などは濃緑色の釉がかかる。44はS D01から、46~51はS X01から、52~57、59、61はS X02からの出土である。69は碗類の破片である。71は片口鉢の底部片と推定される。体部下半はケズリ調整が施される。S X02からの出土である。

70・72~74は、須恵器系陶器の破片である。いずれも大壺片で外面にタタキが施される。表面にはうすく透明な釉がかかる。遺構からはS X02からの出土が多い。

鎌倉~江戸時代の土器類 76~79は、中世以降の陶磁器である。78は白磁碗の胴部下半から底部にかけての破片である。見込みには陰刻で花纹が描かれているが、細片のため詳細は不明である。欠損部分が多いため、判断が難しいが、とりあえず森田分類のB群に位置づけた。

76は磁器碗の口縁部片で、胎土から肥前産と推定される。P 050からの出土である。77は瀬戸・



第42図 陶磁器類実測図 2

美濃系の陶器碗である。志野の可能性がある。79は擂鉢の底部片である。摺面が内底面と部体の2段に分かれている。詳細は不明であるが、近世～近代に位置づけられようか。SE01からの出土である。

弥生時代の土器類 弥生土器はすべてがE区東斜面の包含層（Ⅲb～Ⅳ層）より出土した。遺構の存在を予想し、薄く掘り下げていったものの、遺構の痕跡は確認できなかった。そのため、包含層一括として取り上げている。合計約10kgの土器が出土したが、多くは接合しないことから出土地点

が原位置ではないことがわかる。斜面地でもあり、多くは上方から流出したと想定できる。完形に復元できる個体がないため、部位ごとに施される文様によって大別し（便宜上I～V群とする）、その大別ごとに説明を行うことにする。

I群 肩部に方形状の区画をもつもの。80は壺の肩部片のみがある。小破片資料のため全容はわからないが、沈線で方形状に区画し、なかに縄文を充填するものである。

II群 口縁部に直線状の2～3本単位の沈線が施される群である。81～88までが該当する。器種は細片のため同定が難しいが、83は壺、それ以外の多くは高杯であると推定される。波状口縁のものも含まれる（81・87など）。内面にも沈線が施される例もある（82）。

III群 口縁部～胴部にかけて沈線で弧状の文様が施される群である。89～91は口縁部片に、92～109は胴部に文様が施される。器種は、器壁の薄さや直線的な形状から、鉢類や高杯が想定される。部分的であるため全容がわかる文様はないが、この弧状の文様は変形工字文の一端と思われる。沈線文で文様が描かれるもののはかに、92・106のように沈線で区画された梢円形状の中を縄文で充填するものもある。

IV群 脚部に波状文が施されるもの。110～118がこれに含まれる。多くが高杯の脚部と想定される。117や116などは波状文であり、113、114などは変形山形文に相当しよう。脚部端には平行沈線を3条施すものが多い。

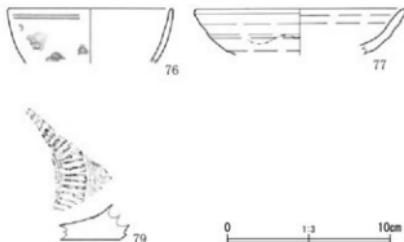
これらの諸特徴から、細片ではあるものの石川日出志や品川欣也のいう谷起島式（石川2005、品川2005）の範疇に含まれよう。したがって弥生時代中期前葉の土器群となる。

縄文土器 図化したのは1点のみであり、出土自体も少ない。119は深鉢の胴部片で、細粘土ひもをS字状にして添付したもので、大木4あるいは5式に相当すると推定される。

（2）石器・石製品

石器は、石製品や剥片も含めて合計1.99kgが出土している。遺構外からの出土が多く、遺構から出土する場合でも、他時期の遺物と混在する例が多い。また、出土地点で最多量が出土するのは、弥生土器と共に出土したE区の東斜面部となる。したがって、弥生時代の石器も含まれると考えられる。ツール類と石製品は、合計16点出土し、すべて図化している。

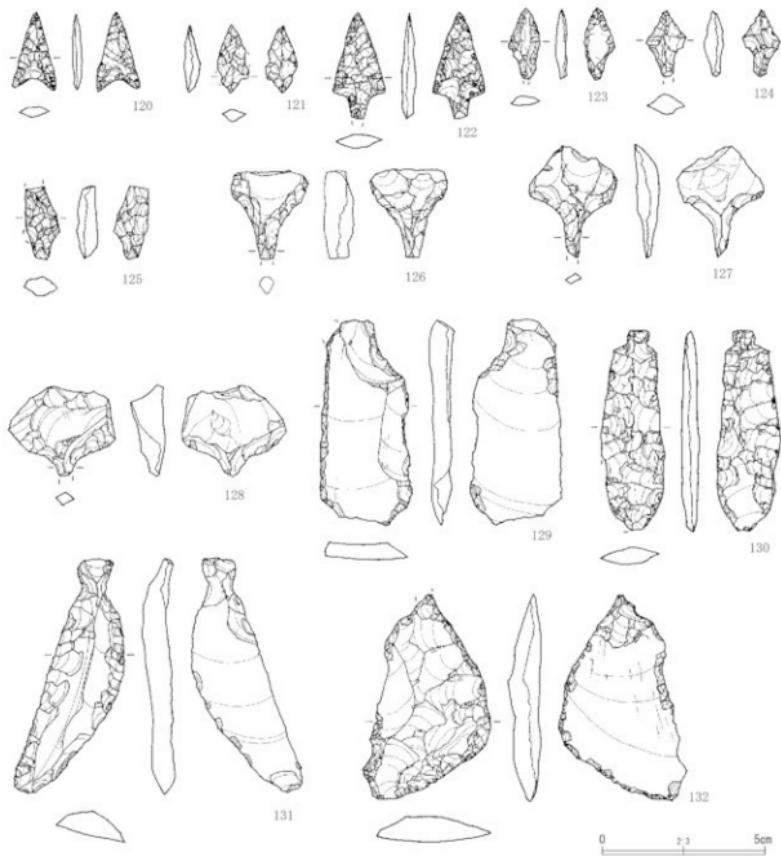
石鎌 扁平で、2次加工により銳角な先端部が作り出され、長さおよそ5cm以下のものを石鎌とし



第43図 陶磁器類実測図3



第44図 繩文・弥生土器実測図



第45図 石器実測図

た。合計6点が出土している。基部が「四」形にくぼむものと突出するものの2者がある。今回の出土事例では前者が1例、後者が5例と、後者の方が多い。大きさでみると、長さが2cm前後のもの（120・121・123・124・125）と3cm前後のもの（122）がある。123～125は弥生土器と同一層からの出土であり、そのほかは他遺構に混入していたものである。使用された石材は124を除くと、頁岩（珪質頁岩）であり、124のみは黒曜石である。

石錐 2次加工による錐状の端部が作り出されるものを「石錐」とした。3点出土している。いずれも先端部が欠損しており全容はわからないが、幅広の基部に尖ったドリルを作り出している。使用される石材は、すべて頁岩である。

石匙 つまみ状の突起を一端につけ、縁辺に刃部をもつものを「石匙」とした。4点が出土している。いずれも刃部が縦に長い「縦型」の石匙である。129・132はつまみ部が欠損しているが、その形態から石匙としている。使用される石材はすべて頁岩である。

石鎧（打製石斧） 縱長の剥片に、刃部を作り出すもので、両側縁の2/3までを刃部としている。片刃の石器で、両側縁の中央部に抉りがはいる。

磨石 碟の表面に、磨痕、凹み痕、敲打痕が残されたものを

一括して磨石類とする。134・135ともに扁平であり、磨痕が顕著に認められる。134では両面に磨痕が残る。使用される石材は、134が安山岩であり、135が頁岩である。

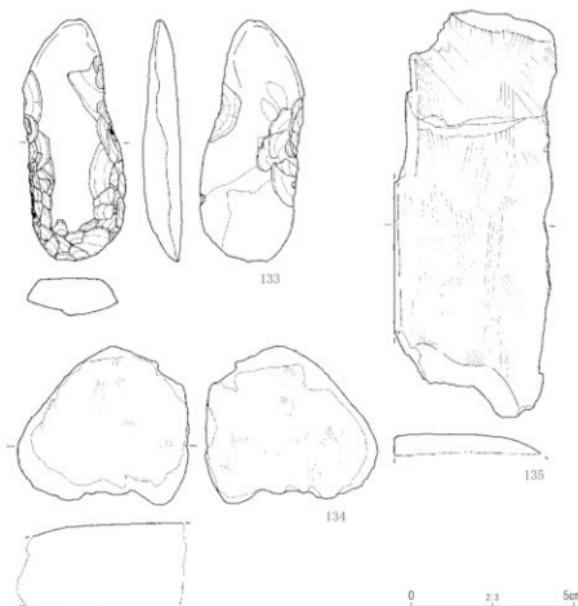
(3) 土製品・金属製品

土製品は図示した繩口のみの出土である。土製品の範疇には入れにくいが、焼成粘土塊やカマド壁と推定される粘土塊など合計約3kg出土している。金属製品は、刀子片を中心に540g程度出土している。

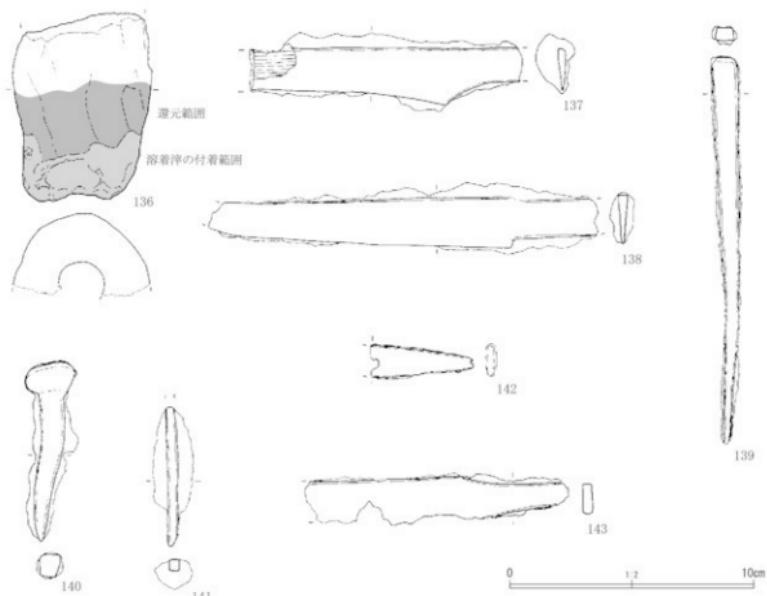
繩口 1点のみの出土である。約1/4程度の残存状態であるが、炉側の先端部には還元色を呈する範囲やスラグ痕が付着している。

刀子 137・138・142・143の4点が出土している。いずれも破片であり、完形のものはない。137は関部付近の破片である。錆膨れが大きく、観察困難な点があるが、関は撫形の片関である。棟側には関なく、刃部から茎部にかけて段差がない。138は切先と茎尻が欠損するものである。関は両側にあると想定されるが、観察できなかった。142は茎部のみの破片である。目釘穴が穿たれている。143も関付近の破片である。

鉄釘 139～141が鉄釘と推定されるものである。140以外は明確ではないが、形状から鉄釘と想



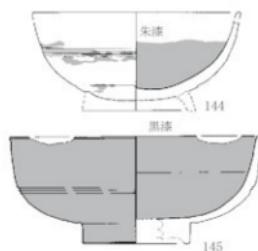
第46図 石器2・石製品実測図



第47図 土製品・金属製品実測図

(4) 漆 器

漆器椀 漆器椀は2点出土している。144はS E01からの出土で、高台の痕跡が残るが、遺存しない。内外面ともに朱漆が施されている。145は、S X02からの出土である。口径が15cmもある大ぶりの椀である。内外面ともに黒漆が施されたものである。



第48図 漆器椀実測図

V 分析

1 彼岸田遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

彼岸田遺跡は、岩手県奥州市前沢区白山字彼岸田地内（北緯 $39^{\circ}3'42''$ 、東経 $141^{\circ}8'39''$ ）に所在する。測定対象試料は、S I 01出土土器付着炭化物（No.1：IAAA-112569）、S X 01出土木炭（No.2：IAAA-112570）の合計2点である（表1）。No.1は土器部破片の外側から採取され、調理時の吹きこぼれ等による残滓が炭化したものかと考えられている。土器は土器で、その特徴から10世紀頃と推定される。S X 01は斜面にある性格不明遺構（もしくは洪水による地形の抉れ部）で、縄文時代から中世までの遺物が混在して出土しており、出土土器の主体は12世紀である。

(2) 測定の意義

集落の存続時期を解明する。また、縄文時代から中世までの遺物が混在して出土したS X 01の時期を推定する。

(3) 化学処理工程

- 1 メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1\text{ mol}/\ell$ （1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- 4 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6 グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- 1 $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）

- で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2 14C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。14C年代は $\pm 13C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差（ $\pm 1 \sigma$ ）は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
 - 3 pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい（14Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（14Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\pm 13C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
 - 4 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1 \sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2 \sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\pm 13C$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv 4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC／AD」（または「calBP」）という単位で表される。

（6）測 定 結 果

S I 01出土土器付着炭化物No. 1の14C年代は 1350 ± 30 yrBP、暦年較正年代は、 1σ で $650 \sim 675$ cal ADの範囲、 2σ で $640 \sim 763$ cal ADの間に2つの範囲で示され、土器の特徴から推定される10世紀頃よりもかなり古い値となっている。試料となった付着物は暗褐色を呈し、また炭素含有率（燃焼された試料量に占める炭素相当量の割合）が4%と非常に低い値であった。調理等に伴って付着する炭化物は通常黒色で、炭素含有率が50~60%程度となることが多い。付着物が薄い場合、採取する際に土器の胎土が混入し、試料の炭素含有率が低くなる場合もある。本試料の色調が黒色よりも淡いことと、炭素含有率が低いことから、測定された炭素の由来について慎重に検討する必要がある。

S X 01出土木炭No. 2の14C年代は 980 ± 20 yrBP、暦年較正年代（ 1σ ）は $1020 \sim 1148$ cal ADの間に3つの範囲で示される。この遺構から出土した土器の主体となる時期である12世紀を含んでいる。試料の炭素含有率は70%弱の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-112569	No. 1	S I 01層位：一括	土器付着炭化物	AaA	-27.73±0.48	1,350±30	84.49±0.26
IAAA-112570	No. 2	S X01層位：一括	木炭	AAA	-19.89±0.41	980±20	88.55±0.25

[# 4884]

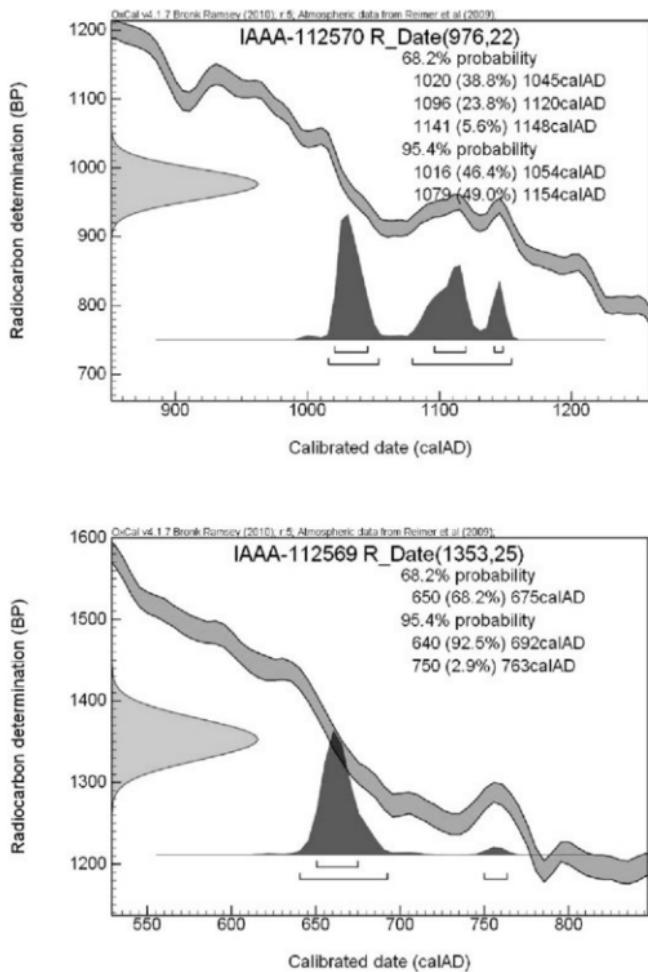
表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112569	1,400±20	84.02±0.25	1,353±25	650calAD-675calAD (68.2%)	640calAD-692calAD (92.5%) 750calAD-763calAD (2.9%)
IAAA-112570	890±20	89.48±0.24	976±22	1020calAD-1045calAD (38.8%) 1096calAD-1120calAD (23.8%) 1141calAD-1148calAD (5.6%)	1016calAD-1054calAD (46.4%) 1079calAD-1154calAD (49.0%)

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon data, Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150



【参考】暦年校正年代グラフ

2 彼岸田遺跡から出土した種実

吉川純子（古代の森研究会）

彼岸田遺跡は奥州市前沢区の胆沢扇状地の下位段丘上に立地し、遺物の主体は平安時代である。本遺跡の堅穴住居跡 S I 01 の焼土を調査担当者が水洗したところ若干の種実を得られた。そこで当時の食料としての植物資源利用状況を調査するためこれら種実の同定をおこなった。

表1 彼岸田遺跡 S I 01出土種実

分類群	出土部位	
イネ	炭化胚乳	3
アワ	炭化種子	16
キビ	炭化種子	9
ヒエ	炭化種子	17
穀類	炭化塊	10
スゲ属	果実	1
カヤツリグサ属	果実	1
タデ属	炭化果実	1
アサザ	種子破片	1
オドリコソウ属	果実	1

表1に彼岸田遺跡 S I 01から出土した種実を示した。以下に特筆すべき種実の形態記載をおこなう。

アワ：本遺跡で出土した炭化種子はやや保存状態が悪く小さめで高さが0.7~1.0mm程度である。円形の頂部がややへこむ形で腹面のへそは細長く、背面の胚は種子長の半分よりも大きい。焼けると背面方向に膨れる特徴がある。

キビ：種子は頂部が丸く基部がやや突出するものが多い。腹面のへそは丸くて短く背面の胚は種子長の半分かやや小さく丸い。

ヒエ：種子は頂部がやや突出する丸みを帯びた菱形で腹面のへそは小さい三角、背面の胚は種子長の3分の2くらいの大きな梢円形である。

アサザ：本遺跡では半分よりやや小さい破片を出土したが、完形であれば扁平で円形の板状で表面に細かい網目模様がある本体の周囲に細長い棒状の突起を密布する。水田などに多い浮葉植物である。

本遺跡の堅穴住居 S I 01 の焼土からは穀類のアワとヒエがやや多く出土し、少量であるがキビとイネも出土した。食用植物以外では炭化したタデ属を出土し、炭化していない草本はスゲ属、カヤツリグサ属、オドリコソウ属を出土した。また、水生植物のアサザも出土した。古代奥州市の穀類利用例としては、前沢区四反田I遺跡ではイネとオオムギ、堤遺跡では少量であるがイネのみの出土例があり（印刷中）、旧水沢市杉の堂遺跡の住居跡からはソバとヒエは多量であるがイネとアワは少量の出土であった（高瀬2006）というように主体となる穀類の種類も組み合わせも少しずつ異なっている。古代の穀類利用は地域・時期のほかに集落の規模や利用の違い、勢力格差などが複雑に関連していることも考えられ、今後のデータの蓄積によりさまざまな利用が解明される可能性がある。なお、スゲ属、カヤツリグサ属、オドリコソウ属と水生のアサザは炭化していない状態で堆積していた。混入の可能性も否定できないが、もともとアサザは陸上に生育しないことから、水域に堆積した粘土などを住居作成時に使用した際にこれらの種子が持ち込まれたことも考えられる。

引用文献

高瀬克範 2006 東北日本先史時代における栽培植物利用の変遷と特質 平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（若手研究B）研究成果報告書



図版1 彼岸田遺跡 S101焼土から出土した種実

1. イネ、炭化胚乳 2,3. アワ、炭化種子 4. キビ、炭化種子 5,6,7. ヒエ、炭化種子（7は焼け膨れ）
8. カヤツリグサ属、果実 9. スゲ属、果実 10. アサザ、種子破片 11. オドリコソウ属、果実

IV 総括

今回の調査成果について、再度触れながらまとめとする。

1 遺構

今回の発掘調査は遺跡におけるはじめての調査となる。ほ場整備事業にともなう発掘調査であるため、調査範囲が細長いという特徴がある。そのため、面的な調査はできなかつたものの、遺跡内を細長く広範囲に調査できた点は、内容を確認するうえでは適した調査となつた。縄文時代から江戸時代までの各時代の遺構や遺物が確認され、遺跡の情報がかなりの範囲で得られている。しかしながら、調査区が狭いため、遺構が調査区外に続くものが多く、そのため全容がしれる遺構は少ないものとなっている。詳細を知るためには面的な調査も必要となろう。今回の調査で確認されたおもな遺構について、時期ごとに触れておきたい。

縄文時代に属する遺構や遺物はA区やB区、遺跡の南端や西端付近で見つかる傾向がある。遺跡はほぼ明後沢川西岸の自然堤防上に立地する。この自然堤防は北側から南に向かってほぼ南北に延び、東西、南に緩斜面がある。これらの地点では、斜面部分でもあり、地形が改変される範囲が少なく、IV層の黒褐色土層が残存している地点もある。検出された遺構は土坑のみであり、遺物も量的に少ない。したがって、縄文時代の各時期において遺跡の積極的な利用はほとんどないことがわかる。

つづく弥生時代も比較的様相が不明な時期である。この時期に位置づけられる遺構は検出されないが、遺跡の東側斜面（E区）に弥生土器を包含する層が存在する。調査した範囲は小さいこともあるが、土器の接合はほとんどみられなかった。そのため、こここの場で廃棄したものではなく、より上方から流れ込んだと考えている。したがって、東斜面の西側、つまり、頂部の平坦面には弥生期の遺構が存在する可能性がある。時期は中期前葉前後であり、付近にある川岸場II遺跡よりも古い段階の土器群である。

現在のところ、遺跡の中心となるのは平安時代である。遺構が存在するのは自然堤防頂部の平坦面である。この範囲は畑作地であったが、かつて平坦面を広げるために頂部をけずり、周囲にその土を盛ったことがわかっている。そのため地形改変が著しく、遺構の残存は良好ではない。竪穴建物などは農道直下であったため今回確認できたのであり、農道から外れた部分については完全に削平されている。検出遺構としては、竪穴建物や掘立柱建物、溝や土坑などがあげられる。掘立柱建物については時期決定が難しいが、柱穴から土師器や須恵器を出土する建物が2棟あり、これらがこの時期に所属する可能性がある。平安期の集落から掘立柱建物が検出される例が少ないとおり、積極的に時期決定し難いが、周辺の遺跡状況からみてもこの時期の掘立柱建物が存在する可能性はある。

時代的には平安時代に含まれるが、12世紀に位置づけられる遺構や遺物が発見されたことは、今回の調査の中でも特筆すべき成果である。遺構としては、掘立柱建物跡が1棟が確認されたほか、土坑などからも当該期の遺物が出土している。出土の中心となっているのが、性格が不明な遺構である。いずれも調査区の端部であることなどから、全容が不明なため、遺構の性格が判明しないものである。これらS X01とS X02からはかわらけ片をはじめ、渥美や常滑産の国産陶器や貿易陶磁器である白磁碗や水注が出土している。国産陶器は、大甕や片口鉢などの日常の器のほかに、常滑三筋文壺の破片や渥美壺などがある。また、白磁の壺類や碗なども出土することから、高級品を所有できる階層の

ものが付近に存在したと推定される。また、S X02は調査した長さがわずか2mほどのため、実態は不明と言わざるを得ないが、断面形が逆台形を呈することや規模の点から、箱堀状の堀ないし大溝とも想定できる。この遺構が西側に向かって、延長する余地が高いこととも考えると、堀である可能性は高いと思われる。12世紀に位置づけられる堀には、柳之御所遺跡など平泉中枢の有力者の居館ないし施設と想定され場合が多く、仮にこの遺構が堀であると、こうした施設である可能性も指摘できるのである。また、この遺構が長大であるならば、その方向は南北に延びる自然堤防を東西に横断する方向でもある。ある範囲を囲うものなのか切断するものは不明であるが、今後の調査の進展を待つほかはない。いずれにせよ、古城・白山地区では、この時期の遺跡が次々に見つかっており、平泉文化の広がりを考える上では重要な地域といえる。

これら12世紀につづく時期の明確な遺構はなく、わずかに遺物が数点出土するのみである。14世紀頃の特徴をもつ白磁碗や16世紀～17世紀にかけての瀬戸・美濃産陶器などの存在から、これらの時期も若干の利用はあったと考えられるが、今のところあまり明確ではない。

江戸時代の遺構には建物跡や井戸などがある。柱穴からこの時期の陶磁器が出土するなど建物も存在する。石組みの井戸跡もこの時期に所属すると考えている。江戸時代になると再び集落として、この遺跡が利用されるようになる。

今回の調査では、縄文時代から江戸時代にかけての遺構が存在することが判明した。これらの各時期の遺構は、多くは東側に集中している。とくに斜面の利用は東側の調査範囲が大きいこともあるが、よく利用されていることがわかっている。遺跡の東にはすぐに明後沢川があり、それと強い関連が指摘できよう。

このように、判明する事実は多いものの、調査の性格上、各時期の詳細な内容までは明らかにすることができなかつた。この点については、今後の面的な調査が待たれる。

2 出 土 遺 物

合計35kgの遺物が出土している。縄文～弥生時代の土器や土師器・須恵器が大半を占める。今回の調査で特筆すべき遺物としては、12世紀の年代が付与されるかわらけ、国産陶器、貿易陶磁（白磁・陶器）である。国産陶器は渥美・常滑・須恵器系陶器あわせて46片（3.2kg）、かわらけ1.2kg、貿易陶磁6片（白磁4片・陶器2片／92g）である。この点数は平泉町の拠点地区の出土数と比べれば決して多くはないが、近年周辺で発見される当該時期の遺跡と比べればはるかに多い。出土した遺構も少なく、調査範囲も少ないこともあわせれば、突出した出土数になるかもしれない。

遺構と同様に遺物についても、まだ不明の点が多いが、その内容の一端でも明らかにすることができた点では貴重な成果といえよう。

3 ま と め

以上、各時代のおもな成果について遺構、遺物にわけてふれてきた。遺構では、平安時代が主体であり、とくに12世紀の遺構の存在が注目すべき点である。

今回の調査では、範囲が狭いこともあり、遺構全体を詳細に調査することが少なく、内容の一端が明らかになったに過ぎない。しかし、これまで触れたように、遺跡の各時代での利用状況や、立地状況など明らかになった点も多い。残された課題については周辺遺跡の検討や今後の調査に期待したい。

觀 察 表

第3表 遺構別遺物出土量

遺構名	縄文・弥生	石器	土師器	須恵器	かわらけ	国産陶器	貿易陶磁	近世陶磁	金属製品	木製品	その他
S K01	57.88		15.81								
S K02	6.88										
S K03	125.57	45.52	52.71						1.22		
S K05	7.1										
S K07									2.6		
S K08	10.32	5.71									
S K09			7.6							粘土塊 7.26	
S K10										粘土塊 19.65	
S K11				74.38	11.62	常滑	21.62	36.15			
S K13	43.76										
S K14	14.24										
S K(不明)	0.67									粘土塊 4.32	
S I 01	17.47	58.71	8214.64	1102.19					6.82	カマド壁 731.21	
S D 01	11.15	1.29	6.37	7.03		常滑	67.30		7.32		
S D 02	4.5	1.47		5.88					0.84		
S D 03		35.68	8.91						1.01	3.2	
S D 06	65.39	13.5				常滑	29.08			粘土塊 3.97	
S D 07	0.84	116.13									
S D 08	129.57	353.56		2.5							
S D 09	7.46	21.6									
S D 11									2.51	17.77	
S D 13									48.77		
S D 14	19.42	58.7	284.46	46.25		渥美	62.43	17.62			
S D 15	1.42		38.33						4.53		
S X 01	81.61	209.69	366.01	252.84	539.23	渥美	562.34	15.88	229.15	羽口 370.34 土壁? 1209.13	
S X 02	121.23	16.15	347.13	9.8	473.74	常滑	531.81				
						渥美	913.14				
						須恵	168.92	22.41	2.2	61.84	輪 粘土塊 611.66
						系	353.45				
S E 01		81.31		20.97					38	輪	
柱穴不明	1.94										
S B01(P 002)					常滑	31.77					
S B01(P 004)			3.51								
P 006			0.66								
P 007									62.31		
S B01(P 008)		15.7									
S B02(P 014)			4.46								
S B07(P 025)	5.8										
P 033	2.46	5.4	4.16								
S B04(P 039)			20.03								
P 041		2.28	12.85							粘土塊 9.05	
S B06(P 050)								7.05			

遺構名	縄文・弥生	石器	土師器	須恵器	かわらけ	国産陶器	貿易陶磁	近世陶磁	金属製品	木製品	その他
P 078				4.4							
P 150				5.35							
P 156		0.81		1.04							
P 163				1.15							
P 175								19.28			
P 177			3.56								
S B05(P215)				2.06							
S B12(P238)	19										
A区	188.72	39.26		13.02			490.79				粘土塊 15.45
B区	79.85										
B-C区			71.66								
C区	287.47	122.7	226.77			常滑 94.82			23.87		
D区			12.34								
D区	16.79	11.83	21.31	72.98		渥美 146.58		32.24	1.23		
E区	9428.64	673.25	1019.91	621.67	133.82	須恵 39.13 常滑 23.21					粘土塊 96.15
表土			0.67								
不明	19.17	38.77	84.41	5.85	51.64	常滑 131.92		21.13	106.02		
不明		1.23									
T 4		7.22	381.22			常滑 37.75					
T 6		53.11	46.62	55.03							
T 9			1.57				0.66				
合計	10774.15	1987.07	11231.54	2331.69	1212.55	3190.51	92.06	652.52	539.84		3045.69

第4表 土師器類観察表

両載No.	登録No.	種 別	器種	残存率	出土遺構	層 位	D径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調 整	色 調	備考
1	12	土師器	杯	25	S 101	Q 2	(12.0)	2.8	5.2	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	明黄褐 10YR7/6	
2	3	土師器	杯	100	S 101	取り上げ⑩	13.0	3.1	5.1	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	にぶい橙 7.5YR7/4	
3	1	土師器	杯	80	S 101	取り上げ⑩	12.1	3.3	5.9	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	にぶい黄褐色 10YR7/3	
4	2	土師器	杯	40	S 101	取り上げ⑩ カマド内一括	(16.4)	6.9	7.8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ／黒色処理 底面：糸切り→ナデ？	浅黄褐 10YR8/3	
5	8	土師器	杯	30	E区	III a 層	(13.6)	4	7.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	浅黄褐 10YR8/3	
6	9	土師器	杯	60	E区	III a 層	(14.2)	4.8	6.4	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	にぶい黄褐 10YR7/3	
7	7	土師器	杯	60	E区	III a 層	(13.4)	5.15	7.0	外面：ロクロナデ→ケズリ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	浅黄褐 7.5YR8/4	
8	6	土師器	杯	40	E区	III a 層	(13.2)	4.3	(6.6)	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：ヘラケズリ	橙 5YR7/6	
9	5	土師器	杯	60	E区	III a 層	(13.0)	4	6	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	橙 7.5YR7/6	
10	4	土師器	杯	80	E区	III a 層	(12.2)	4.05	6.4	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	橙 7.5YR7/6	
11	14	土師器	高台盤	—	E区	III a 層	(10.5)	(4.8)	(5.4)	外面：マメツ(ロクロナデ) 内面：マメツ(黒色処理か)	外面：淡黄 2.5YR8/3 内面：灰 5Y4/1	
12	15	土師器	高台杯	—	S X01	埋土上層	—	(3.9)	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	浅黄褐 7.5YR8/3	
13	10	鉢形土器か	不明	—	S X02	埋土一括	—	(2.2)	—	外面：ミガキ(底中心に向か う)/黒色処理 内面：マメツ/黒色処理	暗灰 N 3/	
14	27	土師器	甕	40	S 101	カマド内一括 取り上げ⑩、カマドQ 4 Q 4 埋土上層、埋土上層、 貼付内	(23.0)	27.4	10.0	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：ヨコナデ→ヘラナデ 底面：マメツ	浅黄褐 10YR8/4	
15	28	土師器	甕	70	S 101	カマド周辺 Q 4 埋土上層 取り上げ⑩④ カマド	14.2	(17.2)	(8.2)	外面：ヘラナデ 内面：ヘラナデ	にぶい赤褐 5YR5/4	
16	29	土師器	甕	10	S 101	カマド	(20.2)	(10.5)	—	外面：ヨコナデ→ケズリ (マメツ) 内面：ヨコナデ→ヘラナデ	浅黄褐 10YR8/3	
17	18	土師器	甕	15	S 101	取り上げ⑩	(21.8)	(16.6)	—	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ (マメツ) 内面：ヨコナデ→ヘラナデ	浅黄褐 7.5YR8/4	
18	20-21-19	須恵器	大甕	30	S 101	ペルト一括 貼り床、埋土上層 E区Ⅲ a 層	(20.6)	(7.7)	—	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	橙 5YR7/6	
25	43	須恵器	甕	—	S X02	埋土下層	(15.4)	—	(2.8)			
19	13	かわらけ(ロクロ)	小皿	40	S X01		(9.0)	2.25	5.7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底面：糸切り	浅黄褐 10YR8/3	
20	17	かわらけ(手づけね)	小皿	40	S X01		(8.2)	2.05	(4.2)	外面：ヨコナデ→ユビキサエ	灰白 10YR8/2	
21	16	かわらけ(手づけね)	小皿	40	S X01	埋土上層	(7.2)	(1.4)	(3.0)	外面：ヨコナデ→ユビキサエ	浅黄褐 10YR8/3	
22	11	かわらけ(手づけね)	大皿	35	S X01	埋土上層 (-20cmまで)	(15.0)	2.8	(8.0)	外面：ヨコナデ→ユビキサエ	灰白 10YR8/2	

第5表 陶磁器類観察表

No.	登録No. (保存者)	種別	器種	部位 (保存状態)	出土位置	層位	口様(cm)	底径(cm)	高さ(cm) (平均値)	特徴	産地	備考
23	34	白磁	碗	口縁部	S K11	埋土一括	(16.0)	—	(4.1)	—	中国	大寧府V2a層
24	35	白磁	壺類	胴部	S K11	埋土一括	—	—	(4.8)	器壁が薄く水注か	中国	大寧府Ⅱ層
25	32	白磁	碗	胴部	S X02	埋土下層	—	—	(1.4)	—	中国	大寧府Ⅲ層
26	33	白磁	壺類(水注)	口縁部	S X02	埋土一括	(8.6)	—	(2.8)	—	中国	大寧府Ⅳ層
27	78	陶器	壺類	胴部	S D14	埋土上層Ⅲ層	—	—	—	—	中国	大寧府Ⅳ層カ
28	75	陶器	壺類	胴部	S X01	埋土上層	—	—	—	—	中国	大寧府Ⅳ層カ
29	40	陶器	壺類	P002			(11.2)	—	(3.0)	—	—	—
30	37	陶器	鉢類(片口付)	底部	S D14	埋土上層Ⅲ層	—	(7.0)	(1.9)	—	—	—
31	72	陶器	壺類	胴部	D区南端	表土中	—	—	—	—	—	—
32	83	陶器	大甕	胴部	S X01	—	—	—	—	—	—	—
33	63	陶器	大甕	胴部	S X01	埋土上層	—	—	—	—	—	—
34	47	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	—
35	84	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土壤土中(埋土一括)	—	—	—	—	—	—
36	79	陶器	壺	胴部	S X01	埋土上層(~20cm)まで	—	—	—	—	—	常滑
37	56	陶器	壺	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
38	48	陶器	壺	胴部	P002	—	—	—	—	—	—	常滑
39	41	陶器	壺	口縁部	S X11	埋土一括	(13.9)	—	(2.7)	—	—	常滑
40	39	陶器	三筋文壺	胴部	S X02	埋土一括	—	—	(9.7)	—	—	常滑
41	38	陶器	三筋文壺	胴部	S X02	埋土一括	—	—	(8.0)	—	—	常滑
42	42	陶器	壺	口縁部	T 4	—	—	—	(1.9)	—	—	常滑
43	51	陶器	壺	胴部	S D01	—	—	—	—	—	—	常滑
44	52	陶器	大甕	胴部	S D01	—	—	—	—	—	—	常滑
45	77	陶器	大甕	頭部	S D06北側	埋土上層	—	—	—	—	—	常滑
46	74	陶器	大甕	胴部	S X01	横出面	—	—	—	—	—	常滑
47	53	陶器	大甕	胴部	S X01	サブトレーリー括	—	—	—	—	—	常滑
48	69	陶器	壺	胴部	S X01	埋土中層(~40cm以下)	—	—	—	—	—	常滑
49	64	陶器	壺	胴部	S X01	埋土上層	—	—	—	—	—	常滑
50	65	陶器	大甕	胴部	S X01	埋土上層	—	—	—	—	—	常滑
51	70	陶器	大甕	胴部	S X01	埋土中層(~40cm以下)	—	—	—	—	—	常滑
52	55	陶器	壺	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
53	60	陶器	壺	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
54	45	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
55	57	陶器	壺	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
56	82	陶器	壺	胴部	S X02	埋土壤土中(埋土一括)	—	—	—	—	—	常滑
57	50	陶器	壺	胴部	S X02	埋土下層	—	—	—	—	—	常滑
58	66	陶器	大甕	胴部	不明	—	—	—	—	—	—	常滑
59	44	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
60	76	陶器	大甕	胴部	E区	黑色土の前後の層	—	—	—	—	—	常滑
61	62	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
62	68	陶器	大甕	胴部	不明	—	—	—	—	—	—	常滑
63	49	陶器	壺	胴部	T 4	—	—	—	—	—	—	常滑
64	67	陶器	大甕	胴部	不明	—	—	—	—	—	—	常滑
65	46	陶器	大甕	胴部	不明	—	—	—	—	—	—	常滑
66	73	陶器	大甕	胴部	不明	—	—	—	—	—	—	常滑
67	80	陶器	壺	胴部	E区	Ⅲ~Ⅳ層	—	—	—	—	—	常滑
68	71	陶器	壺	胴部	C区	下段Ⅳ層(黒色土の上)	—	—	—	—	—	常滑
69	58	陶器	壺類	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	常滑
70	61	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—	—	—	領憲器系
71	36	陶器	片口鉢	底部	S X01	—	(13.0)	(3.5)	—	—	—	常滑
72	81	陶器	大甕	胴部	E区斜面	Q 3(北側)Ⅳ層	—	—	—	—	—	領憲器系

No.	登録No. (発見位置)	種別	器種	部位 (発見位置)	出土位置	層位	口様(cm)	底様(cm)	器高(cm) (内側外側)	特徴	産地	備考
73	54	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—		須恵器系	
74	59	陶器	大甕	胴部	S X02	埋土一括	—	—	—		須恵器系	
76	25	磁器	碗	口縁部	P050		(10.2)	—	(3.4)	染付 18後～19世紀	肥前	
77	23	陶器	碗	口縁部	D区	検出面	(13.0)	—	(2.9)	白濁した釉、16世紀末 鍋川美濃(志野)		
78	24	白磁	碗	胴部	不明		—	—	(3.3)	見込みに捺刻文、 中国	森田分類B群か	
79	22	陶器	円錐	底部	S E01	埋土一括	—	—	—	19世紀頃±	不明	

第6表 繩文・弥生土器観察表

揭露No.	登録No.	種別	器種	部位	出土位置	層位	文様・特徴など			備考	
80	112	弥生土器	甕?	頭部	不明		肩部に変形工字文±				
81	133	弥生土器		口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に沈縫(直縫状)が2～3本				
82	127	弥生土器		口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に沈縫(直縫状)が2～3本				
83	126	弥生土器	甕	口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に沈縫(直縫状)が2～3本				
84	128	弥生土器	高杯	口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に変形工字文				
85	130	弥生土器	高杯	口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に沈縫(直縫状)が2～3本				
86	132	弥生土器	高杯	口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に沈縫(直縫状)が2～3本				
87	131	弥生土器	甕	口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に沈縫(直縫状)が2～3本				
88	129	弥生土器		口縁部	E区斜面	III～IV層	口縁部に沈縫(直縫状)が2～3本				
89	141	弥生土器	鉢	口縁部	E区斜面	III～IV層	頭部に変形工字文				
90	146	弥生土器	高杯	口縁部	E区斜面	III～IV層	頭部に変形工字文				
91	148	弥生土器	高杯±	口縁部	E区斜面	III～IV層	頭部に変形工字文				
92	122	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
93	117	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
94	125	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫(変形工字文±)				
95	123	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫(変形工字文±)				
96	116	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
97	119	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫(変形工字文±)				
98	114	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
99	121	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫(山形文)				
100	120	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
101	124	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
102	142	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部に弧状文(変形工字文)				
103	118	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
104	115	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部～胴部に弧状の沈縫				
105	144	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部に弧状文(変形工字文)				
106	149	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部に弧状文(変形工字文)				
107	145	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	頭部に弧状文(変形工字文)				
108	143	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	頭部に弧状文(変形工字文)				
109	147	弥生土器		頭部	E区斜面	III～IV層	頭部に弧状文(変形工字文)				
110	136	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に方形区溝、弧状に沈縫				
111	135	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に変形山形文				
112	137	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に変形山形文				
113	111	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に変形山形文				
114	138	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に変形山形文				
115	134	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に変形山形文				
116	140	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に波状文				
117	110	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に波状文				
118	139	弥生土器	高杯	頭部	E区斜面	III～IV層	脚部に変形山形文				
119	113	純文土器	深鉢	頭部	A区6グリッド		大木4～5式±				

第7表 石器・石製品観察表

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴	石質・産地・時代	備考
120	85	石鏟	S I 01	Q 3 埋土	2.4	1.35	0.35	0.62	頁岩		
121	86	石鏟	S X01	検出面	2.1	1	0.5	0.67	珪質頁岩		
122	87	石鏟	S X01		(3.3)	1.6	0.45	1.42	珪質頁岩		
123	89	石鏟	E IX斜面	Q 3(北側)N層	(2.2)	1.0	0.35	0.54	頁岩		
124	90	石鏟	E IX斜面	Q 3(北側)N層	(2.05)	1.25	0.6	0.79	黒曜石		
125	88	石鏟	E IX斜面	Ⅲ層	(2.3)	(1.1)	0.6	1.63	珪質頁岩		
126	93	石鏟	S D14	埋土上層Ⅲ層	(2.7)	2.4	0.9	4.64	頁岩		
127	91	石鏟	E IX斜面	Ⅲ層	(3.5)	2.25	0.8	3.84	頁岩		
128	92	石鏟	E IX斜面北側	Ⅲ～(N)層	(2.8)	3.3	1.1	7.29	頁岩 上北山地 古～中生代		
129	97	石匙?	S D06北側	埋土上層	6.35	(2.8)	0.6	13.5	頁岩		
130	94	石匙	A IX 1グリッド	黒褐色層	(6.2)	2.0	0.6	5.9	頁岩		
131	96	石匙	不明		(7.3)	3.45	2.1	11.21	頁岩		
132	95	石匙	E IX	Ⅲ～N層	(6.4)	4.0	1	20.55	頁岩		
133	98	石匙	S D07	埋土上層	11.05	4.4	1.7	115.6	鈣岩 上北山地 古～中生代		
134	100	磨石	S D08	埋土上層	(7.3)	(7.9)	4.2	353.56	磨面あり 安山岩 奥羽山脈 新生代新第三紀		
135	99	磨石	S X01	サブトレ一括	(18.6)	(7.4)	(1.1)	194.72	磨面あり 頁岩 上北山地 古～中生代		

第8表 土製品観察表

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
136	101	羽口片	S X01	サブトレ一括				(11.3)	(8.3)	2.9	337.84

第9表 金属製品観察表

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
137	106	刀子	S X01	一括	(10.9)	3.15	1.6	48.2	
138	102	刀子	S X01	一括	(15.7)	2.9	1.6	67.75	
139	108	鉄釘*	S X01	サブトレ一括	15.45	1.15	0.75	32.7	
140	105	鉄釘	不明	一括	7.2	2.2	1.1	17.4	
141	107	鉄釘*	S X01	サブトレ一括	(5.5)	1.65	1.2	8.7	
142	103	刀子	S X01	一括	(4.1)	1.35	0.45	5.22	
143	104	刀子	D IX P 175	一括	(10.6)	2.1	(横幅)0.4	19.28	

第10表 漆器観察表

掲載No.	登録No.	器種	出土地点	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	特徴	その他の
144	30	漆器椀	S E01	上層	(12.3)	(6.2)	(6.8)	外面：朱漆(剥落が激しい) 内面：朱漆	
145	31	漆器椀	S D16	埋土下層	(15.0)	6.4	(6.4)	外面：黒漆 内面：黒漆	

第11表 柱穴観察表

*()は残存長

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	その他
P001	30	26	58.5	26.685	S B01
P002	42	35	47	26.790	S B01
P003	30	28	36.5	26.875	
P004	34	30	29	26.870	S B01
P005	30	(20)	45	26.720	S B01
P006	28	24	33	26.820	
P007	20	16	19	26.970	
P008	28	27	68	26.580	S B01
P009	(25)	22	24.5	27.005	
P010	21	19	33	26.850	S B01
P011	32	28	50	26.760	S B01
P012	36	29	59	26.590	S B01
P013	30	28	47	26.785	S B02
P014	40	38	42	26.730	S B02
P015	35	30	46	26.670	S B07
P016	26	24	10	27.025	
P017	18	18	11	27.070	
P018	19	16	12	27.060	
P019	16	14	7	27.080	S B04
P020	40	38	31.5	26.775	
P021	16	(15)	11.5	26.990	
P022	22	(13)	26	26.875	
P023	22	(16)	25	26.885	S B04
P024	39	36	43	26.660	S B07
P025	28	24	20.5	26.895	
P026	18	17	9	27.030	
P027	15	14	7.5	27.020	S B03
P028	54	52	34	26.750	
P029	20	19	17	26.940	
P030	20	18	13	26.980	S B07
P031	16	14	11.5	27.025	
P032	24	20	13	27.070	
P033	38	28	20	27.000	

遺 構 名	長 径(cm)	短 径(cm)	深 さ(cm)	底面標高(cm)	そ の 他
P034	50	46	34	26.810	S B05
P035	32	(27)	36	26.800	S B06
P036	42	30	24	26.920	S B05
P037	21	16	24	26.930	
P038	16	(12)	8	27.080	
P039	46	36	55	26.620	S B04
P040	42	41	26	26.910	
P041	72	64	69	26.480	
P042	(38)	36	24.5	26.940	S B05
P043	24	18	13	27.050	
P044	32	32	12	27.030	
P045	25	24	18.5	26.975	S B05
P046	22	18	18.5	26.975	S B06
P047	40	33	39	26.770	S B06
P048	39	34	30.5	26.855	
P049	38	32	52	26.610	S B04
P050	37	32	47	26.710	S B06
P051	30	(20)	34	26.870	S B07
P052	47	40	45	26.770	S B03
P053	22	20	12	27.135	
P054	48	46	34	26.830	S B03
P055	32	(20)	37	26.800	
P056	27	24	14	27.000	S B05
P057	(40)	35	18	26.980	S B05
P058	15	15	53.5	26.655	
P059	(52)	50	53.5	26.655	S B03
P060	34	30	39.5	26.765	
P061	22	19	9	27.130	
P062	22	20	13	27.050	
P063	24	22	15	27.050	
P064	28	26	19	26.980	
P065	20	20	11	27.080	
P066	26	24	19	27.025	
P067	35	32	41	26.270	

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	その他
P068	28	25	22	27.065	
P069	31	28	20	27.050	
P070	28	28	42	26.880	
P071	30	24	34	26.950	
P072	25	20	20	27.070	
P073	20	18	7	26.450	
P074	24	21	13	26.560	
P075	26	24	20	27.080	
P076	27	23	13	26.330	
P077	26	24	19.5	26.495	
P078	48	33	11	26.240	
P079	31	26	6	26.460	
P080	23	22	8.5	26.595	
P081	35	32	20	26.350	
P082	23	23	15	25.140	
P083	26	19	14	24.945	
P084	32	30	35.5	26.275	
P085	20	17	13	26.370	
P086	20	20	8.5	26.315	
P087	29	28	21	26.110	
P088	22	18	16.5	24.935	
P089	26	25	16.5	26.455	
P090	28	21	21	26.400	
P091	33	27	31	26.380	
P092	26	23	19	25.090	
P093	35	(20)	5.8	26.718	
P094	34	28	42	25.980	S B08
P095	25	(12)	15	26.300	
P096	34	25	29	26.160	S B08
P097	33	30	15	26.420	S B08
P098	25	(14)	24	26.380	
P099	26	25	10.5	26.525	
P100	26	24	31	26.220	
P101	24	22	14	26.410	

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	その他
P 102	20	18	17	26.370	
P 103	34	28	20	26.550	
P 104	30	19	11	26.400	
P 105	24	(18)	10	26.410	
P 106	28	26	33	26.130	S B 08
P 107	25	20	23	26.280	
P 108	(22)	20	16	26.330	
P 109	30	26	12	26.330	S B 08
P 110	45	41	54	25.990	S B 08
P 111	36	30	40	26.070	S B 08
P 112	28	25	9.5	26.545	
P 113	18	16	11	26.440	
P 114	22	17	7	26.480	
P 115	39	34	28	26.230	
P 116	29	27	10.5	26.565	
P 117	16	13	5	26.610	
P 118	35	30	19.5	26.425	
P 119	20	20	10	26.490	S B 10
P 120	25	22	9.5	26.535	
P 121	57	42	42	24.780	S B 08
P 122	35	32	21	26.340	S B 08
P 123	32	25	8.5	26.515	
P 124	20	18	9.5	25.115	S B 10
P 125	25	22	26.5	26.335	
P 126	25	23	14	26.460	
P 127	32	30	25	25.260	
P 128	25	18	21	25.120	S B 10
P 129	27	24	29	26.320	
P 130	25	22	30	26.370	S B 10
P 131	38	32	48	26.160	
P 132	28	24	34	26.270	
P 133	23	22	35.5	26.225	
P 134	31	28	21	26.480	S B 10
P 135	32	30	24	24.980	

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	その他
P 136	30	29	28	26.320	
P 137	22	20	22.5	26.445	S B10
P 138	20	20	12	26.500	
P 139	25	22	31	26.210	
P 140	32	23	11	24.690	
P 141	53	48	67	26.070	
P 142	31	27	11	24.770	
P 143	22	21	18	26.245	
P 144	28	27	31	26.360	
P 145	24	24	16	26.480	
P 146	24	(10)	20	26.580	S B10
P 147	24	(10)	18	26.630	S B10
P 148	38	29	21	25.900	
P 149	33	29	26	26.150	
P 150	32	30	36	26.060	
P 151	28	23	23	26.220	
P 152	29	24	16	26.300	
P 153	22	22	17.5	26.285	
P 154	19	16	19	26.240	
P 155	31	28	13	26.310	
P 156	32	23	13	26.350	
P 157	21	16	11.5	26.275	
P 158	43	41	53	25.900	
P 159	28	24	19	26.390	
P 160	19	16	10	26.465	
P 161	20	21	16.5	26.165	
P 162	30	28	19	26.250	
P 163	25	20	10	26.220	
P 164	22	20	23.5	26.195	
P 165	24	22	22	26.260	
P 166	19	(10)	18	26.260	
P 167	26	25	16	26.260	
P 168	26	21	22	26.280	
P 169	27	22	17	26.310	

遺構名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	その他
P 170	33	31	35	26.180	
P 171	26	22	7.5	26.395	
P 172	31	30	16.5	26.435	
P 173	30	23	15	26.430	
P 174	31	22	13.5	26.295	
P 175	33	30	56.5	26.105	
P 176	20	18	16	26.230	
P 177	44	32	30.5	26.090	
P 178	22	21	14	26.470	
P 179	33	30	20.5	26.275	
P 180	32	(26)	8	26.331	
P 181	33	28	16	25.960	
P 182	28	22	16	25.930	
P 183	30	28	29.5	25.995	
P 184	25	20	26	26.140	
P 185	33	27	13	26.310	
P 186	35	32	41	26.150	
P 187	33	30	31	25.970	
P 188	30	25	20	26.120	
P 189	18	16	13	26.080	
P 190	21	20	14	26.080	
P 191	45	38	6.5	26.225	
P 192	26	24	17.5	25.955	
P 193	18	16	7.5	25.965	
P 194	18	14	15.5	25.905	
P 195	20	18	11	26.120	
P 196	24	22	12	26.100	
P 197	24	(22)	52	26.750	S B02
P 198	35	32	37	26.820	S B07
P 199	47	37	45	26.700	S B03
P 200	22	20	12	27.010	
P 201	26	24	12	27.015	
P 202	40	36	39	26.760	S B04
P 203	18	16	7	27.060	

造 構 名	長 径(cm)	短 径(cm)	深 さ(cm)	底面標高(cm)	そ の 他
P 204	20	17	7	27.080	
P 205	25	22	7	27.100	
P 206	20	17	8	27.085	
P 207	38	(20)	5	27.170	
P 208	20	16	6	27.160	
P 209	18	16	16	27.000	
P 210	24	20	16	27.010	S B 06
P 211	43	42	45	26.690	S B 04
P 212	28	22	15	27.000	
P 213	27	23	17	26.960	
P 214	28	26	13	26.990	
P 215	26	24	29	26.830	S B 05
P 216	36	30	20.5	26.945	S B 04
P 217	30	28	15	26.770	
P 218	24	22	20	26.880	
P 219	23	19	10.5	27.235	
P 220	16	14	22	27.140	
P 221	21	18	19	27.200	
P 222	16	14	11	27.270	
P 223	22	20	26.5	27.110	
P 224	26	20	20.5	27.155	
P 225	22	21	20	27.060	
P 226	39	38	12	27.160	
P 227	22	20	24	27.140	
P 228	14	13	15	27.220	
P 229	20	18	65	26.380	
P 230	28	24	13	26.540	
P 231	28	26	35	27.110	
P 232	16	15	8	26.170	
P 233	20	15	8	26.160	
P 234	42	34	34	27.032	
P 235	33	27	9	25.200	
P 236	30	29	32	26.133	
P 237	32	30	40	25.250	S B 12

遺 構 名	長 径(cm)	短 径(cm)	深 さ(cm)	底面標高(cm)	そ の 他
P 238	38	30	32	25.460	S B12
P 239	45	36	49	25.660	S B12
P 240	30	28	12	25.900	S B12
P 241	36	32	10	25.600	S B12
P 242	32	29	14	25.220	S B12
P 243	32	(16)	30	25.130	S B12
P 244	32	(30)	34	25.310	S B12
P 245	18	15	53	25.108	
P 246	18	16	10	25.584	
P 247	60	54	31	25.690	S B11
P 248	55	46	14	26.150	S B11
P 249	43	37	15	26.130	S B11
P 250	43	38	40	25.870	S B11
P 251	41	33	29	25.940	S B11
P 252	49	44	18	25.720	S B11
P 253	35	34	21	24.850	
P 254	27	22	44	25.425	
P 255	33	(25)	22	24.869	
P 256	33	29	48	24.623	
P 257	55	50	54	24.793	
P 258	15	14	16	25.916	
P 259	55	(37)	22	25.640	S B11
P 260	44	40	20	25.680	
P 261	50	(44)	24	25.640	
P 262	20	15	13	24.883	
P 263	22	20	16	24.580	
P 264	29	24	25.5	24.555	
P 265	24	24	22	24.763	
P 266	31	24	41	24.865	
P 267	25	24	5	26.090	S B11
P 268	54	42	21.5	25.950	
P 269	22	20	4.5	26.323	
P 270	24	22	28	25.700	
P 271	67	60	46	24.830	
P 272	67	48	57	24.973	

写 真 図 版



1 遺跡遠景写真（北から）



2 遺跡近景写真1（南から）



1 遺跡近景写真 2 (西から)



2 遺跡近景写真 3 (北東から)

写真図版 2 遺構



調査区全景（直上）

写真図版 3 遺構



B・C・D 調査区主要部拡大

写真図版 4 遺構



1 調査前の状況 1



2 調査前の状況 2



1 基本土層（B区）



2 基本土層（E区）



1 A区全景（北から）

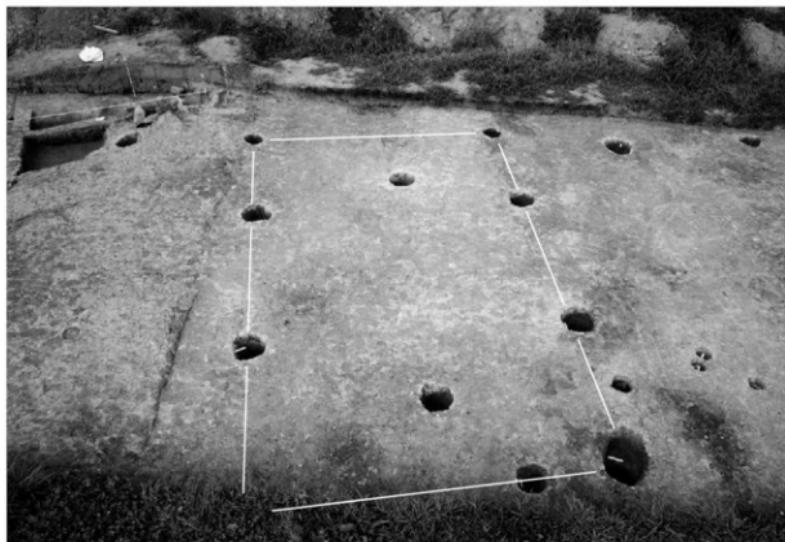


2 D区全景（南から）

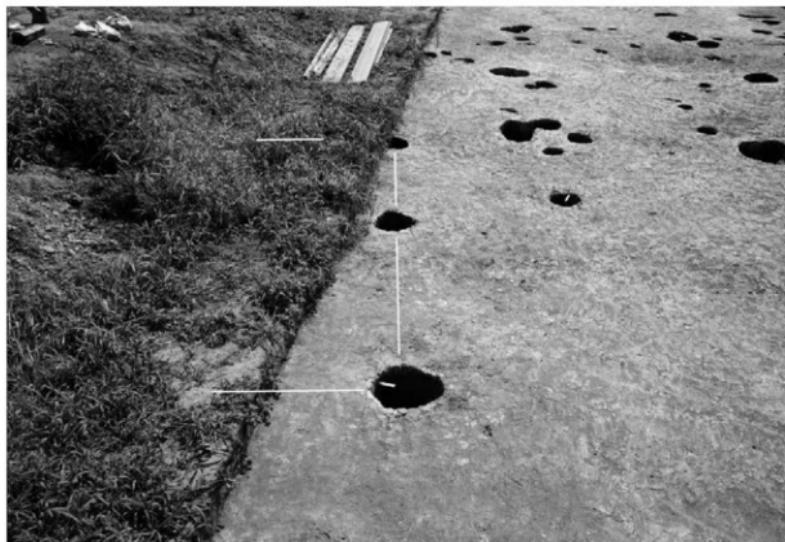


E区全景（南から）

写真図版 8 遺構



1 SB01



2 SB02



1 SB03



2 SB04



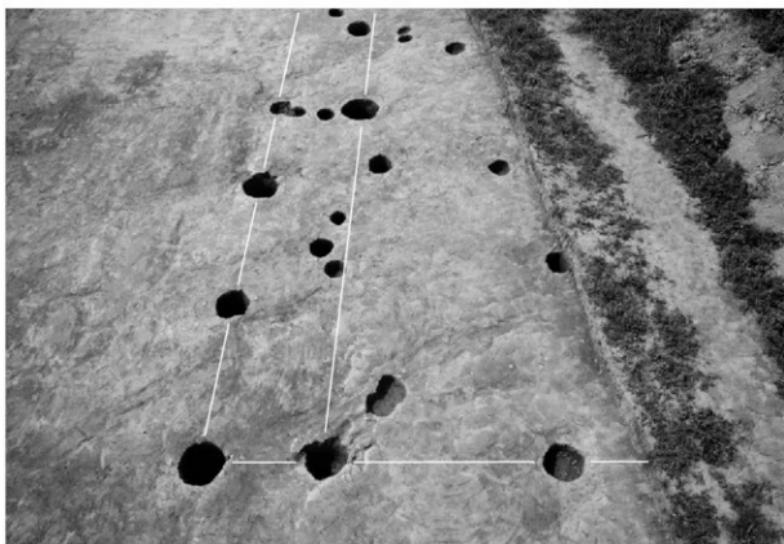
1 SB05



2 SB06



1 SB07



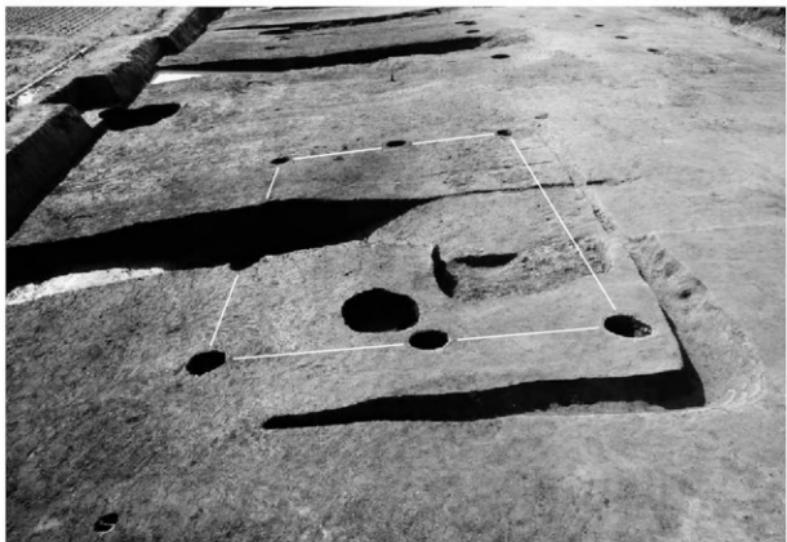
2 SB08 (部分)



1 SB10



2 SB11



1 SB12



2 作業風景

写真図版 14 遺構



1 SI 01検出状況



2 SI 01発掘状況



1 S I 01断面1



2 S I 01断面2

写真図版 16 遺構



1 S I 01カマド



2 S I 01カマド断面

写真図版 17 遺構



1 S I 01掘り方断面

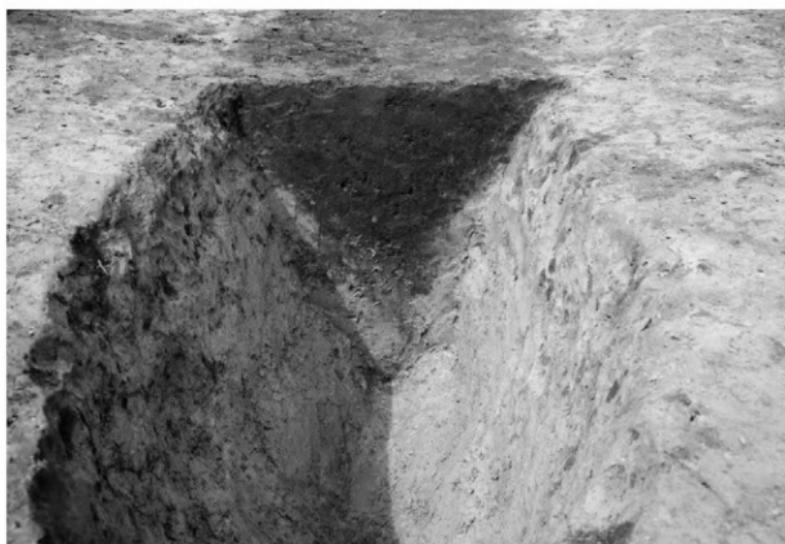


2 S I 01カマド掘り方

写真図版 18 遺構



1 SK01



2 SK01断面



1 SK02



2 SK02断面

写真図版 20 遺構



1 SK04



2 SK04断面



1 SK05



2 SK05断面

写真図版 22 遺構



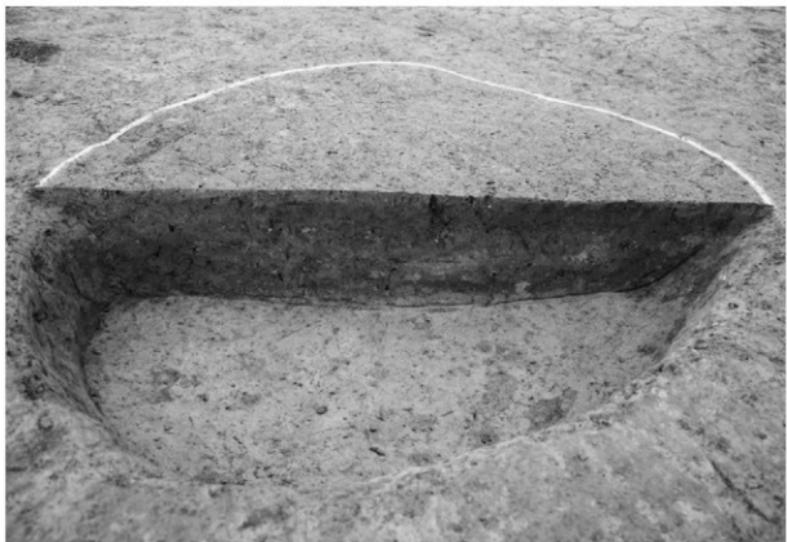
1 SK 06



2 SK 06断面



1 SK07

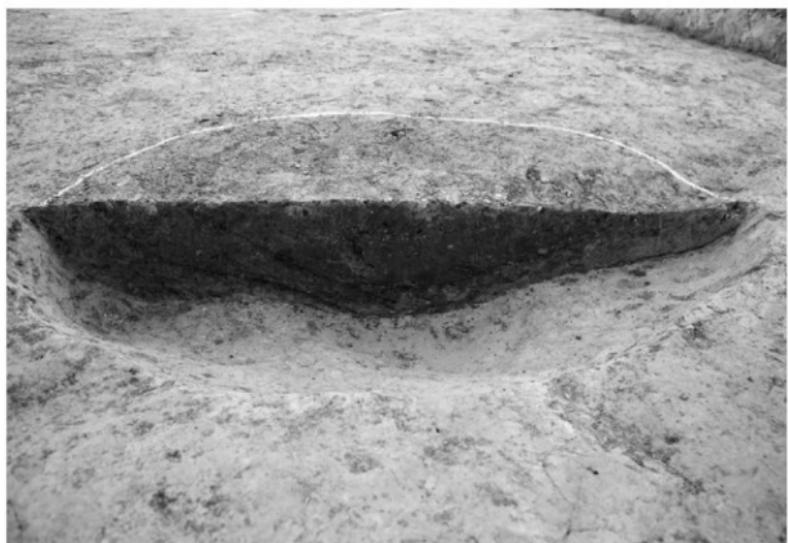


2 SK07断面

写真図版 24 遺構



1 SK08



2 SK08断面

写真図版 25 遺構



1 SK09



2 SK09断面

写真図版 26 遺構



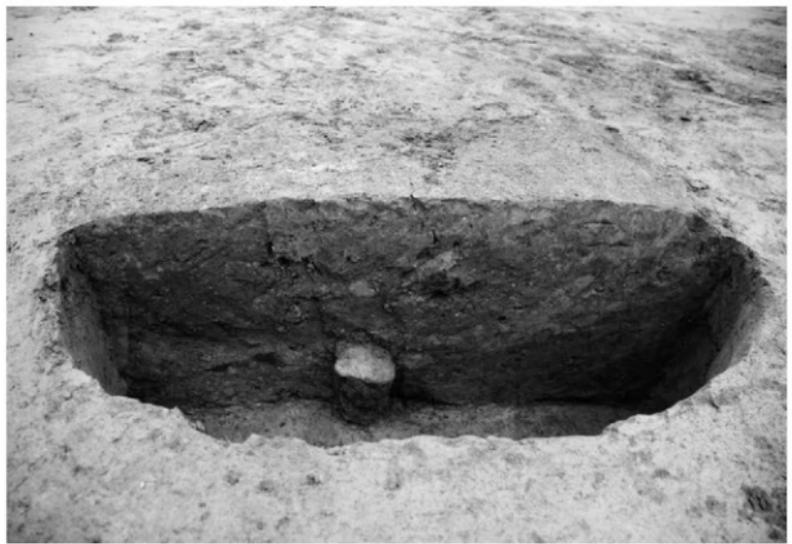
1 SK 10



2 SK 10断面



1 SK11



2 SK11断面

写真図版 28 遺構



1 SK12



2 SK12断面



1 SK13

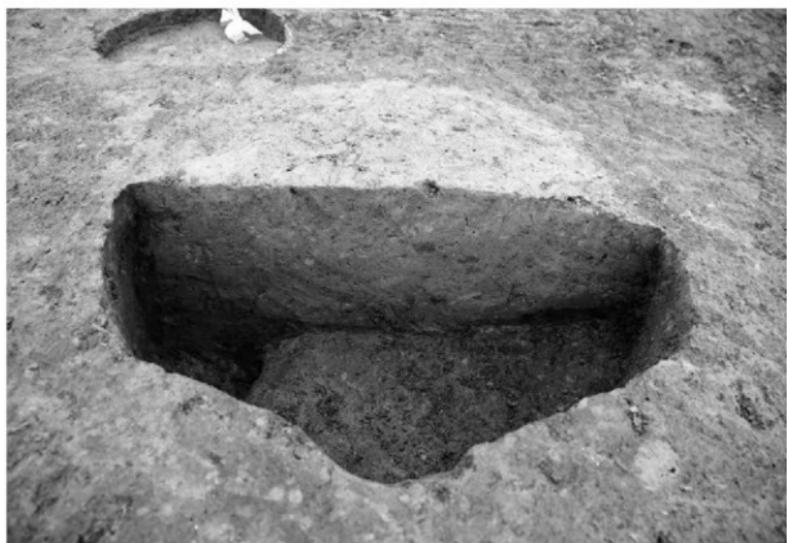


2 SK13断面

写真図版 30 遺構



1 SK14



2 SK14断面



1 S E01

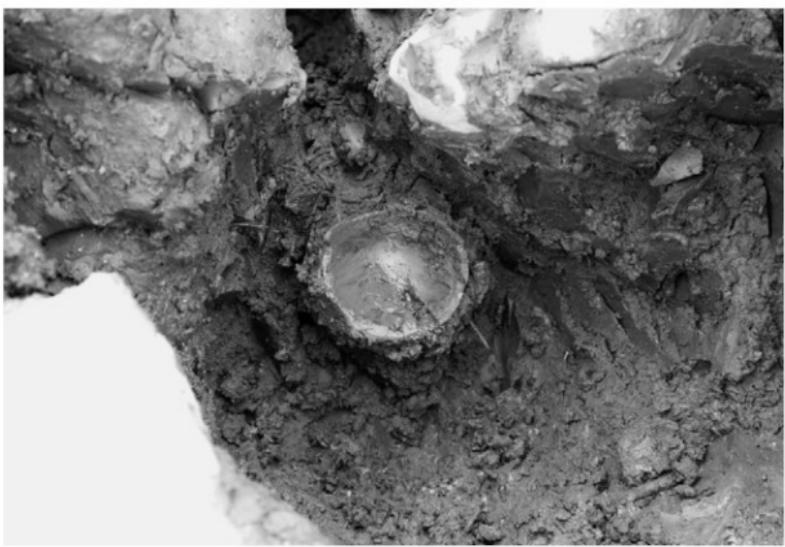


2 S E01断面

写真図版 32 遺構



1 SE 01 完掘



2 SE 01 漢物出土状況



1 S D 01 • 02 • 03



2 S D 04

写真図版 34 遺構



1 SD 05



2 SD 06・07



S D 06

写真図版 36 遺構



1 SD09



2 SD17



1 SD10



2 SD14A・B

写真図版 38 遺構



1 SD15



2 SD15断面



1 SX01 (東から)



2 SX01 (南西から)

写真図版 40 遺構



1 SX01断面1



2 SX01断面2

写真図版 41 遺構

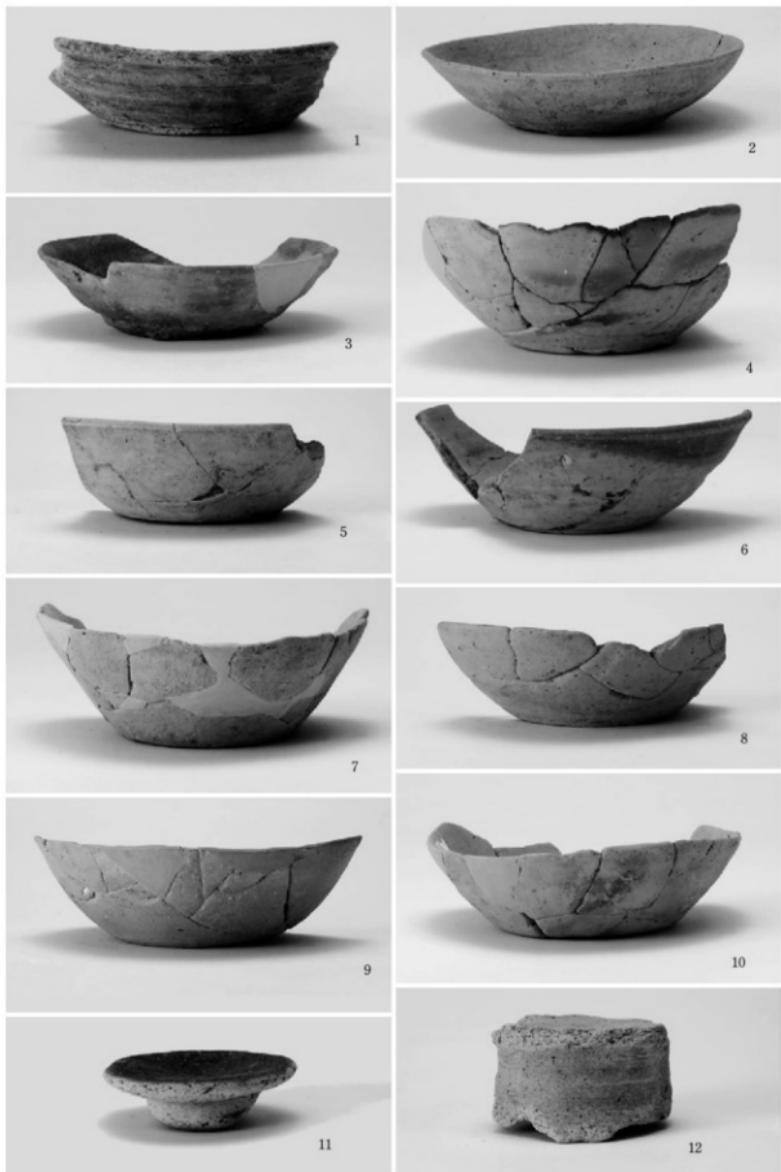


1 SX02



2 SX02断面

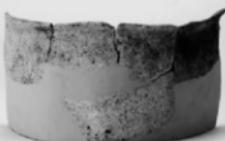
写真図版 42 遺構



写真図版 43 遺物 土器類 1



13



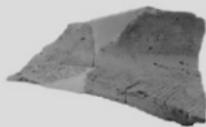
16



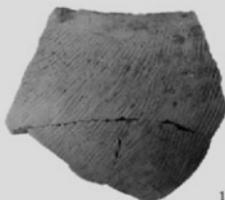
17



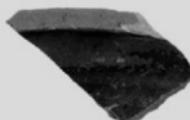
14



15

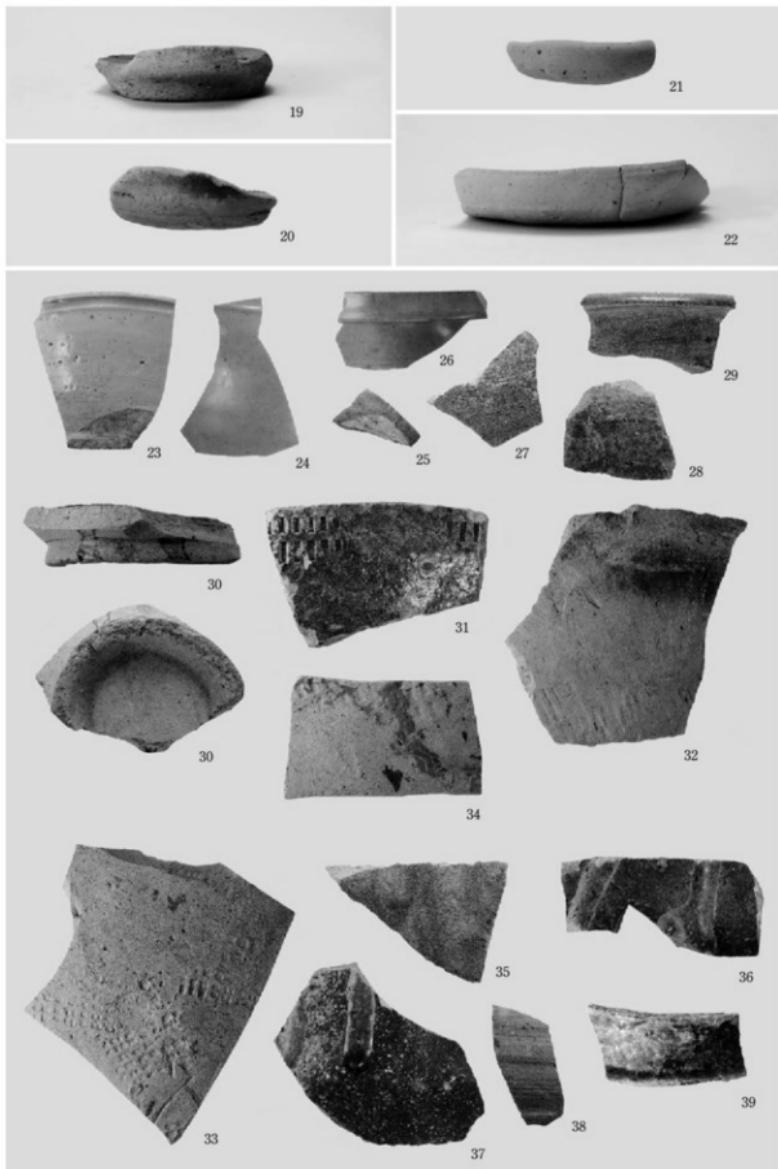


18

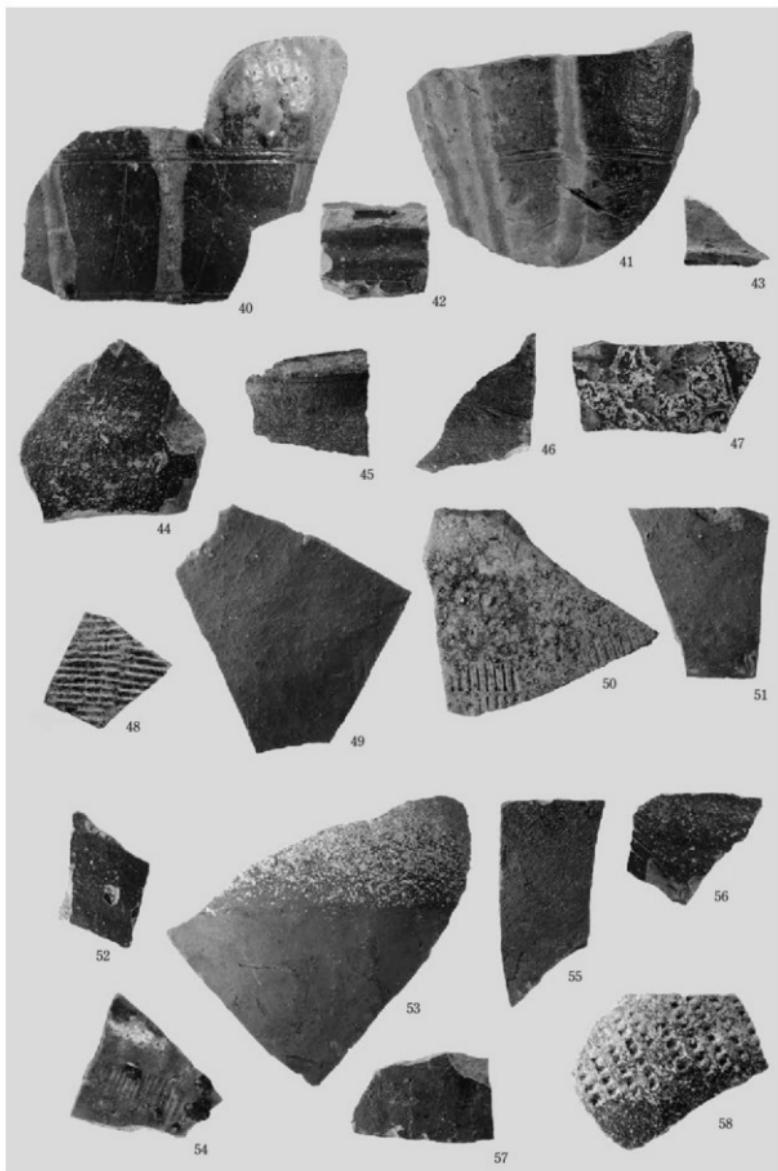


75

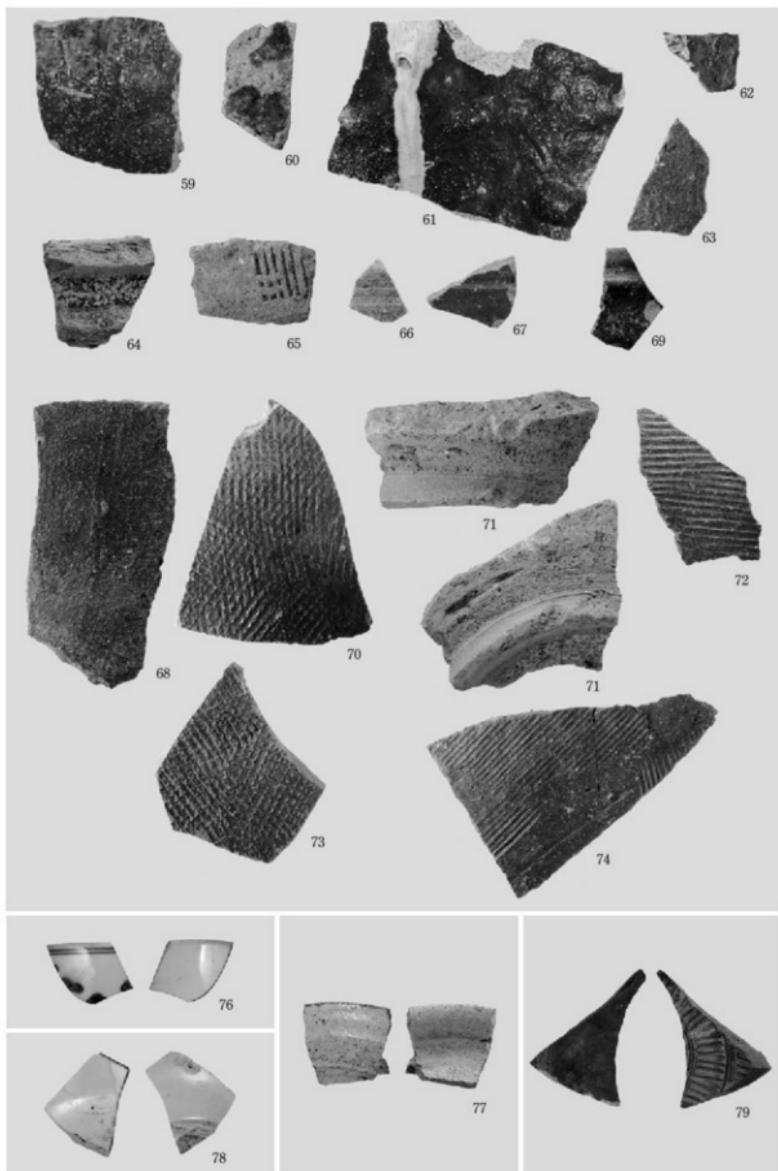
写真図版 44 遺物 土器類 2



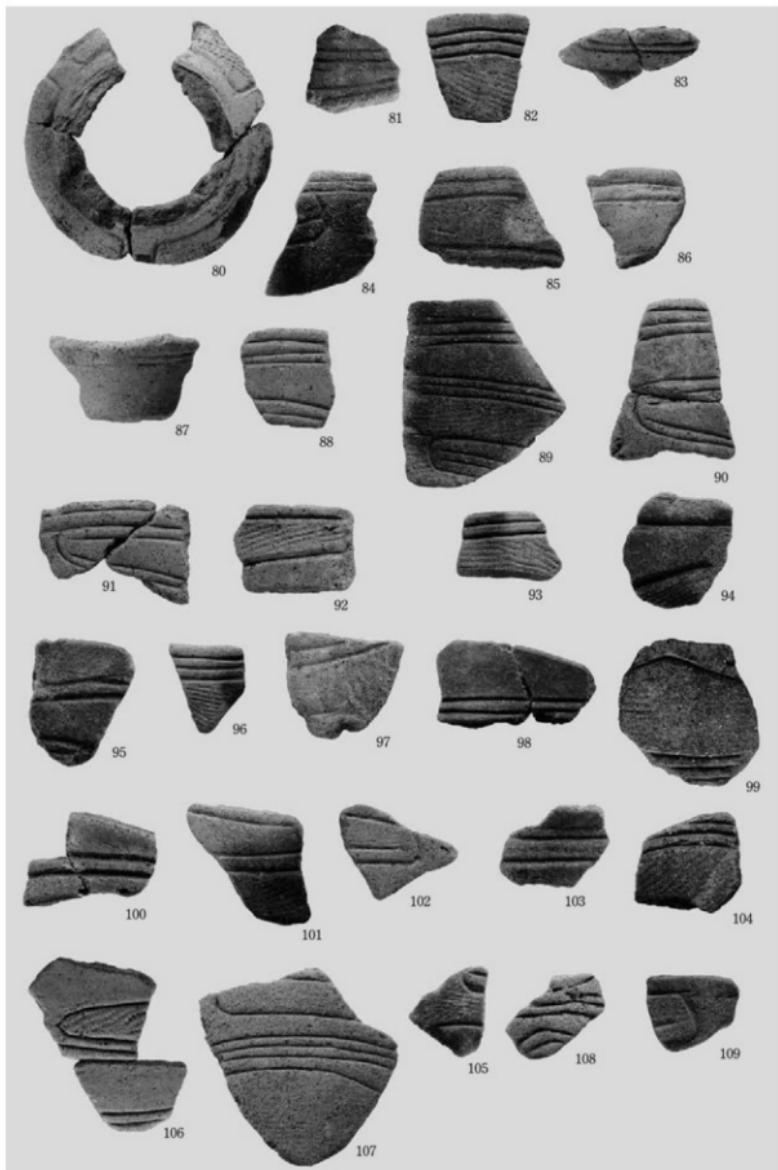
写真図版 45 遺物 かわらけ・陶磁器 1



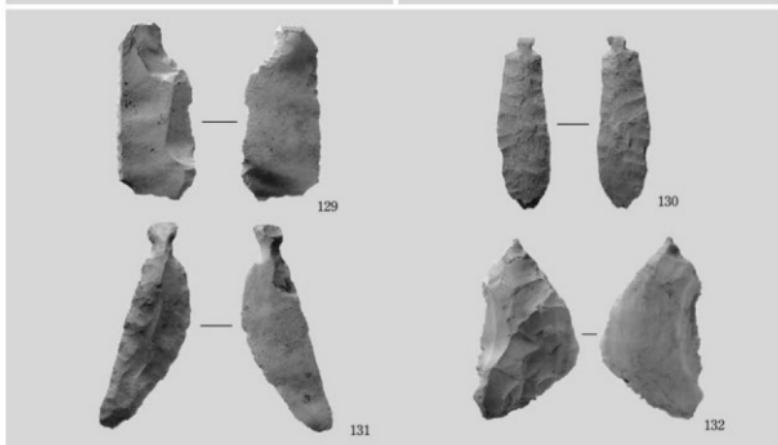
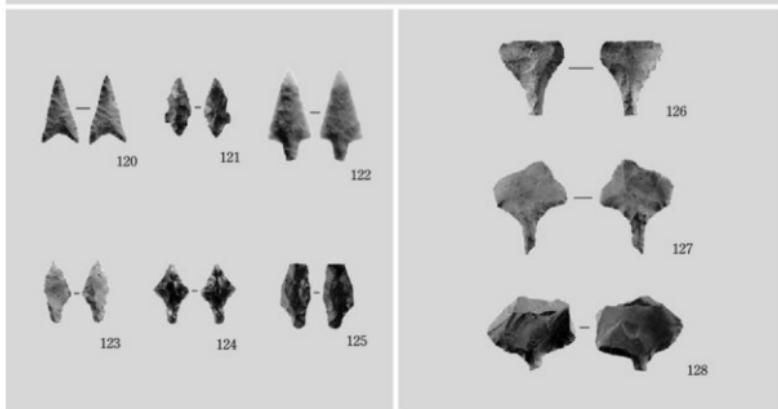
写真図版 46 遺物 陶磁器 2



写真図版 47 遺物 陶磁器 3



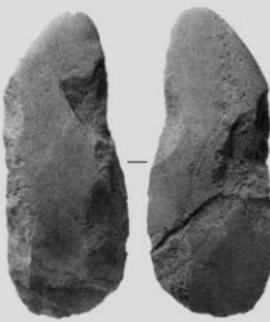
写真図版 48 遺物 弥生土器 1



写真図版 49 遺物 弥生土器 2・石器



136



133



—



134

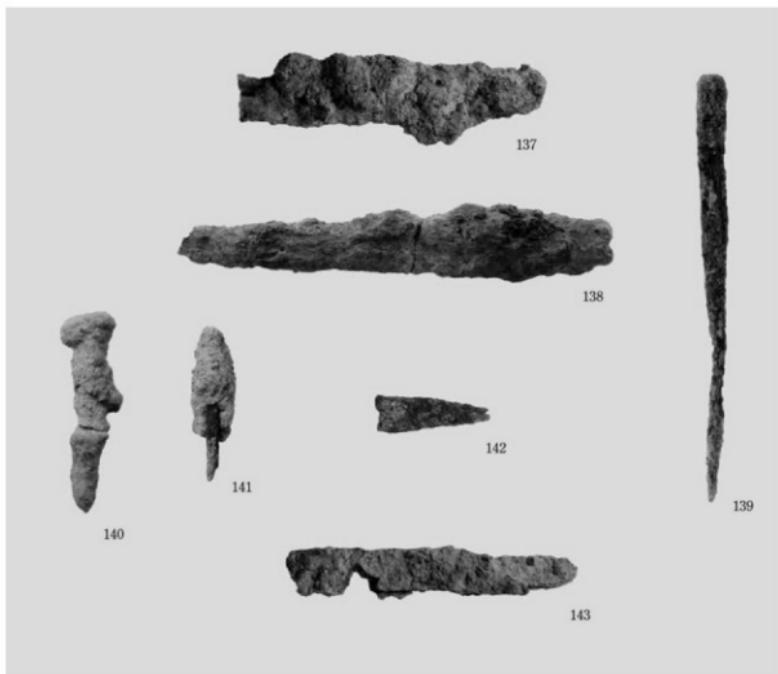


—



135

写真図版 50 遺物 土製品・石製品



写真図版 51 遺物 鉄製品・漆器

報告書抄録

ふりがな	ひがndeんいせきはくつちょうsaほうこくsho						
書名	彼岸田遺跡発掘調査報告書						
副書名	経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第612集						
編著者名	西澤正晴						
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2013年3月7日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
彼岸田遺跡	奥州市前沢区 白山字彼岸田 地内	3215	NE46-2344	39度 03分 42秒	141度 08分 40秒	2011.06.06 ～ 2011.11.04	3,742m ² 経営体育成基盤整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
彼岸田遺跡	散 布 地	繩文時代	土坑4		12世紀代の遺構や遺物が出土。		
	散 布 地	弥生時代	包含層1	弥生土器・石器	性格不明遺構のひとつは堀の可能性がある。		
	集 落	平安時代 (12世紀含む)	掘立柱建物3 竪穴建物1 土坑2 溝跡4 性格不明遺構2	土器器・須恵器・ 国産陶器(常滑・ 渥美・須恵器系)・ 貿易陶磁(白磁・ 陶器)			
	集 落	江戸時代	掘立柱建物2 井戸跡1 溝跡6	陶磁器・漆器			
		時期不明	掘立柱建物6 土坑7 溝跡6	陶磁器・漆器			
要 約	彼岸田遺跡における初めての本格的な調査である。調査の結果、平安時代の集落、12世紀代の集落、江戸時代の集落としての性格が判明している。とくに12世紀代における遺構や遺物の発見は重要な成果といえる。また、弥生時代中期の土器包含層も存在した。 調査区は狭く、完掘した遺構も少ないものの、上記のような成果をあげられた。さらなる詳細は面的な調査を待たなければならない。						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第612集
彼岸田遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成25年3月1日

発 行 平成25年3月7日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話 (019)638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り7-13
電 話 (0197)35-8443

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電 話 (019)654-2235

印 刷 株式会社 阿部印刷
〒020-0873 岩手県盛岡市松尾町2-2
電 話 (019)624-2242
